

国分寺市

# 武蔵国分寺跡 (第762次調査)

— 興和地所株式会社 宅地造成・分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2021. 9

国分寺市教育委員会



国分寺市

# 武蔵国分寺跡（第762次調査）

—興和地所株式会社 宅地造成・分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2021. 9

国分寺市教育委員会



# 例 言

1. 本報告は、東京都国分寺市西元町三丁目 26 番に所在する「武蔵国分寺跡」（国分寺市 No. 10・19 遺跡）の第 762 次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宅地造成および分譲住宅建設に伴う事前調査として実施された。調査面積は 364.7 m<sup>2</sup>である。
3. 本調査は、事業者である興和地所株式会社と国分寺市教育委員会およびトキオ文化財株式会社（当時、共和開発株式会社）の三者間で協定書を締結し、埋蔵文化財の取り扱いの措置、発掘調査の実施方法などに関わる各々の役割を定め、国分寺市教育委員会が実施し、トキオ文化財株式会社が支援業務を行なった。
4. 本調査の発掘から調査報告書作成に至るまでの費用は、興和地所株式会社が負担した。
5. 発掘調査・出土品等整理作業・報告書作成作業は、下記の期間に実施した。  
現地発掘調査 令和 2 年（2020）12 月 1 日から令和 3 年（2021）1 月 16 日  
出土品等整理作業 令和 3 年（2021）1 月 18 日から令和 3 年（2021）7 月 15 日  
報告書作成作業 令和 3 年（2021）7 月 16 日から令和 3 年（2021）9 月 30 日
6. 発掘調査・出土品等整理・報告書作成作業は以下の体制で実施した。発掘調査は国分寺市教育委員会の平塚恵介が担当し、発掘調査および出土品等整理・報告書作成作業の一部は、トキオ文化財株式会社の藤代聖一（現場代理人）・有吉重蔵・石村崇が作業を補佐した。
7. 本書の編集は有吉重蔵・石村崇が行い、原稿の執筆は、第 1 章第 1 節を平塚恵介・依田亮一（国分寺市教育委員会）、第 3 章を藤代聖一、第 2・4・5 章を有吉重蔵が執筆した。
8. 発掘調査における遺構写真撮影は藤代聖一、整理調査における遺物実測・拓本は佐藤徹、土田雅美、遺物写真撮影は土田雅美、遺構・遺物のトレース・版下作成は大津美衣里が行った。
9. 本書の挿図・表等の作成には Microsoft®Word®・Excel®、Adobe®Illustrator®・Photoshop®・Indesign® の各ソフトを用いた。
10. 発掘調査における各種の図面は、基本的に遺構平面図・断面図 1/20 で記録している。また、土の色調は『新版標準土色帖』（富士平工業株式会社刊）を参考にした。
11. 鉄製品の保存処理は、「埋蔵文化財の保存処理いしかわ」に依頼した。
12. 本調査にかかわる出土遺物、調査記録類は、国分寺市教育委員会にて保管している。
13. 発掘調査から整理作業を通じて、国士舘大学文学部考古学研究室に多大なる御指導、御協力を賜った。
14. 調査体制

調査機関 国分寺市教育委員会

調査担当者 平塚恵介

調査支援 トキオ文化財株式会社（旧社名：共和開発株式会社）

調査員 有吉重蔵

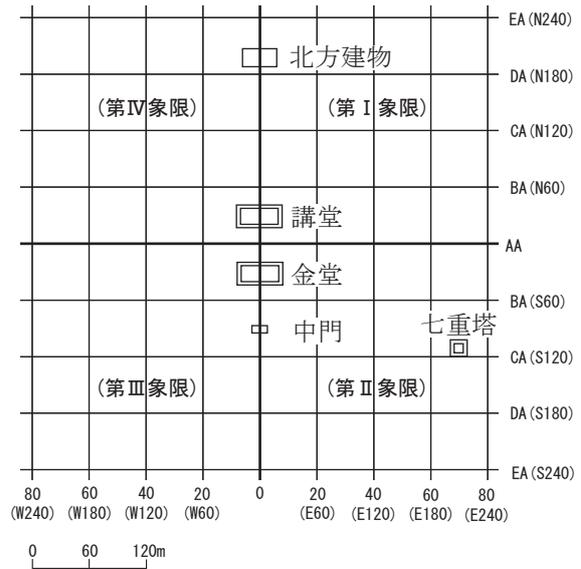
現場代理人 藤代聖一

発掘・整理調査参加者

飯塚俊一	石塚幹彦	石村 崇	扇田芳嗣	大津美衣里	齋藤正毅	佐藤大介
佐藤 徹	杉原基之	杉山久晶	高木明成	高田彩子	武内良太	竹田典正
土田雅美	寺本麗子	豊岡 仁	西村雅臣	福井泰弘	松本雄三	丸岡 祝
室賀明子	矢野聖次	矢花正之（以上、トキオ文化財株式会社）				
高田華穂	宇高美友子（以上、国士舘大学文学部考古学研究室）					

# 凡 例

1. 調査区内のグリッドは、国家座標系に合せて2 m × 2 mで設定し、東西はアルファベット、南北はアラビア数字で表記した。本文中の遺構配置表示については、この任意グリッドを使用し、後述する武蔵国分寺局地座標系については、第12・14図にのみ併記した。
2. 遺構平面図・断面図で使用した標高はT.P. (Tokyo Peil) である。国家座標については世界測地系座標を使用している。
3. 武蔵国分寺跡では、僧尼寺の広大な範囲を統一して調査するため、僧寺の伽藍中心軸線を基準に、金堂心の北26.276 mの中軸線上の点(コンクリート埋設)を座標原点とする局地座標系を用いている。僧寺中心軸は、真北から7° 07' 01"、磁北から0° 37' 01"それぞれ西偏する。遺構配置図表示(グリッド)の数字は、発掘基準線中心線からの距離を表す。最小の発掘区は3 × 3 mとし、その南と西に接する基準線に与えた記号の組み合わせにより呼称する。東西基準線はアルファベット2文字で表す。1文字目は原点をAとして60 m毎に以下B・C・D・・・とふり、2文字目はその内を3 m毎に20区に分けA～Tまでふる。南北基準線は数字で表す。原点を0とし、以下東西とも3 m毎に1・2・3・・・とふる。このようにして発掘区を呼称すると中軸線AAと0に接する区を除き、4つの象限に同一名称があることになるので、調査地区の記号に象限を入れMK(武蔵国分寺跡の略称) I～IVと呼んで区別する。本報告書では中心点からの距離をN・S・W・Eで表し、併用する。



4. 遺跡名を表記する際、国分寺市No.10・19遺跡(武蔵国分寺跡)はMK(武蔵国分寺跡の略称)、その後調査を手掛けた順番に次数(数字)を付している。今回の調査地点は762回目にあたり、略号はMK762である。
5. 遺構の表記は、以下の略号を用いた。また、縄文時代の遺構については、末尾に「J」を付した。

SI: 竪穴住居 SK: 土坑 P: 小穴

6. 遺構・遺物実測図の縮尺については、それぞれの図に記した。
7. 遺構・遺物実測図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

## 遺構

推定線	オーバーハング	硬質面	攪乱
火床面	カマド粘土	地山	IIIc層

## 遺物

須恵器断面	灰釉陶器断面	緑釉陶器断面	施釉範囲
木質範囲	転用硯砥面		

8. 遺物分布図で使用した記号は以下のとおりである。

瓦	灰釉陶器	緑釉陶器	須恵器	土師器	土師質土器
陶器	鉄製品	鉄滓	縄文土器	石器	石製品
					礫

9. 遺構・遺物に関する表において、( )は推定値、[ ]は残存値を表す。また、単位には特に記載のないものはすべて「cm」、重さは「g」である。

## 瓦観察表の表記方法

### 鏡瓦

- イ. 中房の形状
  - A 中房が凸型のもの
    - A1 断面方形のもの
    - A2 断面半球形のもの
  - B 中房の輪郭を凸線で表わすもの
    - B1 内部が平坦なもの
    - B2 内部が半球形に盛り上がるもの
- ロ. 弁の形状
  - S 素弁
    - A 弁の輪郭線(凸線)がなく、全体が盛り上がるもの
    - B 弁が輪郭線(凸線)のみで表わされるもの
    - C 弁の輪郭線(凸線)があり、内部全体が盛り上がるもの
    - D 弁の輪郭線(凸線)があり、内部が盛り上がるものの中房側が凹むもの
  - T 単弁
- ハ. 外区文様
 

a=素文、b=珠文、c=その他、などがあり、内・外縁の区別がないものは外縁側に記入。
- 二. 製作技法
  - A 接着技法
  - B さしこみ技法
    - I 一般的なもの
    - II 瓦当部が二段重ねで分厚く作られるもの
  - C 一本作り技法
    - I 瓦当裏面の布目にしぼりがあるもの
    - II 瓦当裏面の布目にしぼりがないもの
  - D はめこみ技法
    - I 半截後の男瓦広端側にはめこむもの
    - II 半截前の円筒の広端側にはめこみ、不要部分を切り落とすもの

### 宇瓦

- イ. 内区文様
 

G=重弧文、KK=均整唐草文、HK=偏行唐草文、H=へら書文、K=格子文、J=縄文、M=無文、0=その他
- ロ. 上・下区、脇区文様
 

a=素文、b=珠文、c=長円珠文、d=圏線文、e=鋸歯文、f=凸線文、g=その他
- ハ. 製作技法
  - A 接着技法
  - B さしこみ技法
  - C 折り曲げ技法
  - D 貼り付け技法 女瓦凸面に粘土を貼り付け瓦当部を作るもの
- 二. 顎の形態
  - A 直線顎
    - a 瓦当凸面を調整するもの
    - b 瓦当部と女瓦部の境部分のみ調整するもの
    - c 不調整のもの
  - B 段顎
    - B1 瓦当凸面と凹面が平行するもの
      - a 瓦当凸面および瓦当裏面を調整するもの
      - b 瓦当凸面のみ調整するもの
      - c 瓦当裏面のみ調整するもの
      - d 不調整のもの
    - B2 B1・B3以外のもの
    - B3 瓦当凸面が円みを持つもの
  - C 曲線顎
    - C1 一般的なもの
      - a 瓦当凸面を調整するもの
      - b 瓦当部と女瓦部の境部分を調整するもの
      - c 瓦当凸面および女瓦部の境部分を調整するもの
      - d 不調整のもの
    - C2 やや直線的なもの

### 男瓦・女瓦

- イ. 製作技法
 

<ul style="list-style-type: none"> <li>男瓦               <ul style="list-style-type: none"> <li>I 1-A1技法 有段粘土紐桶巻き作り</li> <li>I 1-B技法 有段粘土板桶巻き作り</li> <li>I 2-A1技法 無段隅落し粘土紐桶巻き作り</li> <li>I 3-A1技法 無段粘土紐桶巻き作り</li> <li>I 3-B技法 無段粘土板桶巻き作り</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>女瓦               <ul style="list-style-type: none"> <li>I -A1技法 粘土紐桶巻き作り</li> <li>I -B技法 粘土板桶巻き作り</li> <li>II 1-A1技法 凸面型粘土横紐一枚作り</li> <li>II 1-A2技法 凸面型粘土縦紐一枚作り</li> <li>II 1-B技法 凸面型粘土板一枚作り</li> <li>II 2-B技法 凹面型粘土板一枚作り</li> </ul> </li> </ul>
--	---
- ロ. 布目本数
 

3cm四方内での側端縁に並行する糸数と狭・広端縁に並行する糸数を表す
- ハ. 縄叩き本数
 

3cm四方内での縄数を表す
- 二. 糸の撚り
  - L 縄圧痕が右上がり左下がりの傾斜をなすもの
  - R 縄圧痕が左上がり右下がりの傾斜をなすもの
- ホ. 粘土板合せ目
 

佐原分類のS・Zによる(佐原1972)
- ヘ. 布合せ目
 

ホに準ずる
- ト. 叩き締め円弧
  - A 叩き締め円弧が一方方向
  - B 叩き締め円弧が「ハ」字状をなすもの



# 目 次

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 調査地区の概観 .....	5
1. 遺跡の位置と立地環境 .....	5
2. 武蔵国分寺跡の概要と調査地区 .....	5
3. 層序 .....	8
第3章 調査の経過 .....	9
第4章 検出された遺構と遺物 .....	13
1. 調査の概要 .....	13
2. 縄文時代 .....	13
(1) 土坑 .....	13
(2) 出土遺物 .....	15
3. 平安時代 .....	17
(1) 竪穴住居 .....	17
(2) 土坑 .....	66
(3) 小穴 .....	72
(4) 遺構外出土遺物 .....	78
第5章 まとめ .....	81
1. 縄文時代の陥し穴について .....	81
2. 平安時代の遺構について .....	83

引用・参考文献

報告書抄録

奥付

# 挿図目次

第 1 図	開発計画と確認調査区設定状況……………	2	第 40 図	SI836 出土遺物実測図……………	40
第 2 図	確認調査結果（A・D・E トレンチ）……………	3	第 41 図	SI837 カマド実測図……………	40
第 3 図	A トレンチ（南から）……………	3	第 42 図	SI837 遺物出土状況図（上図：全点・ 下図：実測個別別）……………	41
第 4 図	D トレンチ（西から）……………	3	第 43 図	SI837 出土遺物実測図……………	42
第 5 図	E トレンチ（東から）……………	3	第 44 図	SI838 実測図……………	44
第 6 図	提供公園整備工事の状況……………	4	第 45 図	SI838 カマド実測図……………	45
第 7 図	提供公園内に設置した遺跡解説板……………	4	第 46 図	SI838 遺物出土状況図（全点）……………	45
第 8 図	武蔵国分寺位置図……………	6	第 47 図	SI838 遺物出土状況図（実測個別別）……………	46
第 9 図	史跡武蔵国分寺跡主要伽藍等配置図……………	7	第 48 図	SI838 出土遺物実測図（1）……………	47
第 10 図	推定付属諸院の位置……………	8	第 49 図	SI838 出土遺物実測図（2）……………	48
第 11 図	調査区基本層序……………	8	第 50 図	SI838 出土遺物実測図（3）……………	49
第 12 図	調査区およびグリッドメッシュ設定図……………	10	第 51 図	SI839 実測図・遺物出土状況図（全点）……………	51
第 13 図	調査区南北（A-A'）・ 東西（B-B'）土層断面……………	11	第 52 図	SI840 実測図……………	53
第 14 図	A・F トレンチ遺構配置図……………	12	第 53 図	SI840 カマド実測図……………	54
第 15 図	SK3491J・SK3493J・SK3494J 実測図……………	14	第 54 図	上図：SI840 掘方実測図・ 下図：遺物出土状況図（全点）……………	55
第 16 図	縄文時代出土遺物……………	15	第 55 図	SI840 遺物出土状況図（実測個別別）……………	56
第 17 図	SI831 実測図……………	18	第 56 図	SI840 出土遺物実測図（1）……………	57
第 18 図	SI831 遺物出土状況図（上図：全点・ 下図：実測個別別）……………	19	第 57 図	SI840 出土遺物実測図（2）……………	58
第 19 図	SI831 出土遺物実測図……………	20	第 58 図	SI840 出土遺物実測図（3）……………	59
第 20 図	上図：SI832 実測図・ 下図：遺物出土状況図（全点）……………	21	第 59 図	SI840 出土遺物実測図（4）……………	60
第 21 図	SI833 実測図……………	22	第 60 図	SI841・SI842 実測図……………	63
第 22 図	SI833 カマド実測図……………	23	第 61 図	SI841・SI842 遺物出土状況図 （上図：全点・下図：実測個別別）……………	64
第 23 図	SI833 遺物出土状況図（全点）……………	23	第 62 図	SI841 遺物実測図……………	65
第 24 図	SI833 出土遺物実測図……………	24	第 63 図	SI842 遺物実測図……………	65
第 25 図	SI834・SI835 実測図……………	25	第 64 図	SK3476～SK3480 実測図……………	67
第 26 図	SI834・SI835 掘方実測図……………	25	第 65 図	SK3481～SK3485 実測図……………	69
第 27 図	SI834 カマド実測図……………	26	第 66 図	SK3486～SK3489 実測図……………	71
第 28 図	SI834 遺物出土状況図（全点）……………	26	第 67 図	SK3490・SK3492・SK3495 実測図……………	73
第 29 図	SI834 遺物出土状況図（実測個別別）……………	27	第 68 図	SK3480・SK3482・SK3483・SK3489 出土遺物実測図……………	74
第 30 図	SI834 出土遺物実測図（1）……………	28	第 69 図	小穴実測図（1）……………	75
第 31 図	SI834 出土遺物実測図（2）……………	29	第 70 図	小穴実測図（2）……………	76
第 32 図	SI835 実測図……………	31	第 71 図	小穴実測図（3）……………	77
第 33 図	SI835 カマド実測図……………	32	第 72 図	遺構外出土遺物実測図……………	78
第 34 図	SI835 遺物出土状況図（上図：全点・ 下図：実測個別別）……………	33	第 73 図	出土文字集成……………	79
第 35 図	SI835 出土遺物実測図（1）……………	34	第 74 図	縄文時代陥し穴分布図……………	82
第 36 図	SI835 出土遺物実測図（2）……………	35	第 75 図	SI838 カマド 女瓦接合図……………	85
第 37 図	SI836・SI837 実測図……………	37	第 76 図	武蔵国分寺区画溝埋没過程……………	85
第 38 図	SI836 カマド実測図……………	38	第 77 図	第Ⅲ期（衰退期）関連調査地区の 位置と出土遺物……………	87
第 39 図	SI836 遺物出土状況図（上図：全点・ 下図：実測個別別）……………	39			

## 表目次

第 1 表	縄文土器観察表……………	16	第 20 表	SI838 出土男瓦観察表……………	50
第 2 表	縄文石器観察表……………	16	第 21 表	SI838 出土女瓦等観察表……………	50
第 3 表	SI831 出土土器観察表……………	20	第 22 表	SI840 出土土器観察表 (1)……………	60
第 4 表	SI831 出土男瓦観察表……………	20	第 23 表	SI840 出土土器観察表 (2)……………	61
第 5 表	SI831 出土鉄滓観察表……………	20	第 24 表	SI840 出土石製品観察表……………	61
第 6 表	SI833 出土女瓦観察表……………	24	第 25 表	SI840 出土鏡瓦観察表……………	61
第 7 表	SI834 出土土器観察表……………	29	第 26 表	SI840 出土男瓦観察表……………	61
第 8 表	SI834 出土女瓦観察表……………	29	第 27 表	SI840 出土女瓦観察表……………	61
第 9 表	SI834 出土鉄製品観察表……………	30	第 28 表	SI840 出土鉄製品観察表……………	62
第 10 表	SI834 出土鉄滓観察表……………	30	第 29 表	SI841 出土土器観察表……………	65
第 11 表	SI835 出土土器観察表……………	35	第 30 表	SI841 出土鉄製品観察表……………	65
第 12 表	SI835 出土男瓦観察表……………	35	第 31 表	SI842 出土土器観察表……………	65
第 13 表	SI835 出土鉄製品観察表……………	36	第 32 表	SK3480・SK3482・SK3483・SK3489 出土土器観察表……………	74
第 14 表	SI835 出土鉄滓観察表……………	36	第 33 表	小穴計測表……………	77
第 15 表	SI836 出土土器観察表……………	40	第 34 表	遺構外出土土器観察表……………	78
第 16 表	SI837 出土土器観察表……………	43	第 35 表	遺構外出土宇瓦観察表……………	78
第 17 表	SI837 出土女瓦観察表……………	43	第 36 表	遺構外出土女瓦観察表……………	78
第 18 表	SI837 出土鉄製品観察表……………	43	第 37 表	出土遺物集計表……………	80
第 19 表	SI838 出土土器観察表……………	50			

## 図版目次

### 図版 1

1. A トレンチ全景 (西から)
2. A トレンチ全景 (東から)

### 図版 2

1. B トレンチ全景 (西から)
2. C トレンチ全景 (西から)
3. D トレンチ全景 (西から)
4. E トレンチ全景 (西から)
5. F トレンチ全景 (南から)
6. G トレンチ全景 (南から)
7. H トレンチ全景 (西から)
8. I トレンチ全景 (西から)

### 図版 3

1. 基本層序 (南から)
2. SK3491J 完掘全景 (南から)
3. SK3493J 完掘全景 (南から)
4. SK3494J 完掘全景 (北から)
5. SI831 床面検出状況 (北から)
6. SI831 掘方全景 (南から)
7. SI831 土層断面 (東から)
8. SI831P1 全景 (東から)

### 図版 4

1. SI831P2 全景 (北から)
2. SI831P3 全景 (東から)
3. SI832 掘方全景 (南から)
4. SI832 土層断面 (南から)
5. SI833 床面検出状況 (北から)
6. SI833 土層断面 (北から)
7. SI833 カマド廃絶時 (西から)
8. SI833 カマド土層断面 (南から)

### 図版 5

1. SI833P1 全景 (西から)
2. SI833P2 全景 (南から)
3. SI834 床面検出状況 (西から)
4. SI834 東西土層断面 (南から)
5. SI834 南北土層断面 (東から)

### 図版 6

1. SI834 掘方全景 (西から)
2. SI834 遺物出土状況 (南から)
3. SI834 カマド廃絶時 (西から)
4. SI834 カマド掘方 (西から)
5. SI834 カマド南北土層断面 (西から)
6. SI834 カマド東西土層断面 (北から)
7. SI834 床下土坑全景 (西から)
8. SI834P1 全景 (北から)

### 図版 7

1. SI835 床面検出状況 (東から)
2. SI835 南北土層断面 (東から)
3. SI835 東西土層断面 (北から)
4. SI835 掘方全景 (北東から)
5. SI835 遺物出土状況 (南から)

### 図版 8

1. SI835 カマド廃絶時 (西から)
2. SI835 カマド南北土層断面 (西から)
3. SI835 カマド東西土層断面 (北から)
4. SI835P1 全景 (北から)
5. SI836 (左)・SI837 (右) 床面検出状況 (北から)

#### 図版 9

1. SI836 東西土層断面 (南から)
2. SI836 南北土層断面 (東から)
3. SI836 (左)・SI837 (右) 掘方全景 (北から)
4. SI836 カマド廃絶時 (南から)
5. SI836 カマド東西土層断面 (南から)
6. SI836 カマド南北土層断面 (西から)
7. SI837 東西土層断面 (南から)
8. SI837 南北土層断面 (東から)

#### 図版 10

1. SI837 カマド廃絶時 (南から)
2. SI837 カマド南北土層断面 (南から)
3. SI838 床面検出状況 (西から)
4. SI838 東西土層断面 (北から)
5. SI838 掘方全景 (西から)
6. SI838 遺物出土状況 (西から)
7. SI838 カマド廃絶時 (西から)
8. SI838 カマド遺物出土状況 (西から)

#### 図版 11

1. SI838 カマド南北土層断面 (西から)
2. SI838 カマド東西土層断面 (南から)
3. SI838P1 全景 (北から)
4. SI838P2 全景 (東から)
5. SI838P3 全景 (東から)
6. SI838P4 全景 (東から)
7. SI839 床面検出状況 (北から)
8. SI839 土層断面 (北から)

#### 図版 12

1. SI840 床面検出状況 (北から)
2. SI840 南北土層断面 (東から)
3. SI840 東西土層断面 (北から)
4. SI840 掘方全景 (北から)
5. SI840 遺物出土状況 (北から)

#### 図版 13

1. SI840 カマド廃絶時 (西から)
2. SI840 カマド近景 (南西から)
3. SI840 カマド近景 (北西から)
4. SI840 カマド南北土層断面 (西から)
5. SI840 カマド東西土層断面 (南から)
6. SI840 床下土坑全景 (北から)
7. SI840P1 全景 (西から)
8. SI840P2 全景 (北から)

#### 図版 14

1. SI840P3 全景 (西から)
2. SI840P5 全景 (西から)
3. SI840P6 全景 (西から)
4. SI840P7 全景 (南から)
5. SI841 床面検出状況 (南から)
6. SI841・SI842 土層断面 (南から)
7. SI841P1 全景 (東から)
8. SI841P1 全景 (南から)

#### 図版 15

1. SK3477 完掘全景 (北から)
2. SK3479 完掘全景 (東から)
3. SK3480 完掘全景 (北から)
4. SK3481 完掘全景 (東から)
5. SK3482 完掘全景 (北から)
6. SK3483 完掘全景 (南から)
7. SK3487 完掘全景 (西から)
8. SK3489 完掘全景 (北から)
9. SK3490 完掘全景 (南から)

10. P-1 完掘全景 (南から)
11. P-2 完掘全景 (西から)
12. P-3 完掘全景 (西から)
13. P-4 完掘全景 (東から)
14. P-6 完掘全景 (南から)
15. P-7 完掘全景 (南から)
16. P-8 完掘全景 (東から)
17. P-12 完掘全景 (西から)
18. P-15 完掘全景 (西から)

#### 図版 16

1. 作業風景
2. 作業風景
3. 作業風景
4. 作業風景
5. 作業風景
6. 作業風景
7. 作業風景
8. 作業風景

#### 図版 17

1. 縄文時代出土遺物
2. SI831 出土遺物
3. SI833 出土遺物

#### 図版 18

1. SI834 出土遺物

#### 図版 19

1. SI835 出土遺物

#### 図版 20

1. SI836 出土遺物
2. SI837 出土遺物

#### 図版 21

1. SI838 出土遺物 (1)

#### 図版 22

1. SI838 出土遺物 (2)

#### 図版 23

1. SI840 出土遺物 (1)

#### 図版 24

1. SI840 出土遺物 (2)

#### 図版 25

1. SI840 出土遺物 (3)

#### 図版 26

1. SI841 出土遺物
2. SI842 出土遺物
3. SK3480・3482・3483・3489 出土遺物
4. 遺構外出土遺物

# 第1章 調査に至る経緯

## 文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出

令和2年9月29日付けで、興和地所株式会社（以下、事業主と略）より国分寺市教育委員会（以下、市教委）へ、文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された（国教教ふ収第505号）。事業予定地は市内西元町三丁目1,985番（住居表示26番地）先にあたり、事業の目的は面積3,420.41㎡の敷地に対して宅地造成、22棟からなる分譲住宅建設、敷地南西の提供公園の造成、そしてガス・水道・電気等のインフラ工事を行う計画であった。当該地は埋蔵文化財包蔵地の武蔵国分寺跡（国分寺市No.10・19遺跡）の範囲に該当し、僧寺七重塔東側近傍の寺院地区画内に所在しており、これまでも周辺では各種開発に伴う発掘調査で古代の武蔵国分寺跡に関わる遺構・遺物が検出されているため、市教委は周辺での過去の調査履歴と今次の開発計画を照合しつつ措置に対する検討を行った。その結果、工事の掘削深度が深くなることが予定されている、敷地中央部を東西に横切る引き込み道路下部の新設下水管敷設予定範囲（GL-146～192）と、各住戸に付帯する雨水浸透トレンチや提供公園の防火水槽（GL-140）の一部に対して遺跡の存否・分布密度を探るための確認調査を要すると判断し、その旨を明記した埋蔵文化財協議書を10月2日付けで事業者へ返送すると同時に、東京都教育委員会（以下、都教委）宛てにも本届出書を進達した。その後、同月16日付けで都教委から事業者・市教委に対して確認調査実施の協力と、工事施工により遺構等埋蔵文化財の保存に影響がある場合は、工事着手する前に発掘調査を実施するよう通知が寄せられた（2教地管理第2498号）。なお、本工事に係る事業は1,000㎡を超える大型開発に該当しており、10月21日付けで、別途、国分寺市まちづくり条例に基づく関係各課事前協議書の手続きも踏まえている（国教教ふ収第577号）。

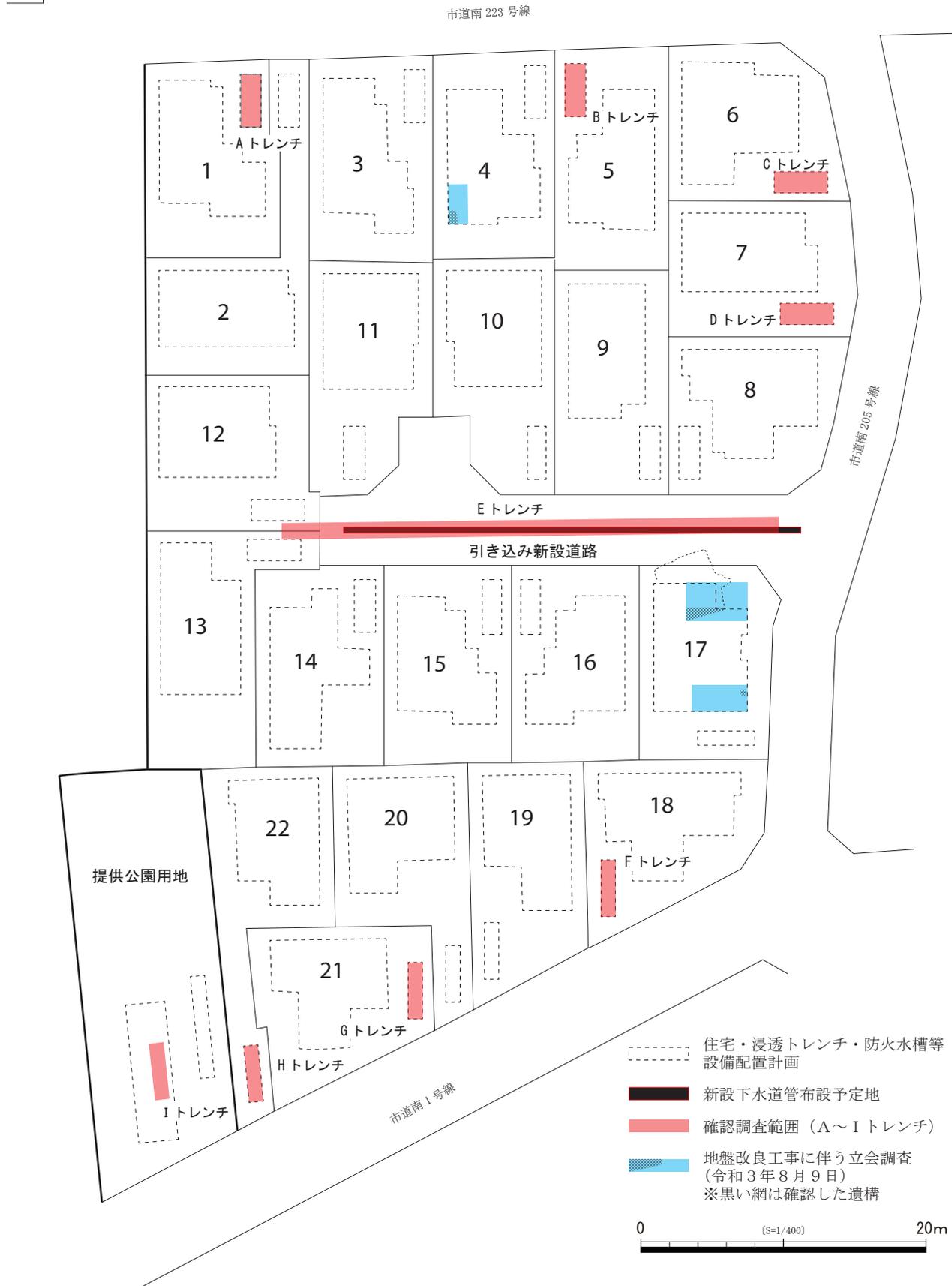
## 確認調査（武蔵国分寺跡第761次調査）から本調査へ

上記の手続きと並行しながら、市教委は事業者と確認調査の実施に向けた協議を進め、現地は前用途物件の構造物撤去工事がすでに終了して更地の状況になっていたため、10月9日に国分寺市遺跡調査会に対して確認調査実施の指示簿を発出し、19～23日の両日に確認調査の予定を計画した。その対象範囲は第1図に示したとおり、1・5・6・7・18・21・22号棟および提供公園予定地内の各浸透トレンチを対象に幅1.0m×長さ4.0mの調査区を8箇所（A～D・F～I トレンチ）、新設下水道管敷設範囲に幅1.0m×長さ30mの調査区を1箇所（E トレンチ）、計9箇所（面積62㎡）の調査区を設け、公費にて対応することとした（武蔵国分寺跡 第761次調査）。

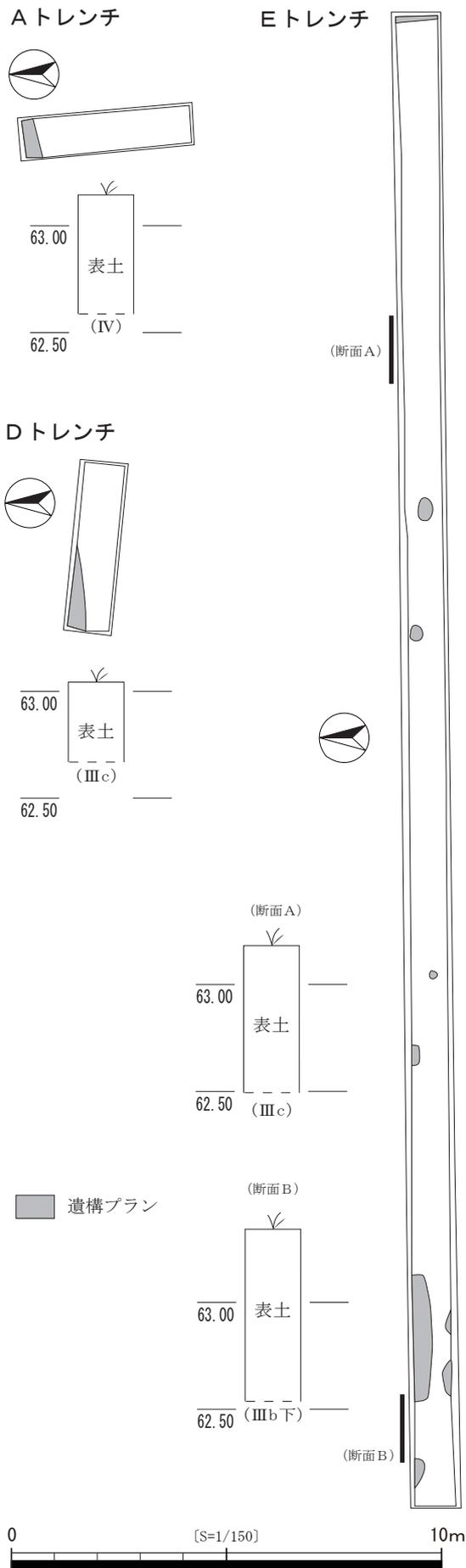
確認調査は19日より着手したが、敷地内は案外と畑の耕作土による削平が広範囲に及んでおり、重機を用いて表土を取り除くと、その直下でソフトローム層が検出される調査区が相次いだ。

表土の堆積厚は、敷地北側のA～D トレンチでは約40～55cm、南側では約80～110cmを有し、ローム層の検出面における勾配は、北側に対して南側で低く傾斜している状況が判明した。なお、E トレンチでは地表下約80cmの深度でローム層が現れるが、ロームに対する黒色土のプランとして堅穴住居1軒、土坑7基、不明遺構1基が確認されたほか、A・D トレンチでも古代の遺構プランがそれぞれ1基ずつ把握された（第2～5図）。

そのため、翌20日に事業者と市教委間で、以降の埋蔵文化財の取扱いにかかる再協議を行い、確認調査で遺構が把握された範囲を中心に本調査実施範囲を確定し、事業者負担による本調査へ移行する手続きを進めることにした。そして、11月30日付けで事業者・市教委・調査請負会社（トキオ文化財株式会社）の3者間で「興和地所株式会社宅地造成・分譲住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、12月1日から翌年1月29日までに現地の発掘調査を実施することとした。なお、調査次数は確



第1図 開発計画と確認調査区設定状況



第3図 Aトレンチ (南から)



第4図 Dトレンチ (西から)



第5図 Eトレンチ (東から)

第2図 確認調査結果 (A・D・Eトレンチ)

認調査と区別して「武蔵国分寺跡第762次調査」とし、図面・写真・遺物等の管理をはかることにした。調査担当者は法99条に基づき市教委の職員を配置し、発掘調査・出土品等整理作業・報告書作成業務を含めた全般的な支援業務をトキオ文化財株式会社が担う調査態様として臨んだ。

### 本調査終了後の現地（提供公園内設置の遺跡解説板）

本調査終了後ただちに調査請負会社から事業者へ現地の引き渡しを行い、各種造成工事に着手することとなった。その折、前述のとおり、事業用地内の南西隅には国分寺市まちづくり条例に基づく提供公園が設けられたが、市の公園所管部署（建設環境部緑と建築課）は、国史跡地に近い当該公園の立地的な特性を踏まえ、公園内に今次の発掘調査成果を紹介する遺跡解説板の制作を市教委へ依頼した。その結果、現地には第7図に示した看板を設置する予定で、目下、工事が進められている（提供公園は、「西元町万葉公園」として令和3年12月に供用開始の予定である）。開発に伴う緊急発掘調査は、調査終了後に遺跡は工事で壊され、現地に何も残らないことが多いなかで、この度、事業者の多大なる御理解と御協力を得て遺跡に関わるモニュメントを設置できたことに対して、深く感謝を申し上げる次第である。



第6図 提供公園整備工事の状況

## 武蔵国分寺と人々の住まい

奈良の平城京に都が置かれた頃の日本は、飢饉や災害・疫病等に見舞われるなど混乱した世の中で、天平13年(741)に聖武天皇は仏教の力で国を治めようと、全国に「国分寺建立の詔」を發布しました。現在の東京都・埼玉県と神奈川県の一部を含む武蔵国は20郡(後に21郡)で構成される大國でしたが、国分寺の造営には木材や瓦など大量の建築資材と労働力が必要とされ、国内全部の協力を集めて工事は完成しました。

武蔵国分寺は、都と地方を結ぶ官道であった東山道武蔵路を挟んで東側に僧寺、西側に尼寺を配し、国分寺崖線下の豊富な湧水を背景として、僧・尼寺の周辺には寺院を支えた多くの人々が暮らす集落が東西2km、南北1.5kmの範囲に広がっていました。

この公園付近は、七重塔(塔1)から約100mの距離を隔てた僧寺伽藍地の東辺にあり、寺院地の区画内に位置しています。

国分寺市内では、昭和49年以降、各種の開発に伴って武蔵国分寺の発掘調査が多くの場で行われています。公園の周辺では竪穴住居や竪立柱建物などの遺構が分布していますが、令和2年12月に東側の敷地で宅地造成工事に先駆けて実施した発掘調査では、奈良・平安時代の竪穴住居12軒、土坑17基の他、縄文時代に猪や鹿などの捕獲した落とし穴などの遺構も発見されました(武蔵国分寺跡第762次調査)。

通常、奈良・平安時代の竪穴住居は、一边が約3~4m四方で、深さは30~50cm程の規模を有し、北もしくは東側の壁に粘土を用いたカマドを築いています。カマドからは焼けた土や炭、煮炊きをするための土器(土師器甕)が出土しました。

また、カマドの構築材料の中には粘土だけではなく、本来は寺の主要な建物の屋根を飾った瓦を、意図的に補強材として使っています。このようなカマドは、瓦を手に入れることが容易であった国分寺周辺の集落ならではの特徴といえます。

●武蔵国分寺の伽藍配置

●公園周辺の発掘調査状況(令和3年3月時点)

●武蔵国分寺跡 第762次発掘調査

令和3年(2021) 月設置  
問い合わせ先: 042(325)0111(代)

第7図 提供公園内に設置した遺跡解説板

## 第2章 調査地区の概観

### 1. 遺跡の位置と立地環境

「武蔵国分寺跡」（国分寺市No.10・19遺跡）は、JR中央線西国分寺駅の南方約1km地点に位置する僧寺金堂跡を中心に、周辺の国分寺市西元町1～4丁目に所在する（第8・9図）。この付近の地形は関東平野の南西部を占める武蔵野台地の南端部に当たり、南方の多摩川と沖積低地に向かって古多摩川の流路沿いに河岸段丘が発達している。東西を横断する通称「ハケ」と呼ばれる国分寺崖線（比高差約15m）を境に、北方高位（標高70～90m）の武蔵野段丘面と南方低位（標高55～66m）の立川段丘面に区分され、遺跡は両段丘にまたがって所在するが、その大部分は立川段丘上にあつて、平坦に見える立川段丘面も全体に南東方向に緩やかに傾斜している。国分寺市・府中市・小金井市周辺の立川段丘面にはいくつかの細長い凹地が認められ、その一つが市内西元町付近に端を發し、府中市幸町～東京農工大大農場～天神町～浅間山～野川まで続き、特に東京農工大大農場以東では凹地を介して南側が1メートル以上も低い小崖を形成している。この小崖の南北では立川礫層に堆積する立川ローム層の様相に差異があり、上位のTc1面と下位のTc2面に区分されており（松田・大倉1988）、武蔵国分寺跡はTc1面に立地している。ちなみに本遺跡の南方約2.0kmに位置する武蔵国府跡はTc2面に立地している。

国分寺崖線下には現在も湧水地が点在し、湧水量が豊富な一画が「お鷹の道・真姿の池湧水群」として全国名水百選選定地となっている。また、尼寺北西の「黒鐘谷」やJR中央線国分寺駅南西の「押切間」など、崖線を挟む幾つもの開析谷が形成され、「お鷹の道・真姿の池湧水群」を始め各所の湧水を集めて東流する清水川（元町用水）が野川に合流する。

### 2. 武蔵国分寺跡の概要と調査地区

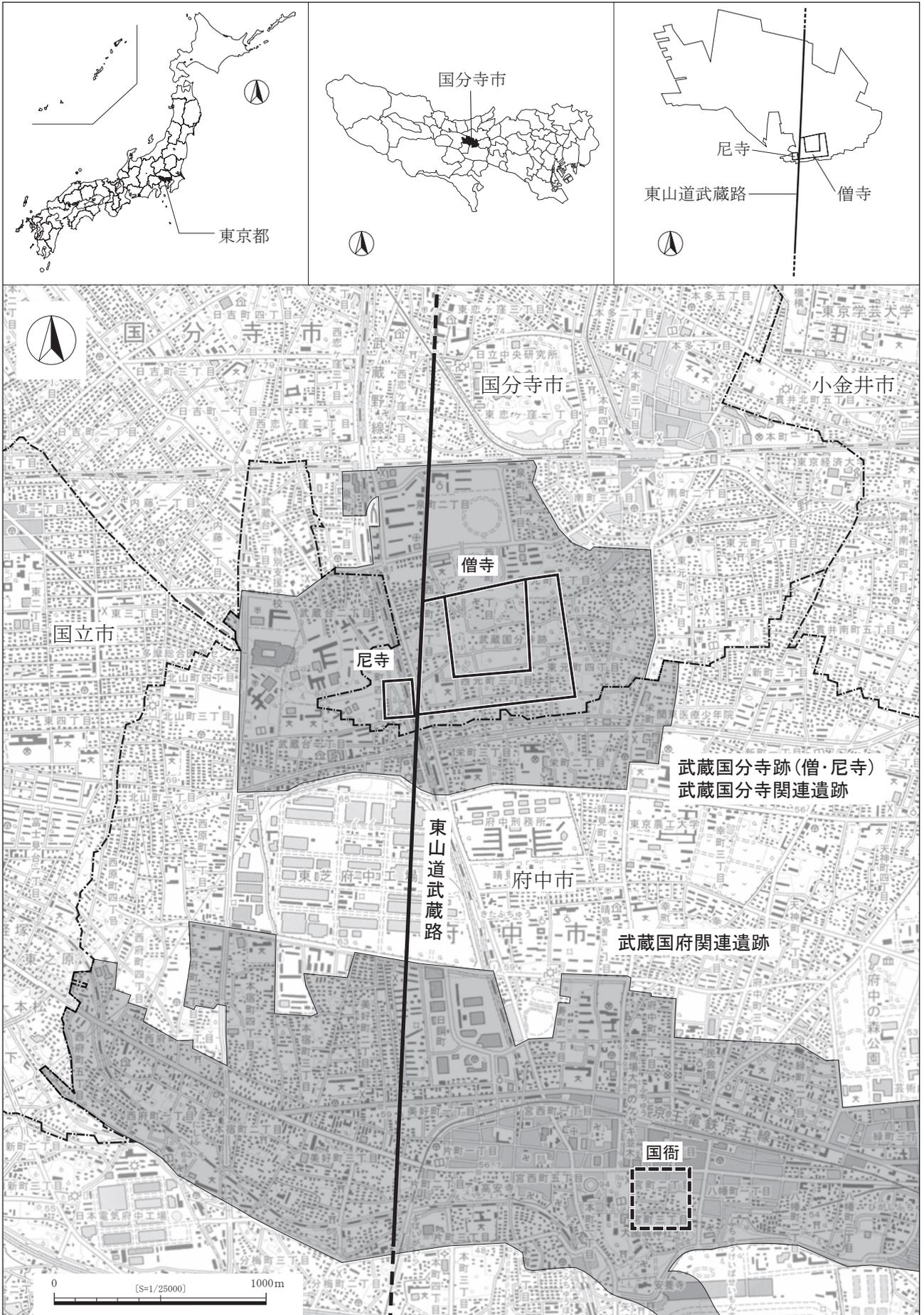
遺跡は、昭和31年の日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会による僧寺伽藍中枢部の金堂・講堂跡などの発掘調査（仏教遺跡調査特別委員会1984）を嚆矢として、昭和49年以降は市の常設調査機関（国分寺市遺跡調査会）による継続調査が行われており、今回の調査で762次を数える状況となっている。これまでの調査で明らかになってきた国分寺の規模と構造は、僧尼寺を含む南辺の南北中軸線上の金堂に設計の中心を置き、中央部を占める僧寺が寺院地・伽藍地・中枢部の三重に、南西隅を占める尼寺が伽藍地・中枢部の二重にそれぞれ区画され、僧尼寺伽藍地の間を東山道武蔵路（幅約12.0m）が南北に走行している（第9図）。

僧寺伽藍地は幅2.1～3.0m、深さ0.8～1.5mの素掘り溝で区画され、規模は北辺384.1m、東辺428.3m、南辺356.3m、西辺365.4mを測り、中門の両翼から延びる掘立柱塀と素掘り溝で圍繞された中枢部の規模は東西約156.0m、南北約132.0mを測る。

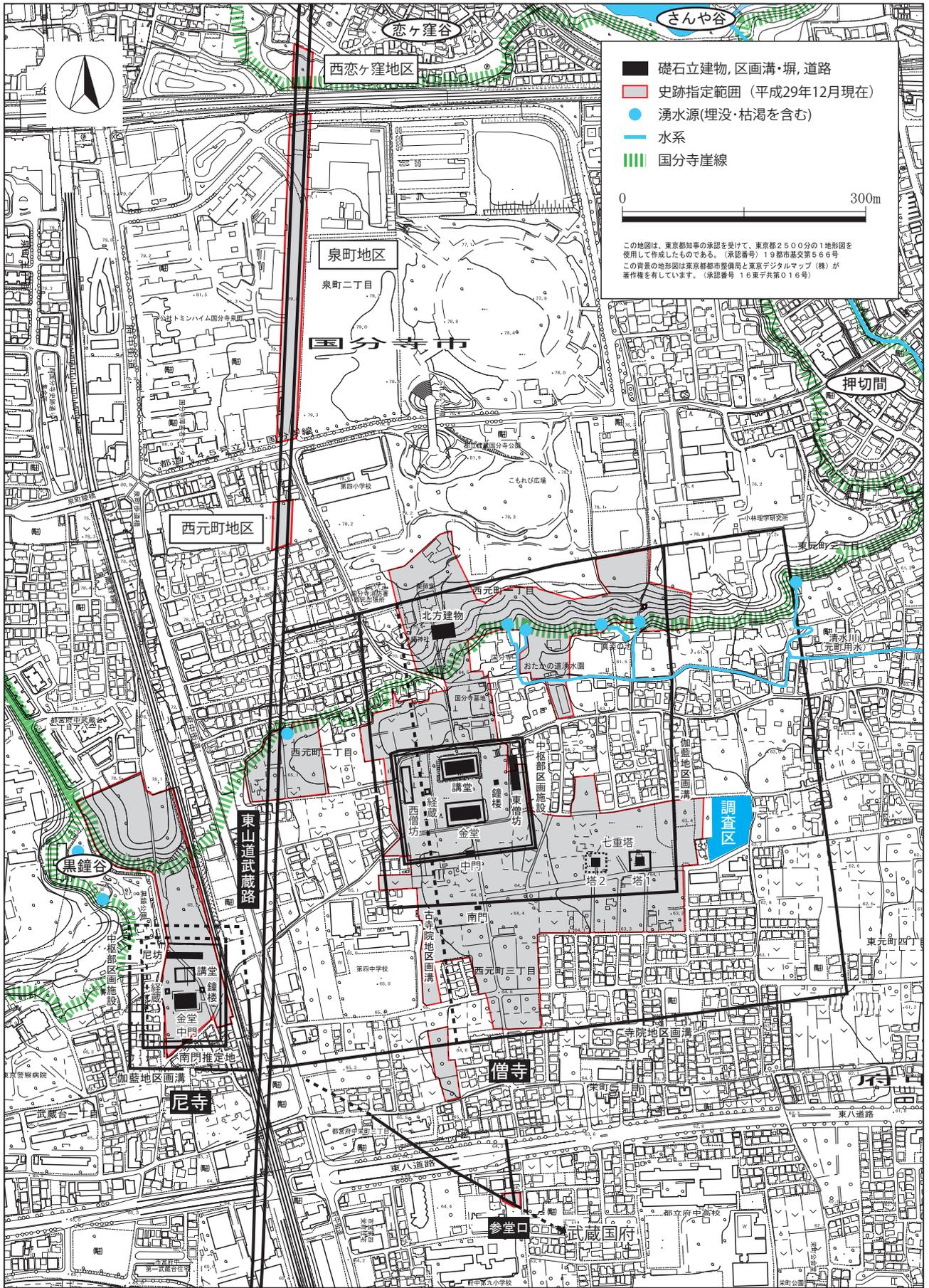
尼寺伽藍地は幅2.1～3.0m、深さ1.5mの素掘り溝で区画され、規模は概ね東西約150.0m、南北推定160.0m以上であり、僧寺と同様に中門から掘立柱塀と素掘り溝で圍繞された中枢部の規模は東西約89.1m、南北約118.8mである。

僧寺伽藍地の周囲に広がる寺院地は西辺の東山道を除く3辺が素掘り溝で区画され、規模は僧寺伽藍地北辺を含む北辺約626.0m、東辺582.0m、南辺716.0m、西辺536.0mを測る。これらの周辺に分布する集落（寺地）の範囲を含めた規模は東西1.5km、南北1.0kmを測り、南限を区切る施設として門柱状遺構（参道口）が確認されている（中道2016）。

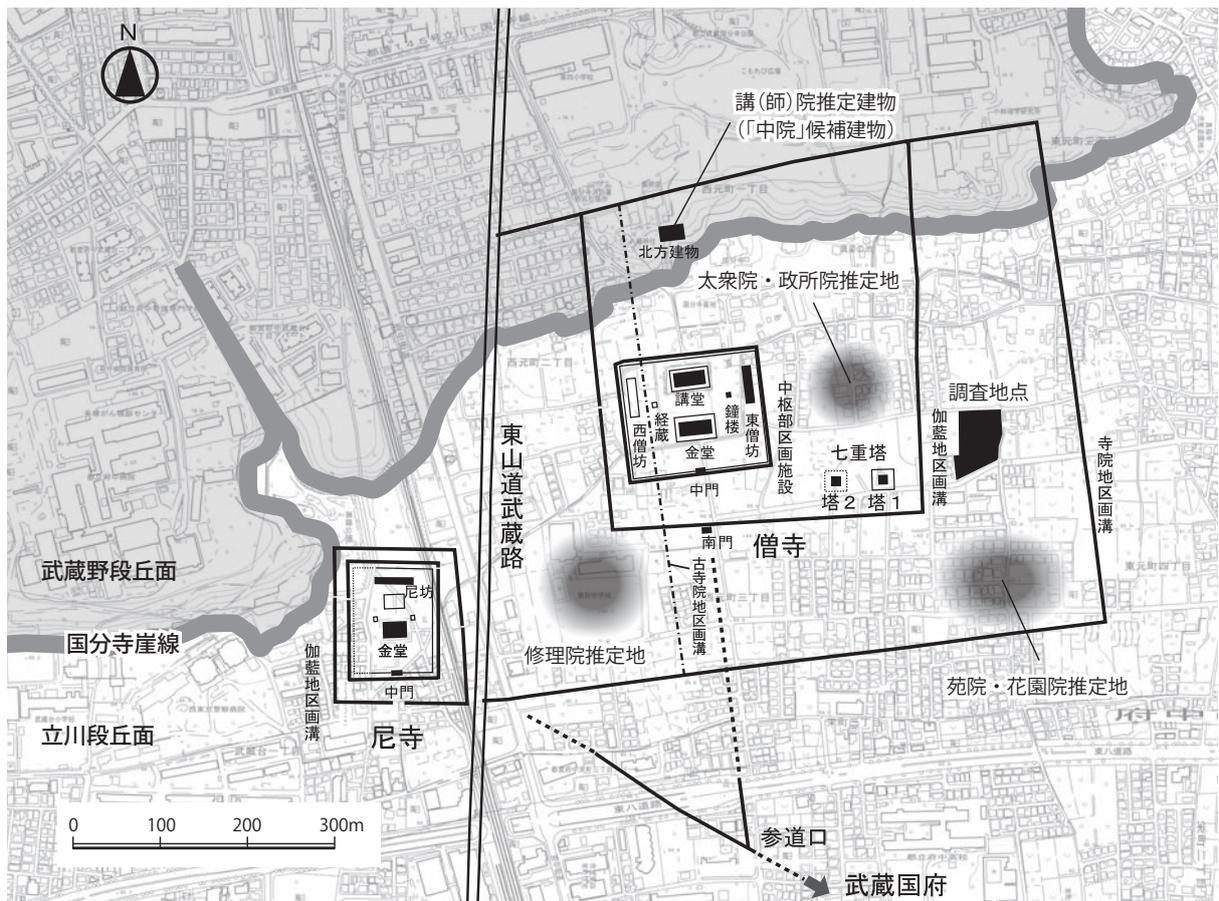
また、当時の寺院には伽藍を構成する金堂や講堂の主要堂塔のほかに、寺の維持・運営に関わる種々の付属施設（諸院）が設置されていたが、当遺跡では「太衆院・政所院」、「苑院・花園院」、「東院」、「修



第8図 武蔵国分寺位置図



第9図 史跡武蔵国分寺跡主要伽藍等配置図



第10図 推定付属諸院の位置

理院)、「講(師)院・中院」などの存在が推定されている(第10図)。

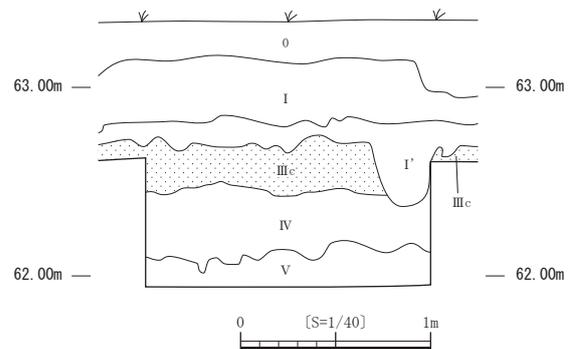
今回調査を行った第762次調査地区は、僧寺伽藍地の南東隅近くに位置する塔1の北東約133m、また伽藍地区画東辺溝の東約80m地点の寺院地内に位置しており、付属施設(諸院)の一つである「苑院・花園院」推定地の北側地域に相当する。

### 3. 層序

調査地区は立川段丘面上の平坦地にあり、長い間青少年が安全に遊ぶ冒険遊び場「国分寺市プレイステーション」施設として利用されてきたこともあって、ほぼ全面にわたり盛土が確認された。土層観察のための深掘りは、AトレンチのH～Nグリッド列付近にかけて第I層と黒褐色土の混合土と考えられるI'層が確認されたことにより、残存状況が良い当地点のトレンチ北壁際に設定し(TP1)、第V層上部まで掘り下げた(第11・12図、図版3)。

以下、各層の特徴を述べることにする。

- 0 層 盛土。調査区全体にわたって認められ、層厚17～90cm。
- I 層 表土よび旧耕作土。層厚10～40cm。
- I' 層 II層(黒褐色土)と表土の混合土。層厚8～40cm
- IIIc 層 暗褐色土。ローム層への漸移層。層厚20～30cm。
- IV 層 黄褐色土。ソフトローム層。層厚25～45cm。
- V 層 黄褐色土。ハードローム層。深掘りはこの層の上部にとどめた。



第11図 調査区基本層序

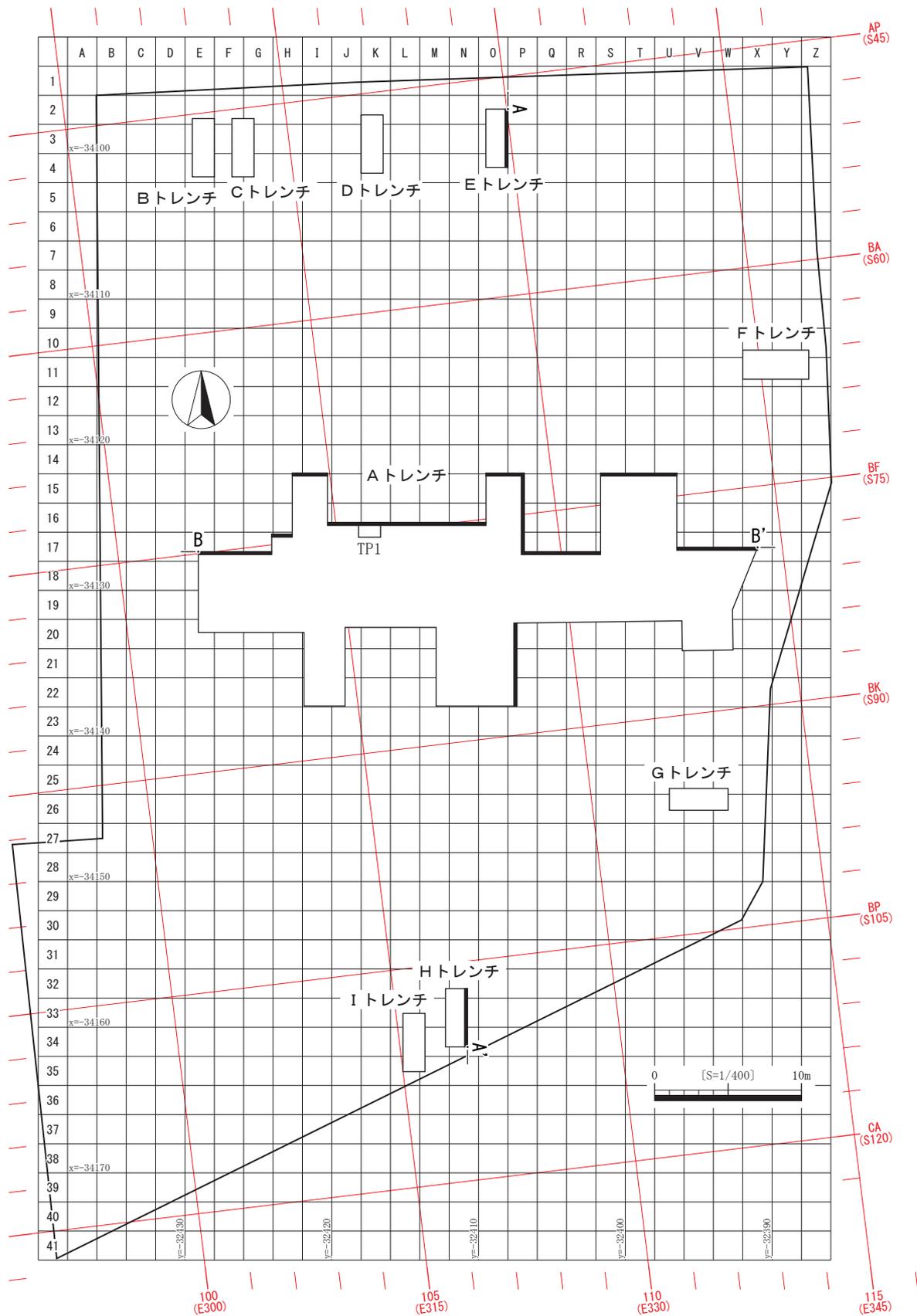
## 第3章 調査の経過

発掘調査は令和2年12月1日から翌3年1月16日まで行った。調査区はA～Iトレンチの9箇所に分かれており（第12図）、表土掘削及び遺構精査時に発生した残土は各トレンチの脇に置き、調査終了後埋戻した。

以下、調査経過を時系列に沿って記す。

- 12月1日 発掘機材及び現場事務所となるコンテナハウス・仮設トイレ・発電機の搬入。公共基準点移動。Aトレンチ設定。
- 12月2日 Aトレンチ表土掘削開始。Aトレンチにフェンス設置。
- 12月7日 Aトレンチ表土掘削完了。検出全景写真を撮影。
- 12月8日 SI831・SI832・SI833調査開始。SK3476調査。SI832調査終了。
- 12月9日 SI831完掘全景写真を撮影。SK3477～SK3481調査。P-1～P-6調査。
- 12月10日 SI834・SI835調査開始。SI831掘方全景写真を撮影・調査終了。SK3482～SK3483調査。
- 12月11日 SI834完掘全景写真を撮影。SK3484・SK3485、P-1～P-6調査。
- 12月12日 SI836・SI837調査開始。SK3486～SK3487調査。
- 12月14日 SI838調査開始。SK3488・SK3489調査。
- 12月15日 SI834掘方全景写真を撮影。SK3490・P-7調査。
- 12月16日 SI836・SI837完掘全景写真を撮影。
- 12月17日 SI835・SI838完掘全景写真を撮影。SI836・SI837掘方全景写真を撮影、調査終了。P-8調査。
- 12月18日 SI839調査開始、完掘全景・掘方全景写真を撮影、調査終了。SK3491J調査開始。B～Iトレンチ設定。
- 12月19日 G～Iトレンチ表土掘削、精査、調査終了。
- 12月21日 G～Iトレンチ埋戻し。B～Cトレンチ表土掘削、精査、調査終了。SK3491J調査終了。
- 12月22日 B～Cトレンチ埋戻し。Dトレンチ表土掘削、精査、調査終了、埋戻し。TP1調査開始。P-9調査。
- 12月23日 Eトレンチ表土掘削、精査、調査終了、埋戻し。SI835掘方全景写真を撮影、調査終了。TP1調査終了。P-10～P-13調査。
- 12月24日 SI840調査開始。SK3492調査。Fトレンチ表土掘削、SI841・SI842を検出、調査開始。
- 12月25日 SI841・SI842完掘全景写真を撮影。
- 12月28日 SI841・SI842掘方全景写真を撮影。Fトレンチ調査終了、埋戻し。
- 1月4日 P-14～P-18調査。Aトレンチ大全景写真を撮影。SI840の一部を拡張調査。
- 1月5日 SI840完掘全景写真を撮影。SK3493J・SK3494J・Sk3495調査。
- 1月8日 SI840掘方全景写真を撮影。Aトレンチ調査終了、埋戻し開始。
- 1月12日 Aトレンチ埋戻し完了。
- 1月14日 重機・仮設トイレ・発電機の搬出。
- 1月16日 コンテナハウスの搬出。現地調査終了。

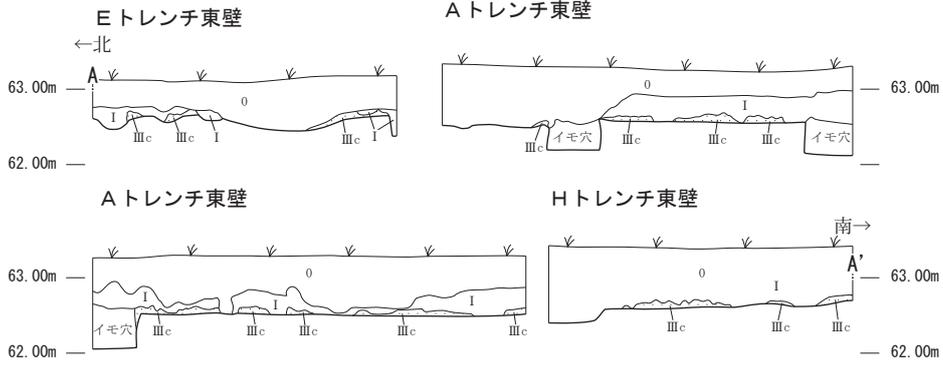
以後、1月18日よりトキオ文化財株式会社聖蹟整理事務所にて整理作業を行い、令和3年9月30日に本報告書発刊をもって全ての調査を終了した。



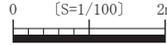
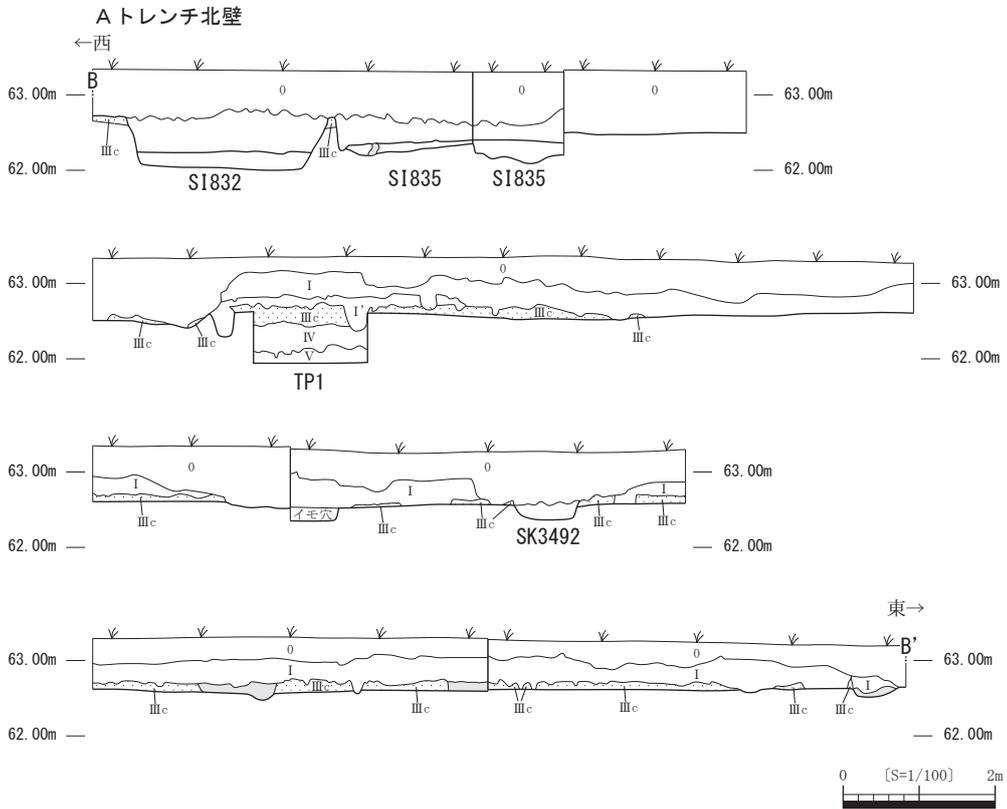
第12図 調査区およびグリッドメッシュ設定図

(座標値の黒文字は世界測地系、赤文字は武蔵国分寺局地座標系を示す)

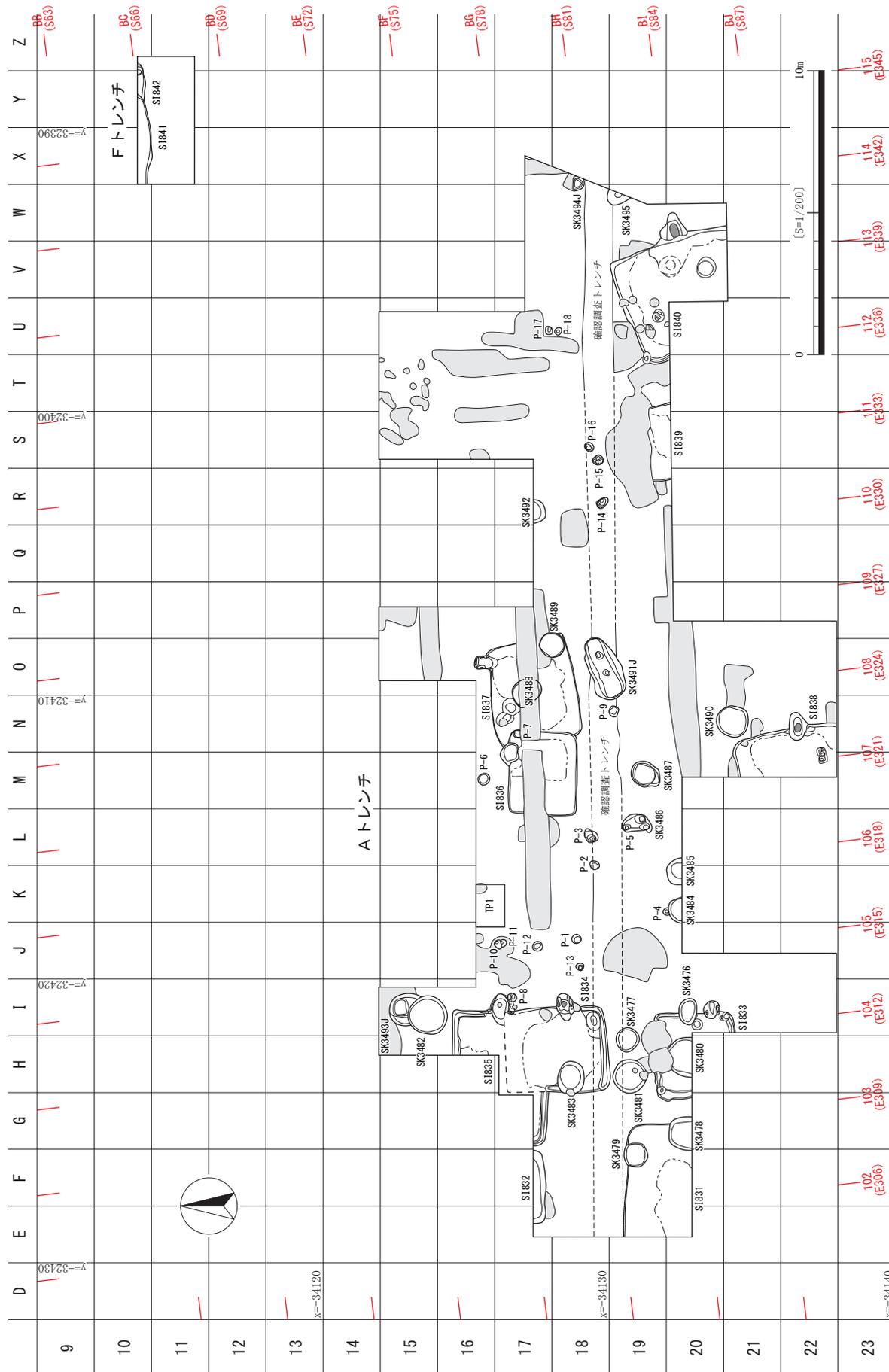
南北土層断面図



東西土層断面図



第13図 調査区南北 (A-A')・東西 (B-B') 土層断面



第 14 図 A・F トレンチ遺構配置図 (座標値の黒文字は世界測地系、赤文字は武蔵国分寺局地座標系を示す)

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 1. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、平安時代以降の竪穴住居跡12軒（SI831～842）、土坑17基（SK3476～3490・3492・3495）、ピット18基（P-1～18）で、SI841～842（Fトレンチ区）を除き調査地区中央のAトレンチより検出された。また、同一確認面で覆土の様相から縄文時代の所産と思われる土坑3基（SK3491J・SK3493J・SK3494J）も発見された（第14図）。

### 2. 縄文時代

#### （1）土坑

##### SK3491J陥し穴（第15図、図版3）

**位置・確認面** Aトレンチの中央部のO18・19グリッドに位置する。Ⅲc層での検出当初は隣接する2基の土坑と考えていたが、掘り下げの途中で同一の陥し穴であることが判明し、改めてⅣ層上面において全体を確認した。

**形態・規模** 平面形は隅丸長方形で、規模は確認面で長軸約2.30m×短軸約1.00m、底面は長軸約2.15m×短軸約0.50mを測る。遺構確認面からの深さは約0.90mで、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面中央東寄りに逆茂木の痕跡と考えられる小穴2基（P1・P2）が約40cmの間隔で検出された。P1は径約30cm、深さ約35cm、P2は径約25cm、深さ約45cmを測る。

**覆土** 上層の黒褐色土と下層の黄褐色土を主体とする3層からなる。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土・形態から縄文時代早期と考えられる。

##### SK3493J土坑（第15図、図版3）

**位置・確認面** Aトレンチの西端寄りのI15グリッドに位置し、南半部分をSK3482土坑によって切られており、遺存状態は余り良くない。遺構確認面はⅣ層である。

**形態・規模** 平面形は楕円形で、規模は長軸の復元長約1.35m×短軸約1.12mである。遺構確認面からの深さは最大0.34mで、壁は外傾気味に立ち上がる。

**覆土** 上層の暗褐色土と下層の黄褐色土の2層からなり、レンズ状の堆積である。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土から縄文時代と考えられる。

##### SK3494J土坑（第15図、図版3）

**位置・確認面** Aトレンチの東端のW・X18グリッドに位置し、東側は調査区域外に延びる。遺構確認面はⅣ層である。

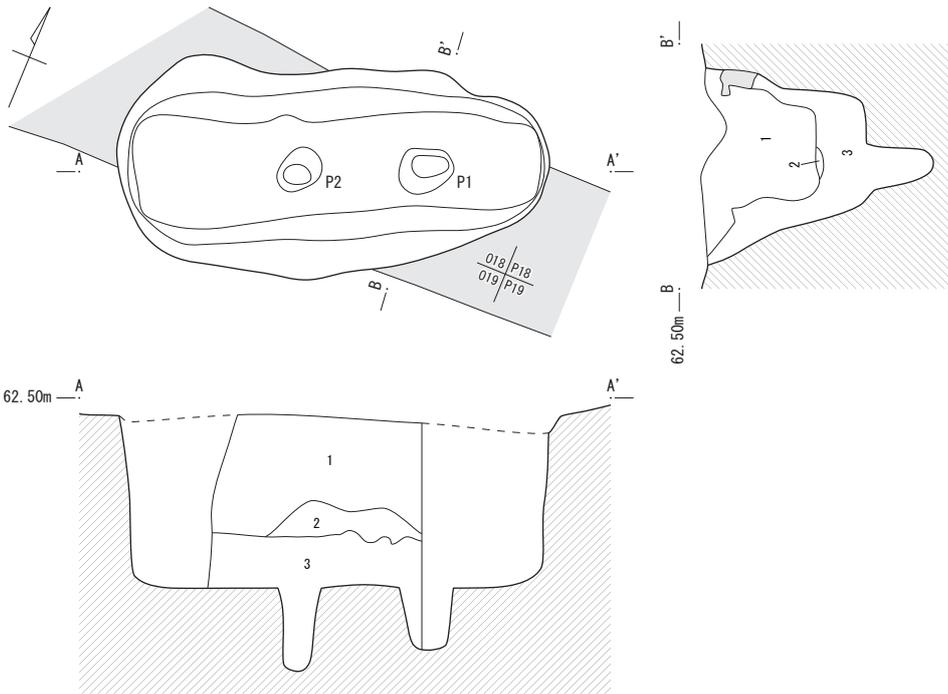
**形態・規模** 平面形は不整円形で、規模は長軸約0.70m×短軸0.54m以上である。遺構確認面からの深さは最大0.28mで、壁は外傾気味に立ち上がる。

**覆土** 上層の暗褐色土と下層の黄褐色土の2層からなり、レンズ状の堆積である。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

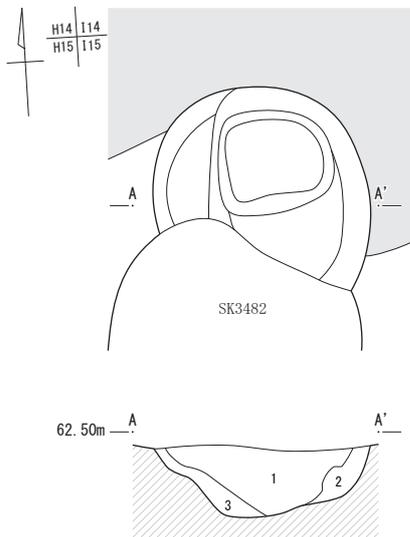
**時期** 覆土から縄文時代と考えられる。

SK3491J

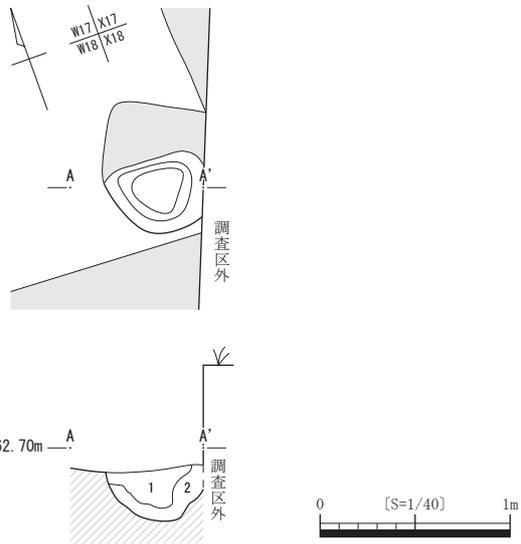


SK3491J			
1	10YR2/2	(黒褐色土)	赤色スコリア粒を少し、汚れたローム土を混じる。よく締り、粘質。
2	10YR2/2	(黒褐色土)	炭化物粒・ローム土をやや多く混じる。よく締り、粘質。
3	10YR5/6	(黄褐色土)	赤色スコリア粒を少し、黒褐色土をやや多く混じるローム土。よく締り、粘質。
4	10YR3/3	(暗褐色土)	黒褐色土を混じる。やや軟質で、粘質。

SK3493J



SK3494J

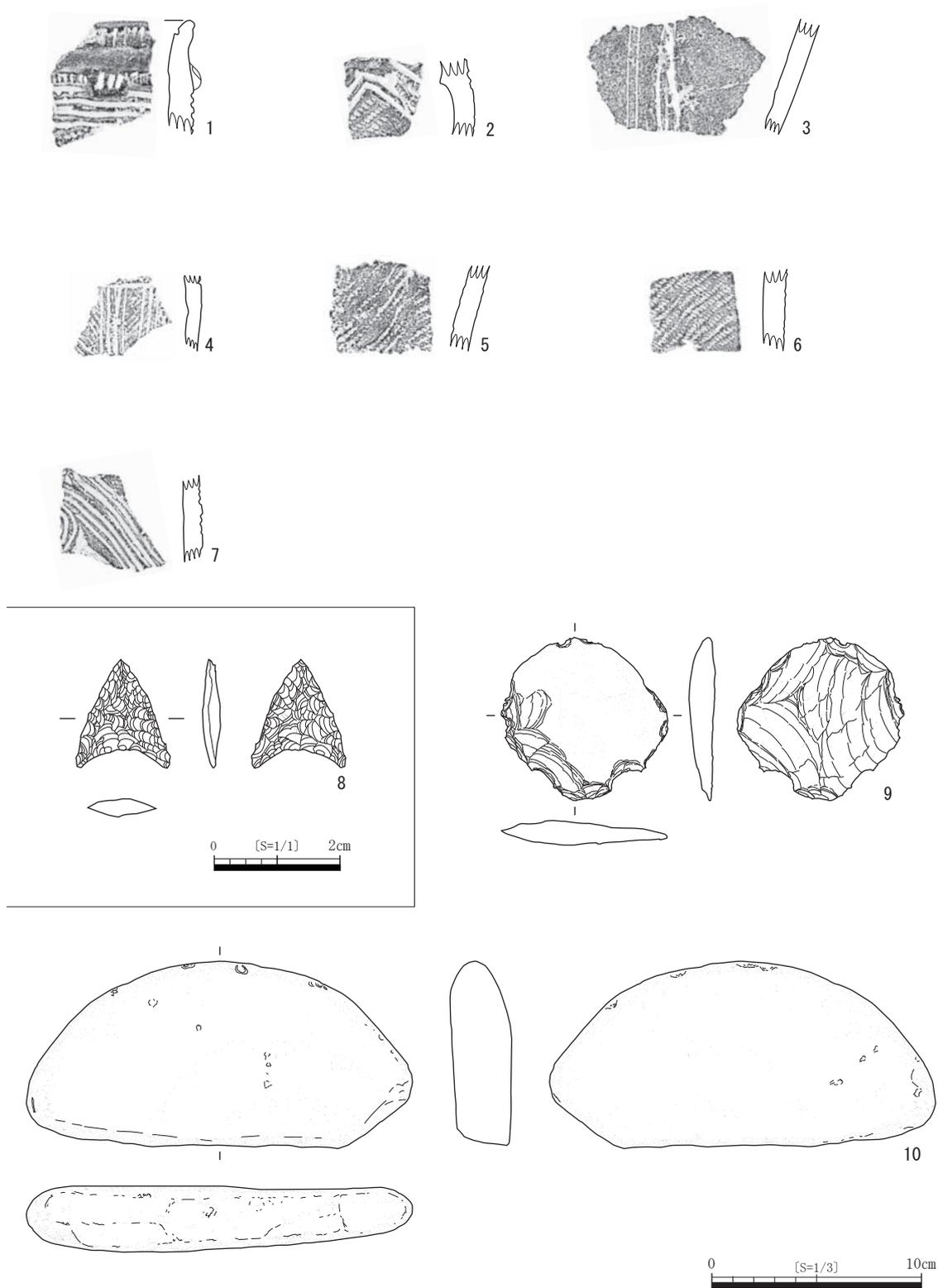


SK3493J			
1	10YR3/3	(暗褐色土)	赤色スコリア粒・黒色スコリア粒・炭化物粒を混じる。締りあり、粘質。
2	10YR5/6	(黄褐色土)	赤色スコリア粒・黒色スコリア粒をわずかに、暗褐色土をやや多く混じる。締りあり、粘質。
SK3494J			
1	10YR2/2	(黒褐色土)	赤色スコリア粒をわずかに混じる。締りあり、粘質。
2	10YR4/4	(褐色土)	黒褐色土をやや多く混じる。締りあり、粘質。

第 15 図 SK3491J・SK3493J・SK3494J 実測図

(2) 出土遺物 (第16図、第1・2表、図版17)

遺物は当該期の遺構に伴うものは無いが、表土を中心にⅢc層、SI833住居とSI838住居の覆土などから、縄文土器60点、石器7点が出土した。この内縄文土器の7点と石器3点を図示した。1～7は全て五領ヶ台式(中期初頭)の深鉢である。8は黒曜石製の凹基鏃である。9は片岩製のスクレイパーである、縁辺に調整を施して刃部を作る。10は磨石で石皿を転用したものと思われる。



第16図 縄文時代出土遺物

第1表 縄文土器観察表

挿図番号 図版番号	器種	型式	出土位置	色調	焼成	胎土	特徴	備考
16-1 17-1-1	深鉢	五領ヶ台	表土	明黄褐色	良好	長石、石英、小礫多量	頸部無文帯を有し、横走する貼付隆帯に刻みと突帯を付す。半裁竹管による平行沈線を引き、交互刺突を施す。口唇部裏面に横走する沈線が巡る。	
16-2 17-1-2	深鉢	五領ヶ台	Ⅲc層	外面 褐灰色 内面 明褐色	良好	長石、石英、角閃石、赤色微粒	沈線で区画した内側にRLの縄文を施す。沈線上に刺突痕あり。裏面に段を有す。	
16-3 17-1-3	深鉢	五領ヶ台	Ⅲc層	外面 橙色 内面 黒褐色	良好	長石、石英、チャート、金雲母微量、小礫多量	縦位の半裁竹管による平行沈線を施す。	
16-4 17-1-4	深鉢	五領ヶ台	SI838 覆土	橙色	良好	長石、石英、角閃石、片岩微量、小礫多量	RLの縄文を地文とし、3本一組の半裁竹管による平行沈線と斜位の平行沈線を施し、上端部を横位の沈線で区画する。	
16-5 17-1-5	深鉢	五領ヶ台	表土	外面 にぶい褐色 内面 明褐色	良好	長石、石英、角閃石、チャート、砂粒多量	RLの縄文を粗く斜位に施文する。	
16-6 17-1-6	深鉢	五領ヶ台	SI833 カマド	外面 明黄褐色 内面 にぶい黄褐色	良好	長石、角閃石、砂粒多量	RLの縄文を横位に施文する。	
16-7 17-1-7	深鉢	五領ヶ台	表土	にぶい褐色	良好	長石、石英、砂粒多量	屈曲する集合沈線と三叉文を施文する。	

第2表 縄文石器観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	石質	備考
			長さ	幅	厚み			
16-8 17-1-8	石鏃	表土	1.7	1.5	0.3	0.5	黒曜石	完形
16-9 17-1-9	スクレイパー	表土	7.8	7.9	1.3	83.4	片岩	縁辺に調整を施し刃部を作る
16-10 17-1-10	磨石	SI838 覆土	9	18.5	3.2	793.9	閃緑岩	全面磨面。石皿からの転用か

### 3. 平安時代

#### (1) 竪穴住居

SI831住居 (第17～19図、第3～5表、図版3・4・17)

**位置・検出状況** Aトレンチの西端南西隅部のE～G19・20グリッドに位置し、住居の西側と南側は調査区域外にある。遺構確認面はⅢc層である。北壁および東壁の一部をそれぞれSK3479土坑とSK3478土坑によって切られているが、遺存状態は良好である。

**形状・規模** 平面形・カマドの位置は不明である。主軸方位はN-2°-Eを示す。規模は南北2.35 m以上×東西4.0 m以上で、遺構確認面から床面までの深さは約0.10 m (西壁断面Ⅲc層上面からの深さは最大0.16 m) である。

**覆土** 黒褐色土の1層からなる。

**壁・床面・周溝** 壁はやや外傾気味に立ち上がる。床面は暗褐色土ブロックにより貼床を構築している。住居中央部に南北1.30 m×東西2.75 mの範囲に硬化面が認められ、部分的に2面確認された。床面検出時には見落としていた周溝は北東隅寄りの北壁と東壁で確認し、規模は幅20～30cm、深さ約6 cmである。

**ピット** ピットも床面掘り下げの段階で3基 (P1～3) 検出された。このうちP2・P3は住居使用時のものと考えられるが、P3は埋戻されている。P1は径約35cmの楕円形で、深さ約16cm、P2は径約20cmの不整形円で、深さ約60cm、P3は径約68cmの円形で、深さ約26cmである。

**カマド** 不明である。

**掘方** 貼床は全体に12cmほどの深さで、掘方はほぼ平坦に掘られている。北壁から住居内約70cmの位置に性格不明の幅約18cm、深さ約4 cmの周溝状の溝が検出された。

**出土遺物** 遺物は住居全体にわたり床直上を中心に土師器17点、須恵器71点、土師質土器14点、灰釉陶器4点、瓦35点、鉄滓1点、礫4点、縄文土器1点など計147点 (6661.8 g) が出土しているが、図示できるものは少ない。床直上出土を中心に7点を図示した。1・2は内面ヘラミガキ後に黒色処理を施す土師器塚で、1の口縁部外面には粘土紐接合痕が残る。3～4は土師質土器で、3は福田信夫氏による土師質土器分類 (以下、福田分類と略す) の22類に相当すると考えられる (福田1984)。4は粘土紐巻き上げと指頭押えによる小ぶりの坏、5は足高高台の塚である。6は南多摩窯産の男瓦でI3-A1技法のものである。7は塚型の鉄滓である。

**時期** 福田分類22類の坏および黒色処理を施す土師器塚などから、同編年の第Ⅱ群 (11世紀中葉～11世紀後半) に相当する時期と考えられる。

SI832住居 (第20図、図版4)

**位置・検出状況** Aトレンチの西端北壁のE・F17グリッドに位置し、住居の南壁を除き大部分が調査区域外である。遺構確認面はⅢc層である。

**形状・規模** 平面形・カマドの位置は不明である。主軸方位はN-2°-Eを示す。規模は南北0.45 m以上×東西約2.7 mで、遺構確認面から床面までの深さは約0.40 m (北壁断面Ⅲc層上面からの深さは最大0.48 m) である。

**覆土** 黒褐色土を主体とする4層からなり、住居中央に向かってレンズ状に自然堆積している。

**壁・床面・周溝** 壁はやや外傾気味に立ち上がる。床はV層付近まで掘り込まれ、住居中央部に暗褐色土とロームブロックの混合土により貼床を構築している。周溝は不明である。

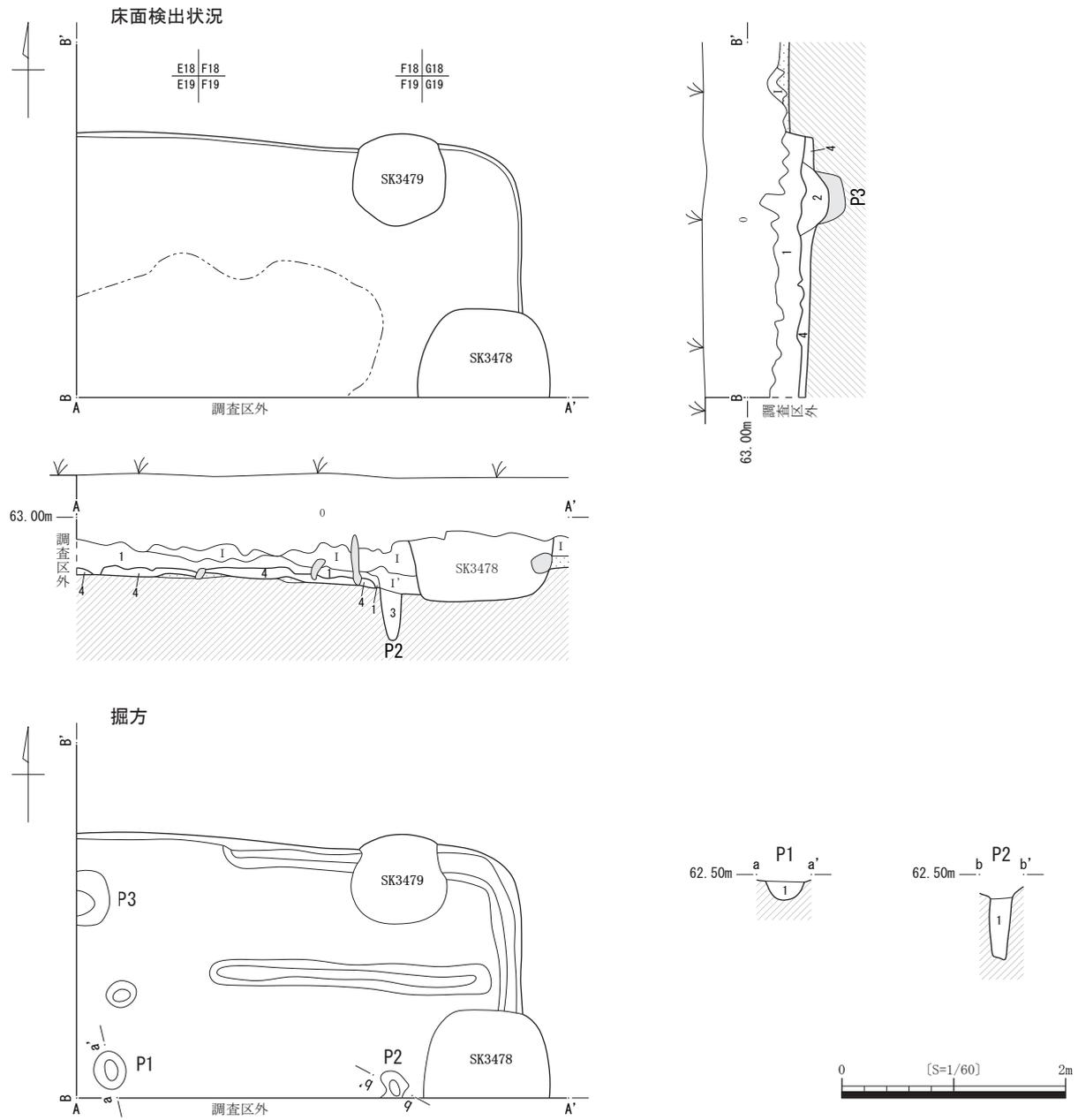
**ピット** 不明である。

**カマド** 不明である。

**掘方** 貼床は全体に20cmほどの深さで、掘方はほぼ平坦に掘られている。

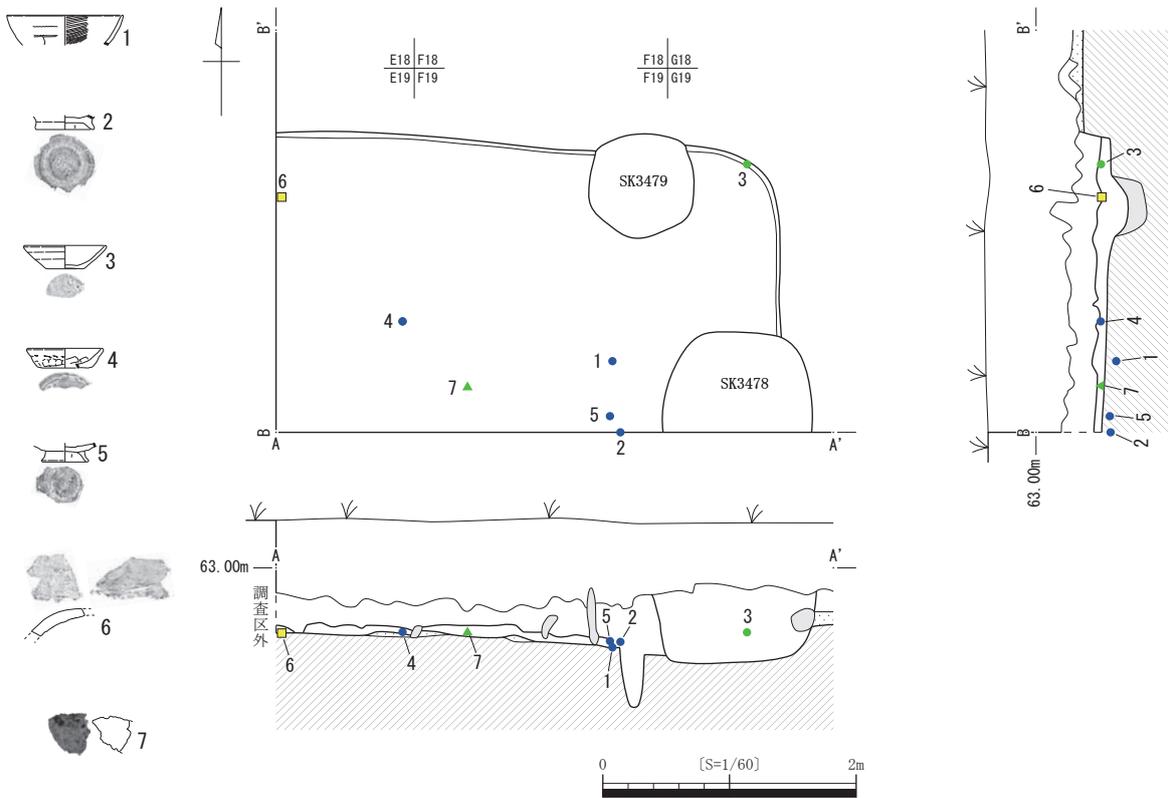
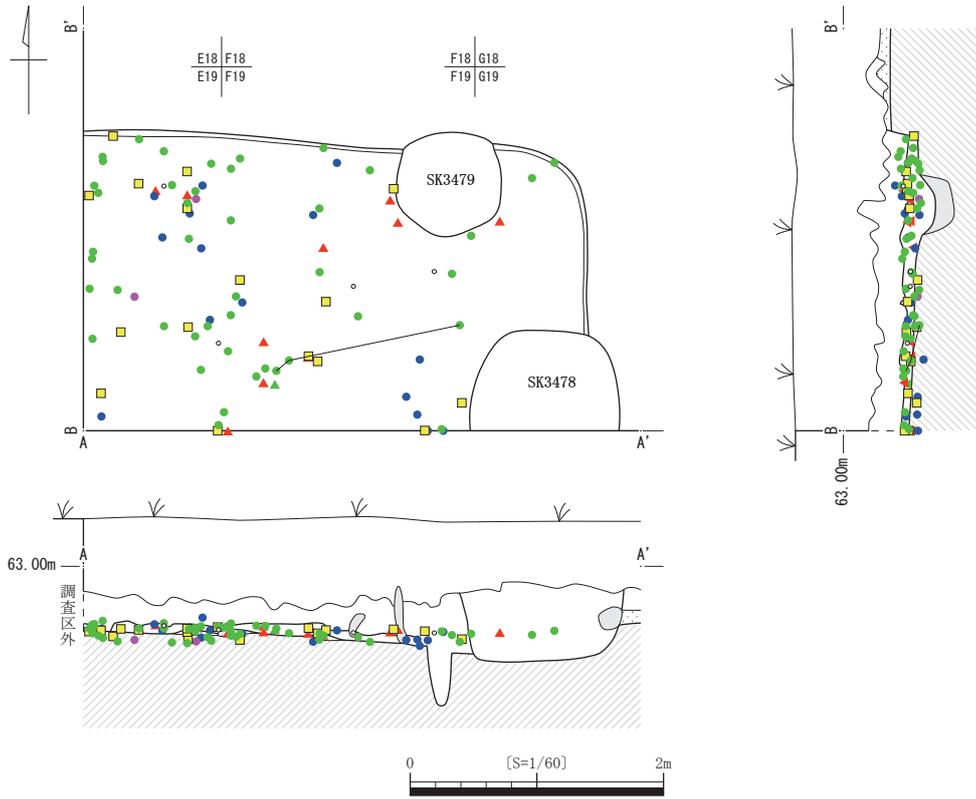
**出土遺物** 遺物は住居南壁寄りの覆土を中心に土師器 1 点、須恵器 5 点、土師質土器 1 点など計 7 点（105.9 g）が出土しているが、図示できるものはない。

**時期** 不明である。

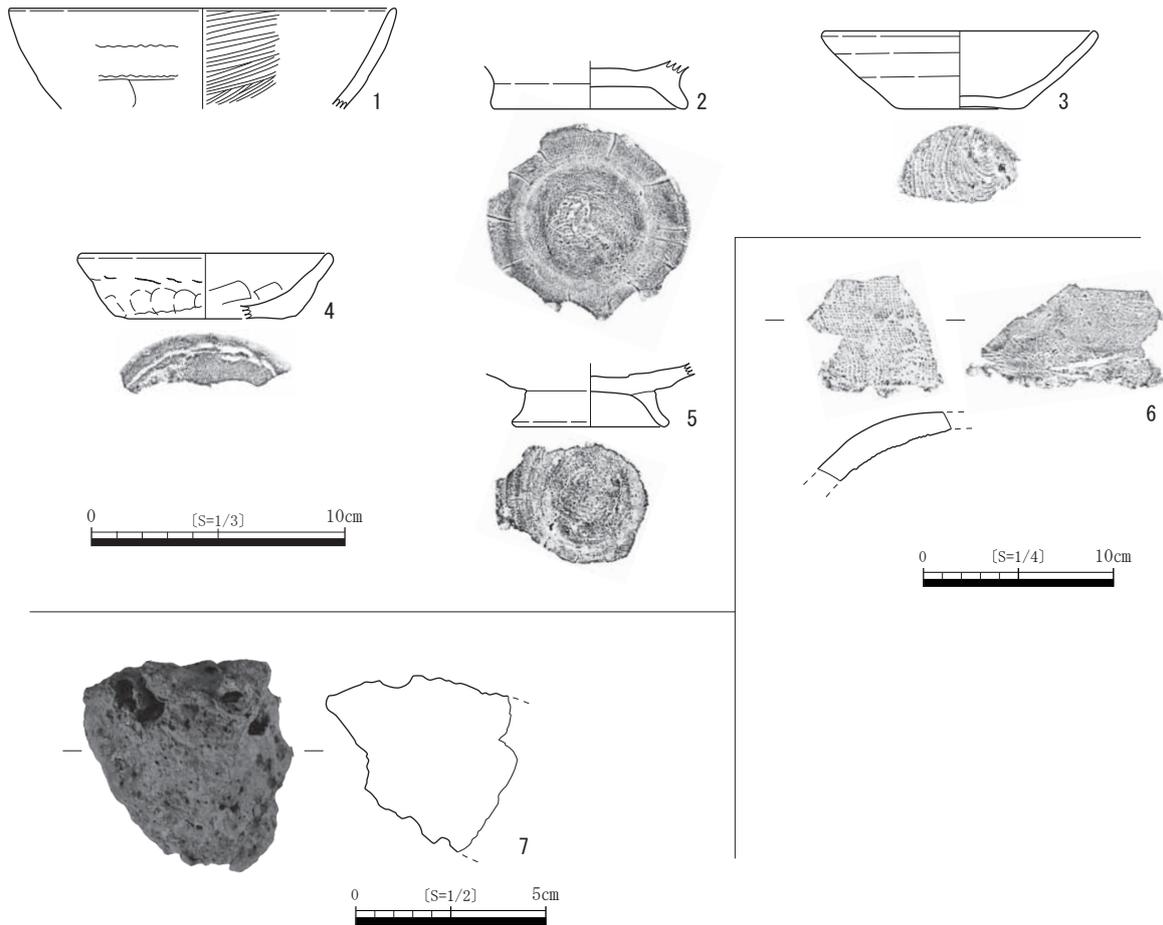


SI831			
1	10YR2/3	(黒褐色土)	ローム粒を含み、焼土粒・白色粘土粒・炭化物粒を混じる。締りあり。
2	10YR3/1	(黒褐色土)	P3、ローム土を多く混じる。締りあり。
3	10YR3/1	(黒褐色土)	P2、全体にローム土を混じり、上部に焼土粒・ローム粒(φ1~2mm)を少量混じる。締りなく軟質。
4	10YR2/3	(黒褐色土)	暗褐色土(Ⅲc層)ブロック主体。ローム土・ローム粒を少量混じる。非常に硬い(貼床・掘方)。
P1			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒・白色粘土粒を混じる茶褐色土とローム土の混合土(掘方と同質土)。締りあり。

第 17 図 SI831 実測図



第 18 図 SI831 遺物出土状況図 (上図：全点・下図：実測個別)



第19図 SI831 出土遺物実測図

第3表 SI831 出土土器観察表

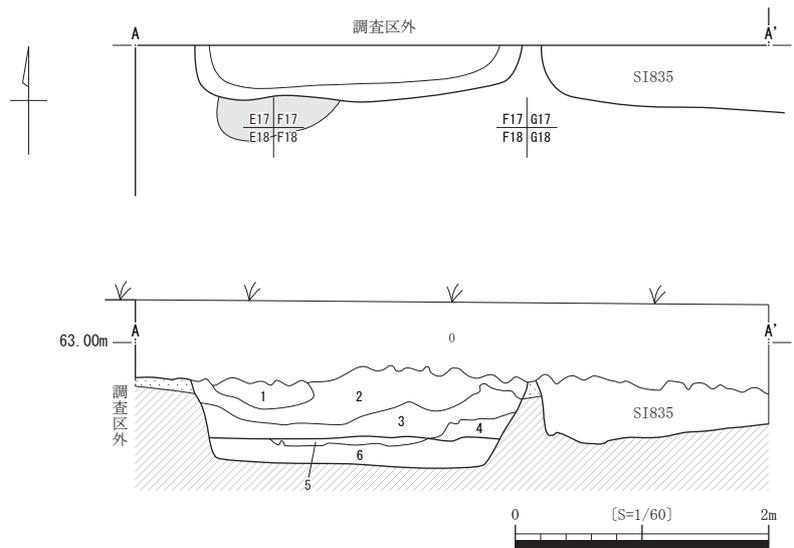
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
19-1 17-2-1	土師器 碗	床直	口縁部破片	(12.8) (3.4) -		体部外面下半 横位ヘラケズリ 内面 斜位ヘラミガキ	外面 にぶい黄褐色 内面 黒褐色	良好	細砂、白色粒中量	内面黒色処理
19-2 17-2-2	土師器 高台付碗	床直	底部	-(1.9) 7.4 4.8	高台は低くハの字に開く	ロクロ成形 内面一方向ヘラミガキ 貼付高台、内外面横ナデ、 底部回転糸切り無調整	外面 明黄褐色 内面 黒褐色	良好	砂粒中量	内面黒色処理
19-3 17-2-3	土師質 土器 坏	覆土	口縁~底部 底部1/2残	(10.6) 3.2 (5.0) (2.8)		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 橙色 底部外面 黒褐色	良好	細砂少量、赤色粒少量	
19-4 17-2-4	土師質 土器 坏	床直	口縁~底部 1/4残	(10.0) 2.6 (7.0)	底部から直線的に外傾する	口縁部内外面横ナデ、体部下 半指頭痕、内面ナデ	内外面 橙色	良好	石英少量	
19-5 17-2-5	土師質 土器 高台付碗	床直	底部~高台 底部完存、 高台極小残	-(2.5) (6.0) 3.3	高台はやや外反して開く	ロクロ成形 貼付高台内面見込部分回転 ナデ、高台内外面横ナデ	内外面 にぶい 橙色	良好	細砂中量、小石少量、石英少量	

第4表 SI831 出土男瓦観察表

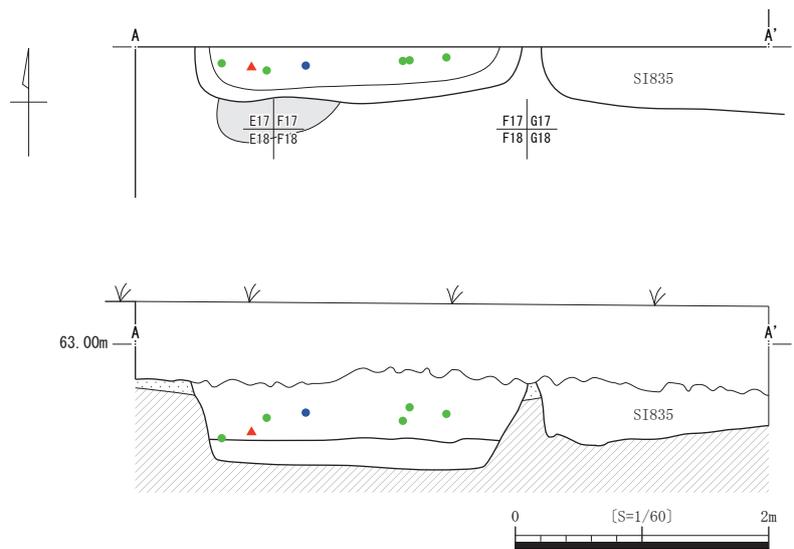
挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴					備考	
				素材	凹面		凸面			端面
					布目	特徴	叩き	特徴		
19-6 17-2-6	床直	[6.4] [9.6] -	1.4	粘土紐	16×18			回転ナデ	広端面無調整	I 3-A1 技法 南多摩窯産

第5表 SI831 出土鉄滓観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
19-7 17-2-7	椀型滓	床直	5	6.3	4.7	159.8	



SI832			
1	10YR2/2	(黒褐色土)	ローム微粒を多く含む。やや締りあり。
2	10YR2/2	(黒褐色土)	ローム微粒を含み、全体に焼土粒・炭化物粒、部分的にローム土を混じる。締りあり。
3	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム微粒を含み、全体に焼土粒・炭化物を混じる。部分的に焼土を混じる。締りあり。
4	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム微粒を含み、ローム土をわずかに混じる。締りあり。
5	10YR2/3	(黒褐色土)	暗褐色土とロームブロックの混合土。よく締り硬質(貼床)。
6	10YR3/3	(暗褐色土)	暗褐色土・ローム土・ロームブロックの混合土。締りあり(掘方)。



第20図 上図：SI832 実測図・下図：遺物出土状況図（全点）

SI833住居（第21～24図、第6表、図版4・5・17）

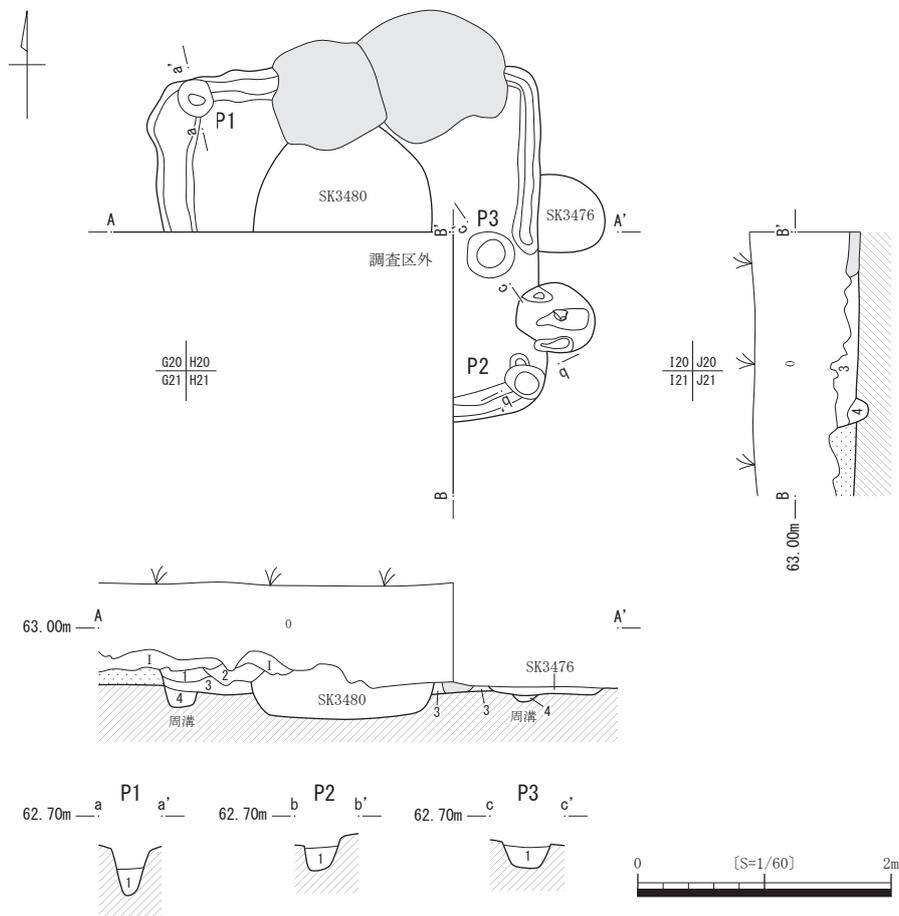
**位置・検出状況** Aトレンチの西端付近のG～I 19～21グリッドに位置し、SI831住居の東に近接する。住居跡の南西隅を含む約1/3ほどが調査区域外である。遺構確認面はⅢc層である。住居中央部と東壁の一部をそれぞれSK3480土坑、SK3476土坑などによって切られており、遺存状態は不良である。床面のレベルが浅いため、周溝によって住居の範囲を確認した。

**形状・規模** 平面形はほぼ方形で、主軸方位はN-90°-Eである。規模は南北約2.80m×東西約3.00mで、遺構確認面から床面までの深さは最大で約0.06m（西壁断面Ⅲc層上面からの深さは最大0.18m）である。

**覆土** 黒褐色土を主体とする4層からなる。

**壁・床面・周溝** 壁はやや垂直気味に立ち上がる。床は確認面のⅢc層上面まで平坦に掘り込まれ、掘方底面を床面としている。周溝はカマド前面を除き全周すると思われ、幅15～40cm、深さ約13cmである。

**ピット** ピットは3基（P1～3）検出された。何れも径30～40cmの円形で、深さは20～38cmである。



SI833			
1	10YR2/3	(黒褐色土)	やや粒子粗く、焼土微粒をわずかに混じる。縮りあり。
2	10YR2/3	(黒褐色土)	全体に焼土微粒、部分的に焼土を多く混じる。やや縮りあり。
3	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム微粒を微量含み、焼土微粒を混じる。やや縮りあり。
4	10YR2/3	(黒褐色土)	ローム微粒を微量含み、焼土微粒・ローム土を混じる。縮りあり。
P1			
1	10YR3/3	(暗褐色土)	ローム土を多く混じる。やや縮りあり。
P2			
1	10YR3/3	(暗褐色土)	ローム土を多く混じる。やや縮りあり。
P3			
1	10YR3/3	(暗褐色土)	ローム粒(φ3mm)を少量、ローム土を多く混じる。やや縮りあり。

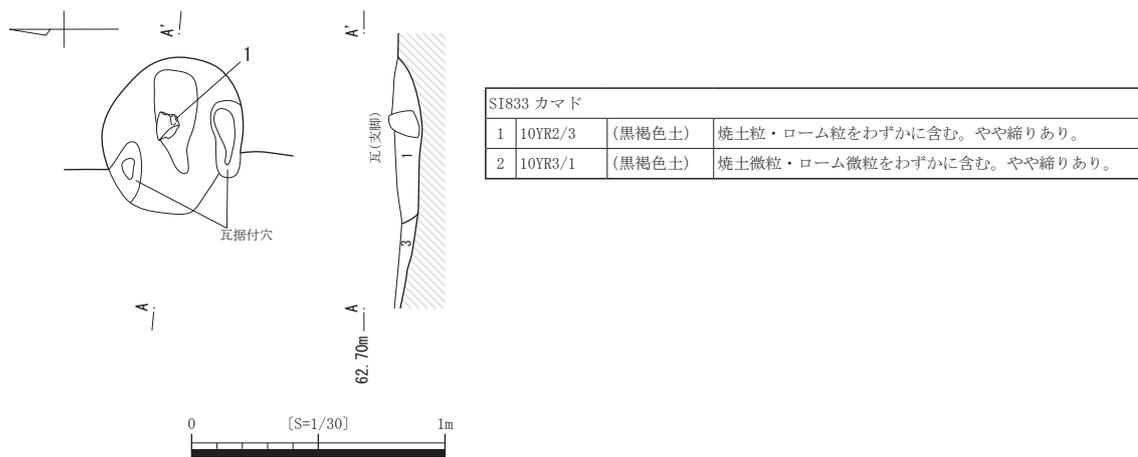
第21図 SI833 実測図

**カマド** 東壁の南隅寄りに位置する。カマド構築材の大部分を持ち去ったようで、瓦片を利用した支脚のみが残存していた。規模は幅約55cm、奥行き62cmを測り、壁外に約40cm張り出している。両側壁下にはカマド構築材である瓦の据付穴と考えられる小穴が認められた。

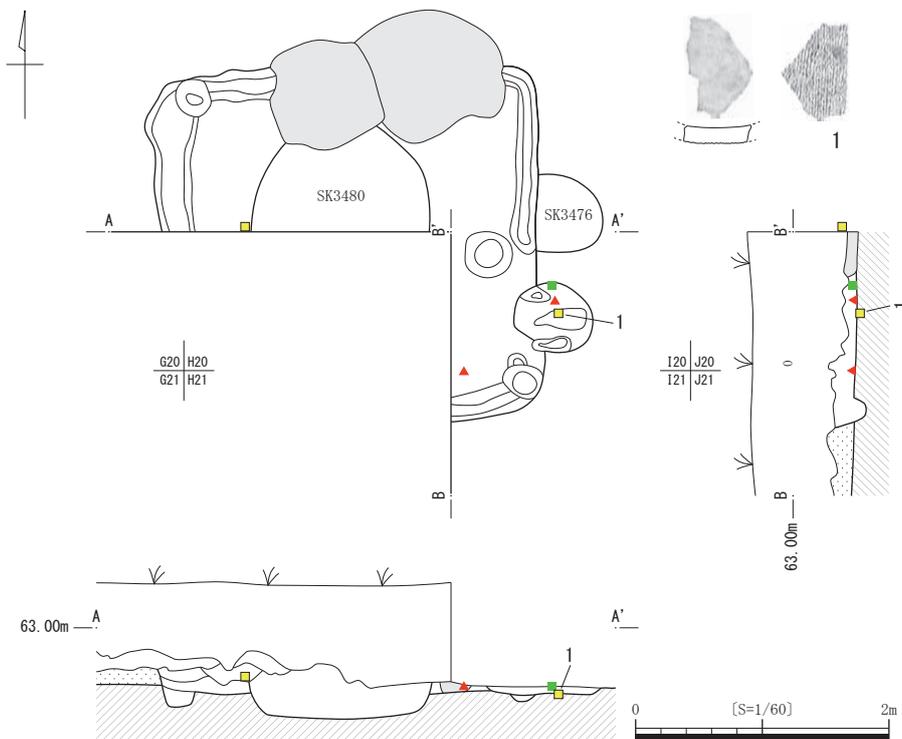
**掘方** なし

**出土遺物** 遺物は住居の床面レベルが極めて浅いことなどもあって、カマドを中心に土師器3点、須恵器1点、土師質土器5点、瓦14点、縄文土器1点など計24点（3876.2g）が出土しているが、図示できるものは少ない。1はカマド支脚に再利用された女瓦で、塔再建期年代（註1）のⅡ1-A1技法のものである。

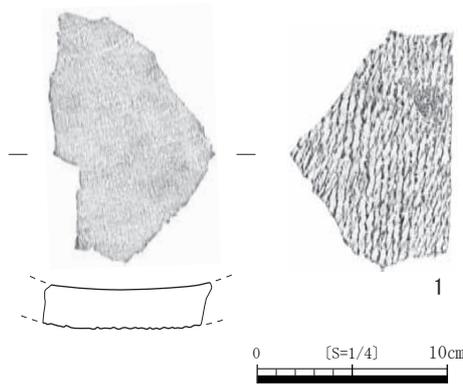
**時期** 不明である。



第22図 SI833 カマド実測図



第23図 SI833 遺物出土状況図（全点）



第24図 SI833 出土遺物実測図

第6表 SI833 出土女瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴					備考
				素材	凹面		凸面		
				布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
24-1 17-3-1	カマド	— — (13.7)	2	粘土紐	28×32		縄叩き L8本		II 1-A1 技法 東金子窯産

SI834住居 (第25～31図、第7～10表、図版5・6・18)

**位置・検出状況** Aトレンチの西端付近中央部のH・I 17・18グリッドに位置する。遺構確認面はIIIc層である。住居の北側部分がSI835住居の上部に築造されており、しかも住居の床面レベルが極めて浅いことなどから、残念ながら北壁の検出は叶わなかったが、床面の残存状況や出土遺物の接合状況などから、北壁の位置を推定することができた。また、南壁の中央部分をSK3483土坑によって切られており、遺存状態は余り良くない。

**形状・規模** 平面形は長方形で、主軸方位はN-86°-Eである。規模は南北推定約3.60m×東西約3.00mで、遺構確認面から床面までの深さは0.06～0.12mである。

**覆土** 黒褐色土の1層からなる。

**壁・床面・周溝** 壁はやや垂直気味に立ち上がる。床面の硬化範囲はカマド前面から住居中央部のほぼ全域に及び、床下土坑上面部分に貼床がみられる。周溝はカマド右側の北壁～東壁、南壁の中央付近に部分的に認められ、幅15～30cm、深さ12～16cmである。

**ピット** 貯蔵穴状のピットが1基(P1)検出された。長軸約65cm×短軸約45cmの楕円形で、深さは約20cmである。

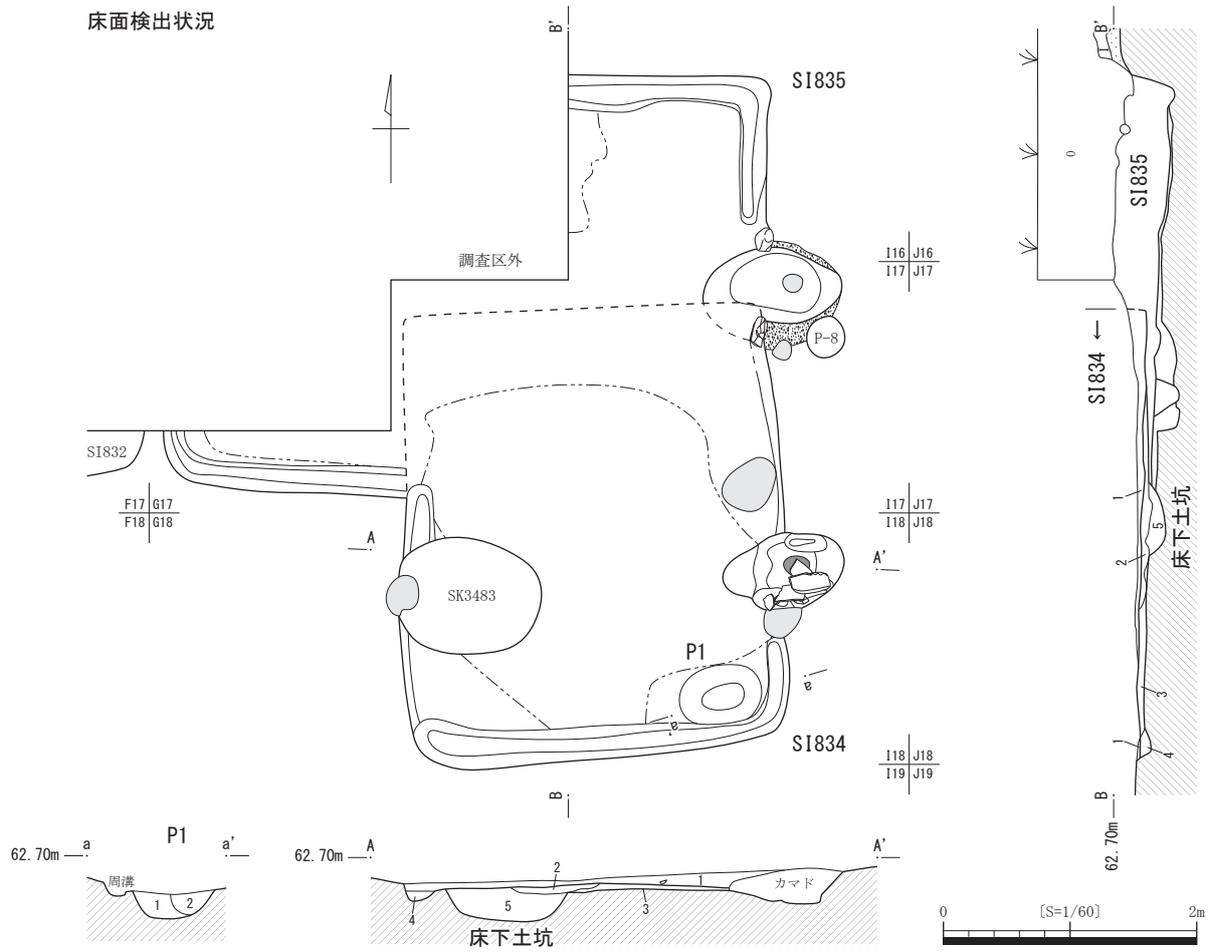
**カマド** 東壁の中央南隅寄りに位置する。カマド構築材の大部分を持ち去ったようで、中央部に火床の焼土が少量と、右側壁側に須恵器羽釜と女瓦の破片が横たわるように残存していた。規模は幅約62cm、奥行き96cmを測り、壁外に約48cm張り出している。カマド構築材である瓦の据付穴と考えられる小穴が左側壁下に1基、右側壁下に2基認められた。

**掘方** 貼床は全体に5cmほどの深さで、掘方はほぼ平坦に掘られている。住居内南壁寄りに径約1.15cmの不整形円形で、深さ約26cmの床下土坑が検出された。覆土は黒褐色土1層のみで上部に貼り床が認められた。

SI834			
1	10YR2/2	(黒褐色土)	ローム粒・焼土粒(φ1～2mm)を含む。縮りあり。
2	10YR3/1	(黒褐色土)	焼土粒・ローム土を混じる。縮り強く硬質。(貼床)
3	10YR3/3	(暗褐色土)	黒褐色土を少し混じる。やや縮りあり。(掘方)
4	10YR2/2	(黒褐色土)	暗褐色土を混じり、やや軟質。(周溝)
5	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒(φ2～5mm)を多く、焼土粒をわずかに含む。縮りあり。(床下土坑)
P1			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	暗褐色土ブロックをやや多く混じる。やや縮りあり。
2	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム粒(φ2～5mm)を含む。縮りなく軟質。

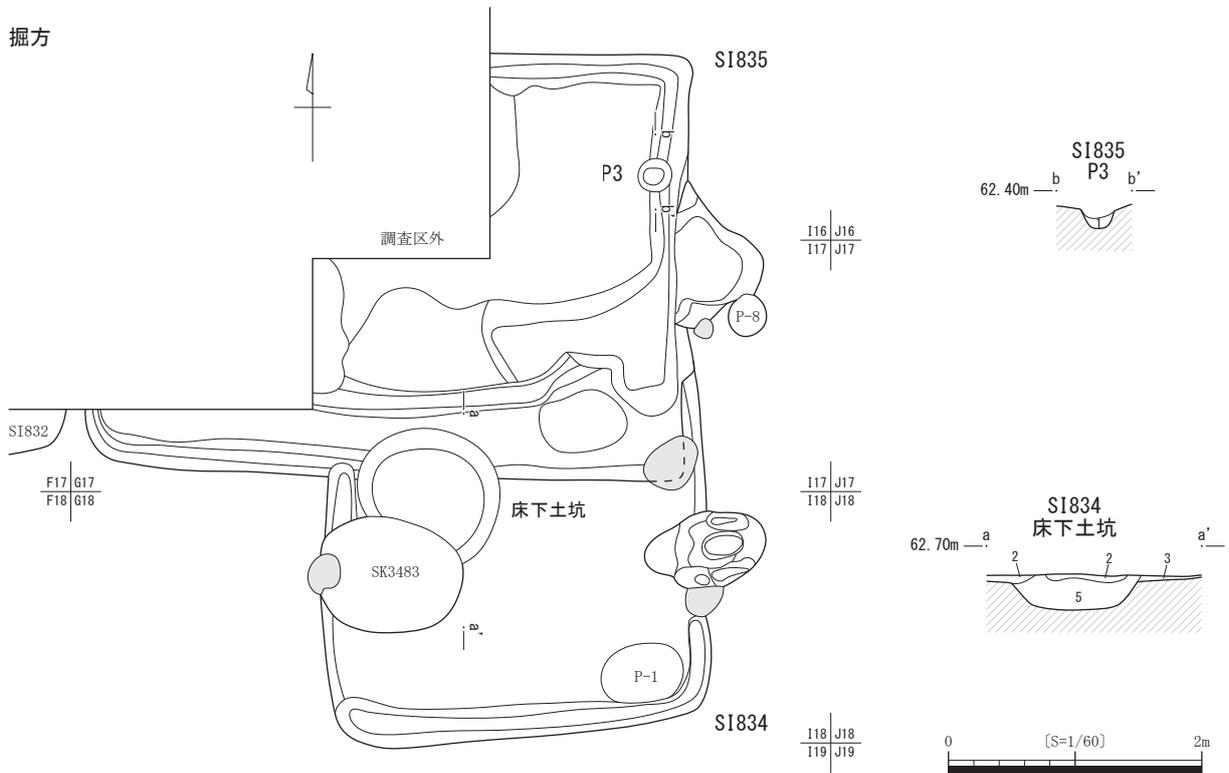
SI834 床下土坑			
2	10YR3/1	(黒褐色土)	焼土粒・ローム土を混じる。縮り強く硬質。SI834土層断面第2層と同じ。
5	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒(φ2～5mm)を多く、焼土粒をわずかに含む。縮りあり。SI834土層断面第5層と同じ。
SI835P3			
1	10YR3/2	(黒褐色土)	汚れたローム土を多く混じる。縮りなく軟質。上部に貼床あり。

床面検出状況

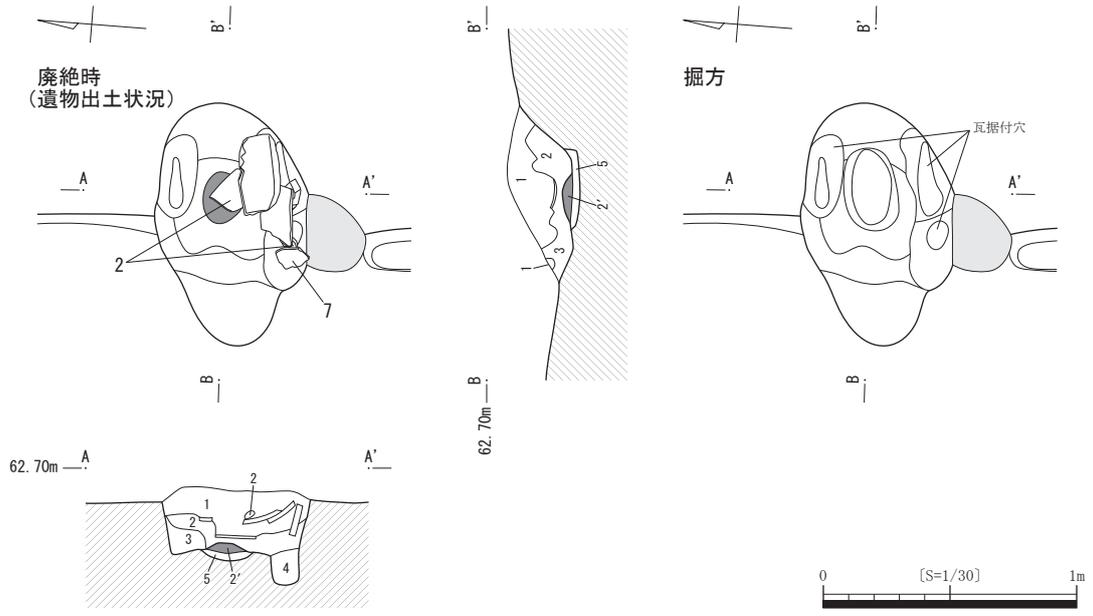


第 25 図 SI834・SI835 実測図

掘方



第 26 図 SI834・SI835 掘方実測図



SI834 カマド			
1	10YR3/1 (黒褐色土)	ローム粒 (φ 1~10mm)・焼土粒 (φ 1~10mm) を多く含む。やや締りあり。	
2	10R3/3 (暗赤褐色土)	焼土粒 (φ 2mm) を多く、炭化粒をわずかに含む。軟質。	
2'	10R6/8 (赤橙色土)	焼土 (火床部)	
3	10YR3/1 (黒褐色土)	褐色土を多く混じる。軟質。	
4	10YR4/6 (褐色土)	にぶい黄褐色粘土を多く混じる。(瓦据え方)	
5	10YR5/6 (黄褐色土)	焼土を混じる。軟質。	

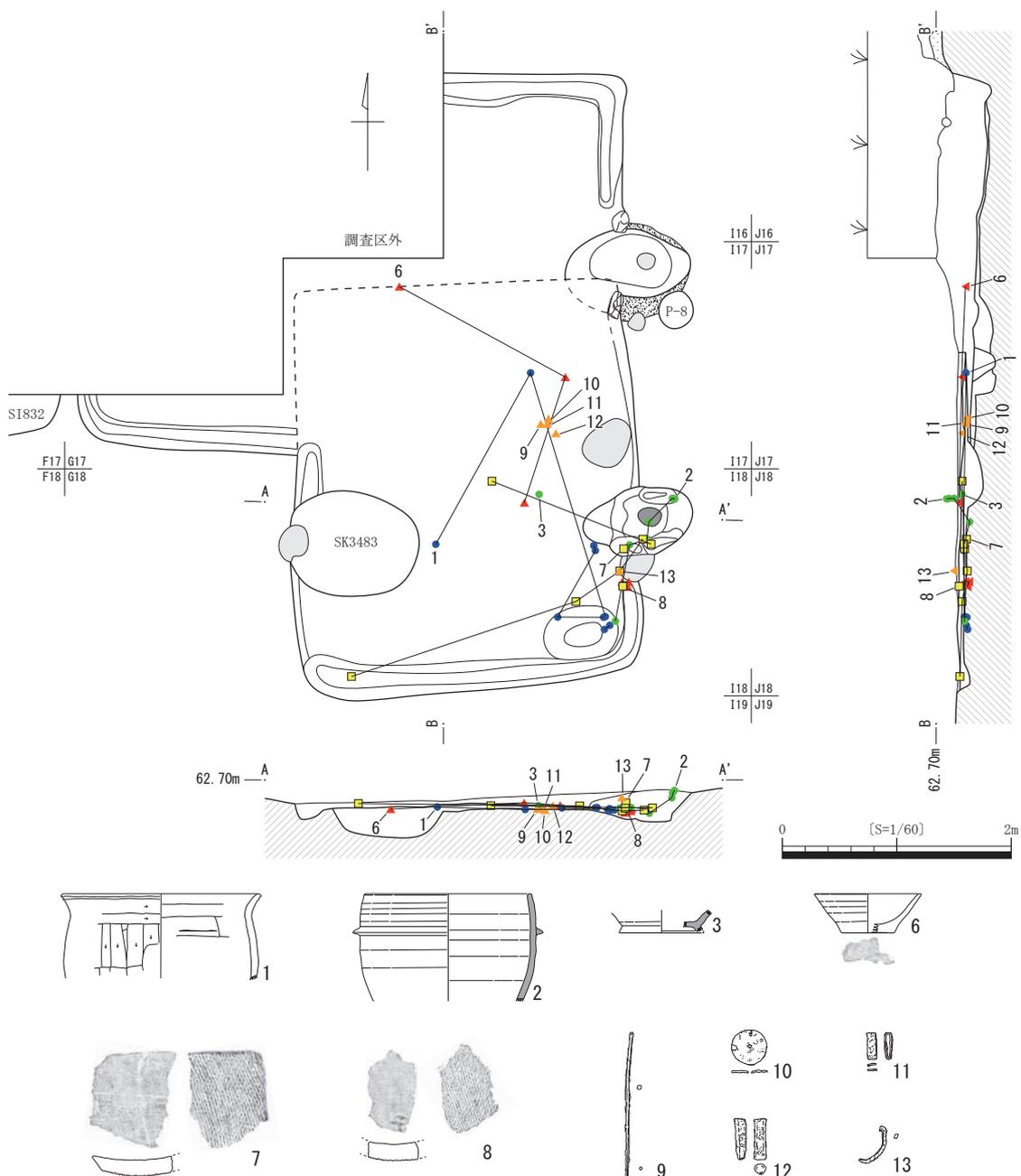
第 27 図 SI834 カマド実測図



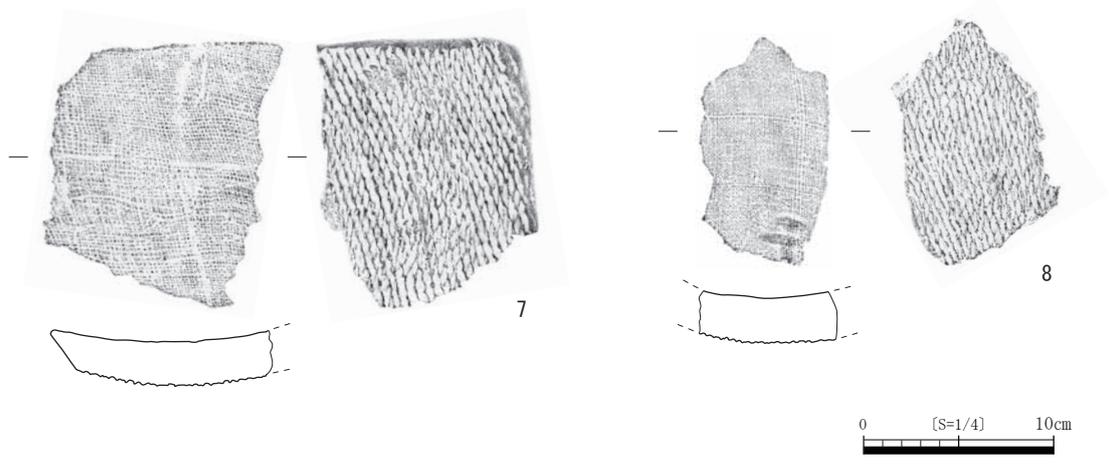
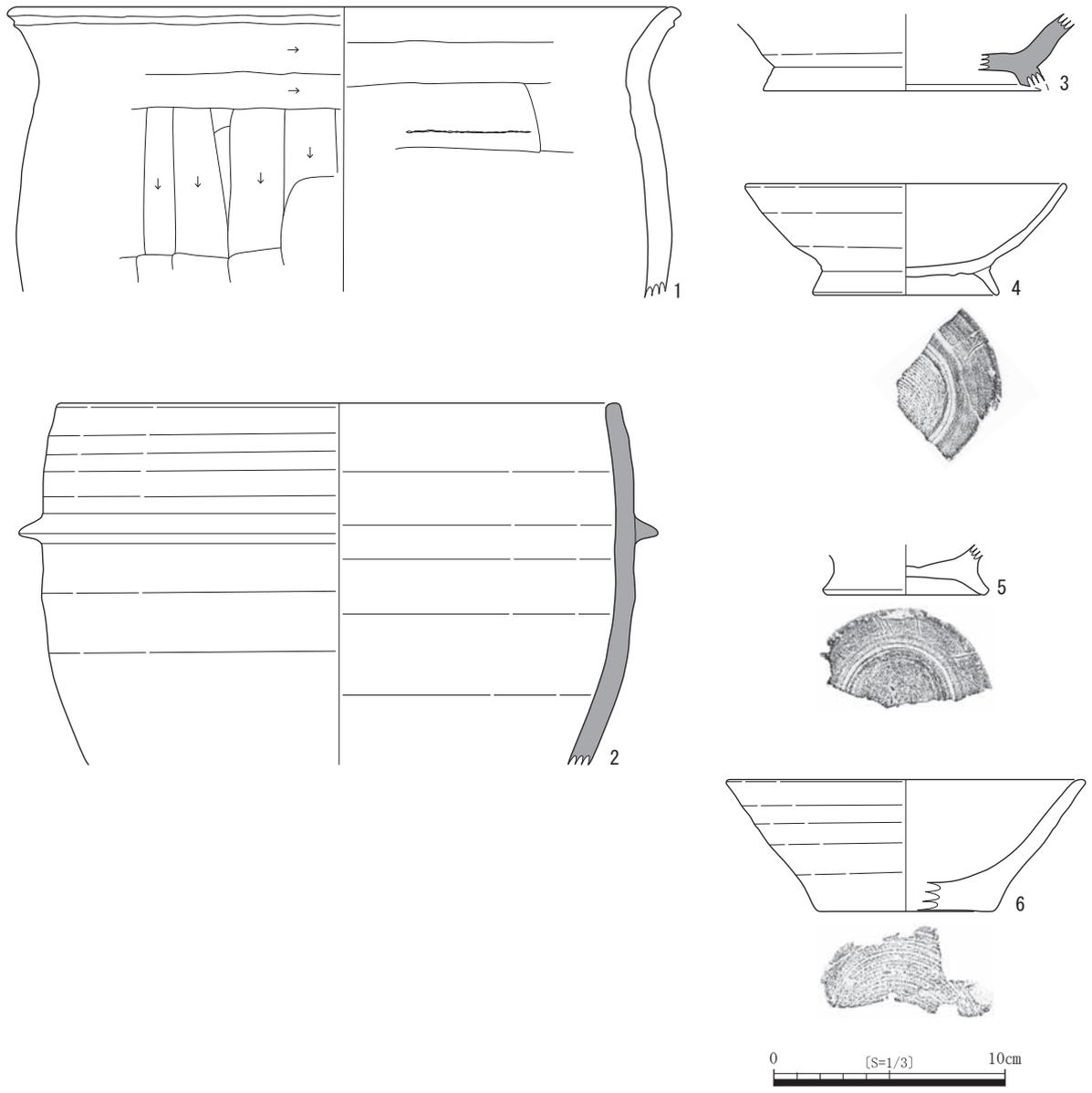
第 28 図 SI834 遺物出土状況図 (全点)

**出土遺物** 遺物はカマドおよびカマド前面から西壁までの中央部を中心に土師器26点、須恵器36点、土師質土器72点、灰釉陶器2点、瓦26点、鉄製品7、礫3点、縄文土器1点、縄文石器1点など計174点（12763.5g）が出土している。カマド・床直上出土を中心に14点を図示した。1は「く」の字状口縁の分厚い土師器甕である。2・3は須恵器で、2の羽釜は口縁部が直線的に立ち上がり、胴部下端のヘラケズリが無い形態と思われる（註2）。3は長頸壺の底部である。4～6は土師質土器で、4・5は高台付埴。6は口径15cmを超える大型碗で福田分類の1類に相当すると考えられる。7・8は何れもⅡ1-A1技法の女瓦で、7は南多摩窯産（G5窯式期）、8は模骨文字（逆字）「干」がある東金子窯産のものである。9～14は鉄製品で、9は紡錘車の紡茎、10は紡錘車の紡輪であり、同一個体と思われる。11は鍬（はばき）、12のは鉄板を筒状に加工したもので、鉄錘の可能性もある（註3）。13は折頭釘、14は埴型の鉄滓である。

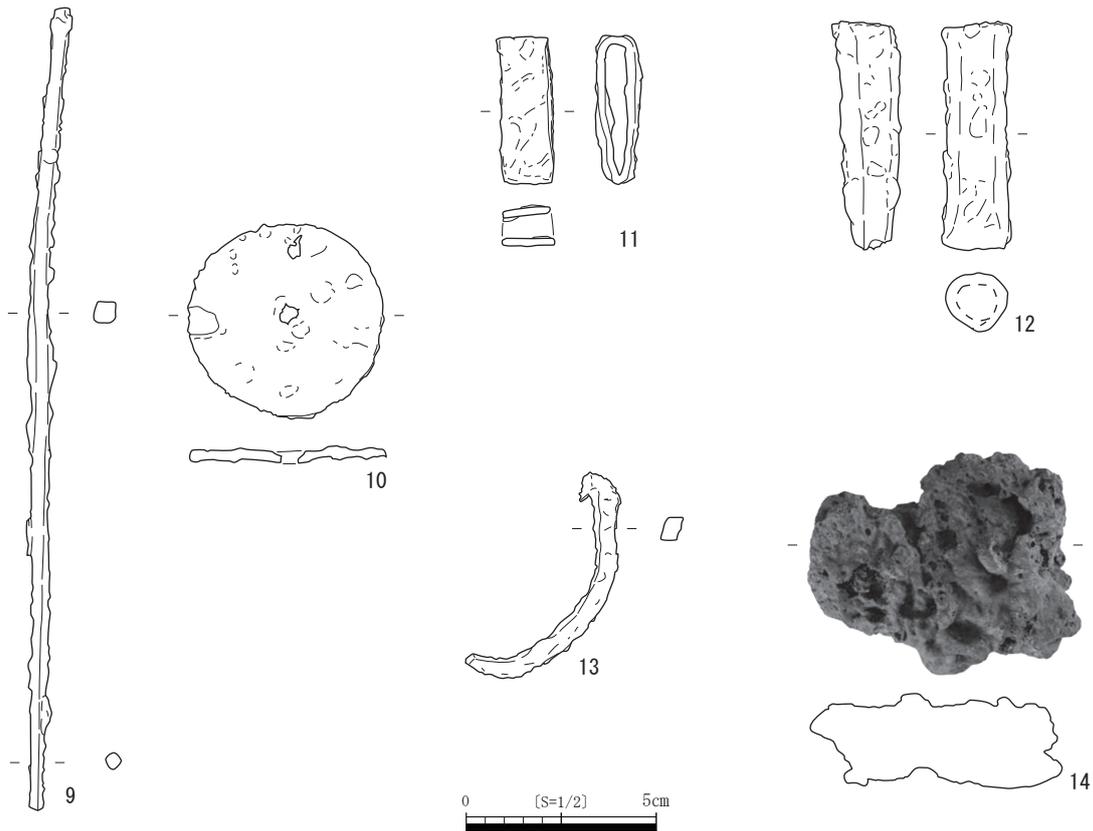
**時期** 福田分類22類の坏、足高高台埴、須恵器羽釜などから同分類編年の第I b群（10世紀末～11世紀初頭）に相当する時期と考えられる。



第29図 SI834 遺物出土状況図（実測個別別）



第 30 图 SI834 出土遺物実測図 (1)



第31図 SI834 出土遺物実測図(2)

第7表 SI834 出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径 器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
30-1 18-1-1	土師器 甕	覆土 床直	口縁~胴上部 破片	(28.4) [12.7] -	口縁部短く外反 全体的に分厚い	外面 口縁部横位ヘラナデ、 胴部縦位ヘラケズリ 内面 口縁部横ナデ、頸部 ~胴部横位ヘラナデ	内外面 にぶい 黄褐色	良好	砂粒中量、小 石少量	
30-2 18-1-2	須恵器 羽釜	カマド 床直	口縁~胴部 1/2 弱残	(24.0) [15.8] -	口縁部はやや内傾 するが直立気味に 立ち上がる 鏝は断面三角形	内外面横ナデ 口唇部平坦にケズリ、鏝貼 付	内外面 褐灰色 (還元焰と酸化 焰部分混在)	良好	白色粒多量、 砂粒中量、小 石少量	
30-3 18-1-3	須恵器 長頸壺	床直	底部破片	- [3.2] (11.0)		ロクロ成形 貼付高台	内外面 褐灰色	良好	白色粒少量	
30-4 18-1-4	土師質 土器 高台付塊	P1	口縁~底部 1/4 強残	(13.6) 4.85 (8.0)	体部下半内湾し、 口縁部直線的 高台は「ハ」の字 状に開く	ロクロ成形 底部回転糸切り後貼付高台	内外面 にぶい 橙色	良好	赤色粒多量、 細砂少量	
30-5 18-1-5	土師質 土器 高台付塊	床下土坑	底部 1/2 弱残	- [2.2] (6.8)	高台「ハ」の字状 に開く	ロクロ成形 貼付高台、高台部横ナデ	内外面 明褐色	良好	白色粒中量、 細砂	
30-6 18-1-6	土師質 土器 塊	床直	口縁~底部 口縁~体部極 小、底部 1/2 弱残	(15.4) 5.75 (7.6)	底部から直線的に 外傾する 全体的に分厚い	ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 橙色	良好	細砂、雲母中 量	

第8表 SI834 出土女瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	素材	成・整形の特徴				備考	
					凹面		凸面			端面
					布目	特徴	叩き	特徴		特徴
30-7 18-1-7	カマド	(11.2) -(14.0)	2.3	粘土紐	18×17	端縁 無調整			ナデ	II 1-A1 技法 南多摩窯産 G5 窯式
30-8 18-1-8	床直	[12.8] -	2.4	粘土紐	24×32	模骨文字「干」 あり	縄叩き L9 本			凹面に模骨文字逆字「干」 あり。II 1-A1 技法 東金子窯産

第9表 SI834 出土鉄製品観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚み		
31-9 18-1-9	紡錘車	床直	21.3	0.5	0.5	15.9	紡錘部
31-10 18-1-10	紡錘車	床直	径 5.2	孔径 0.5	0.2~0.3	11.7	紡輪部
31-11 18-1-11	罎	床直	3.9	1.4	0.2	9.3	
31-12 18-1-12	管状鉄製品	床直	6.1	1.7~1.9	0.3	27	鉄錘?
31-13 18-1-13	釘	床直	5.5 (7.5)	0.4	0.6	7.6	折頭釘?

第10表 SI834 出土鉄滓観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
31-14 18-1-14	椀型滓	覆土	6.9	5.8	2.2	110.3	

### SI835住居 (第26・32～36図、第11～14表、図版7・8・19)

**位置・検出状況** Aトレンチの西端付近中央部のG～I 16・17グリッドに位置し、住居の北西隅寄りの大部分が調査区域外である。遺構確認面はⅢc層である。住居の南側部分の上部にSI834住居が築造されているが、遺存状態は良好である。

**形状・規模** 平面形は長方形で、主軸方位はN-91°-Eである。規模は南北約3.40 m×東西約4.75 mで、遺構確認面から床面までの深さは最大で約0.26 m (南北壁断面Ⅲc層上面からの深さは約0.40 m)である。

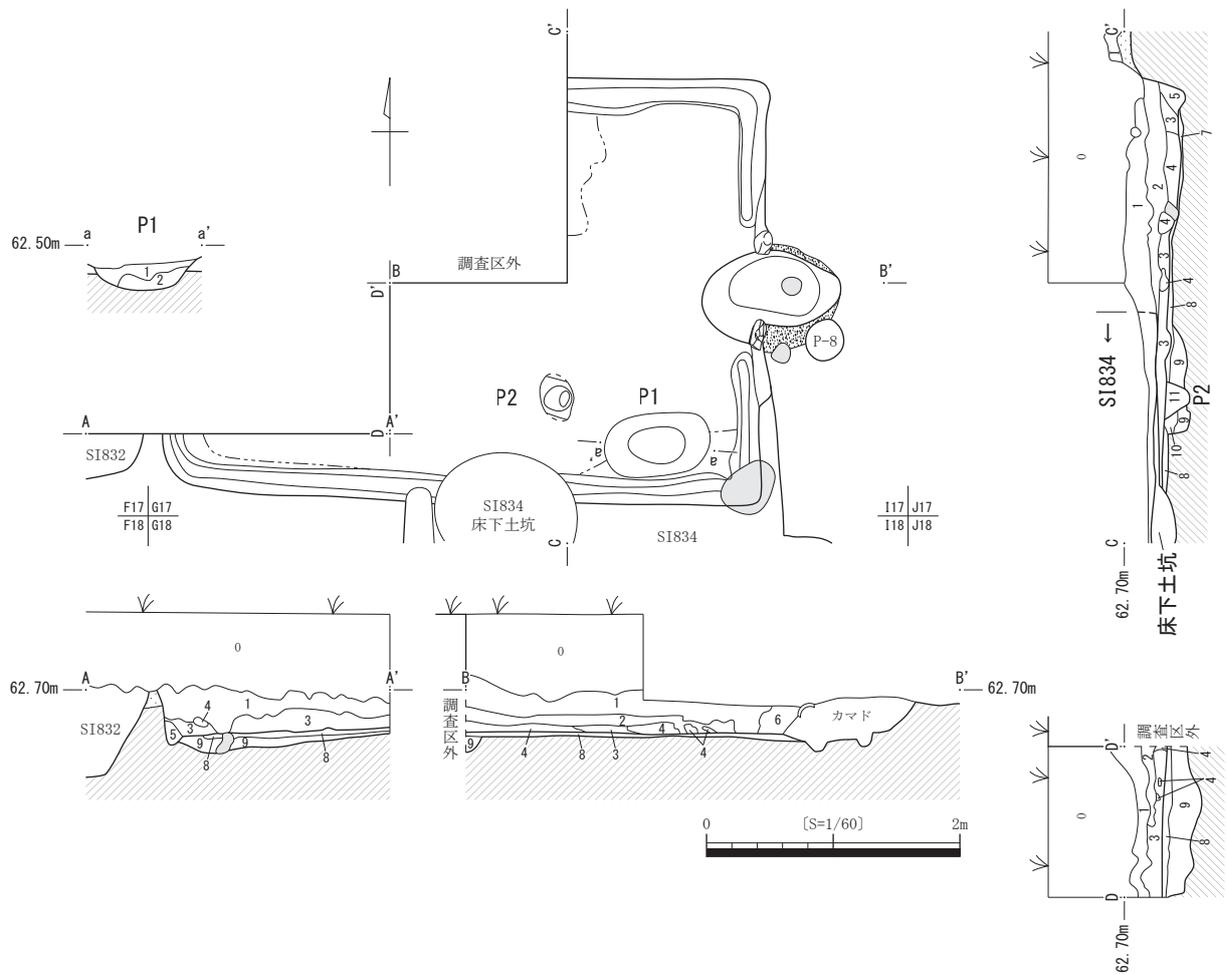
**覆土** 黒褐色土を主体とする6層からなる。その中で第3層(焼土・炭化物などを混じる)および第4層(焼土)は焼土主体の層で、この土層が住居の東半部を中心に床直上で検出された。焼土中に炭化材の小片が散在してはいるが、床面などに焼けた痕跡が見当たらず、また貯蔵穴状のP1内も上部に第3層と同質土が認められたが、P1上部出土の木質が残存する折頭釘(11・12・14)も焼けた痕跡は見られず、住居廃絶時に埋め込まれたものと考えられる。

**壁・床面・周溝** 壁はやや垂直気味に立ち上がる。床面は厚みが6～8 cmの暗褐色土とローム土の混合土による貼床(8層)で、住居全体に及んでいる。周溝は南壁の大部分と北壁の一部が明らかでないが、カマド前面部分を除き全周するものと考えられる。最大幅30 cm、深さ約10 cmである。

**ピット** ピットは床面上で2基(P1・P2)、掘方の東壁北寄りに1基(P3)が検出された。貯蔵穴状のP1は、長軸約85 cm×短軸約50 cmの楕円形で深さは24 cmほどであり、第3層の焼土層が上部を覆っている。不整形のP2は径25 cm、深さが28 cmである。円形のP3は径約26 cm、深さ28 cmである。

**カマド** 東壁の中央に位置する。カマド検出当初は、焚口の両側で住居壁に接して頭大の石が据え付けられており、さらに壁外の張り出しに沿って灰白色粘土が認められたことから、残存状態に期待が持たれた。しかし、残念なことに予想外の木の根や後世の攪乱があり、またカマドの構築材を持ち去ったようで、焚口の両側石の裏込め土(5層)と燃焼部側壁のわずかな残存粘土以外はほとんど残っていなかった。規模は幅約100 cm、奥行き110 cmを測り、壁外に約60 cm張り出している。構築材は粘土主体であったようで、瓦の据付穴の痕跡は全く認められず、壁に張り付く焚口両側石の存在もあり、住居内への袖の張出しも認められなかった。

**掘方** 住居の大部分が最大8 cmほど平坦に掘られているが、カマド前面～南東隅～南壁にかけての部分が20 cmほど深くなっている。特に南壁側では、南壁から約55 cmの住居内に幅20～30 cm、深さ20 cmの周溝状の小溝が長さ2.30 mにわたって検出された。住居西側の未調査部分が多く、即断はできないが、住居が拡張されている可能性が考えられる。

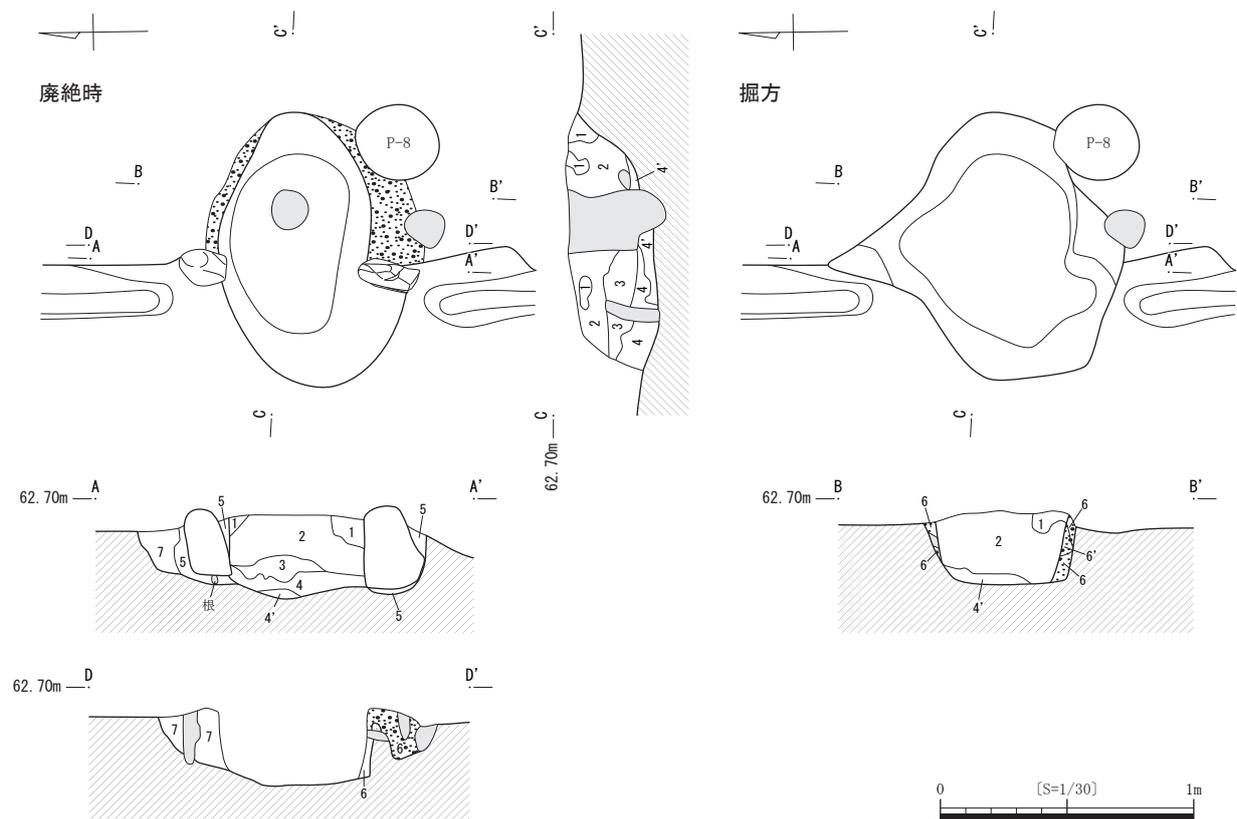


SI835			
1	10YR3/2	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒・焼土微粒を含む。西半部焼土粒(φ2~5mm)多い。縮りあり。
2	10YR3/21	(黒褐色土)	焼土粒・炭化物粒を含み、暗褐色土を混じる。カマド寄りには灰白色粘土多く混じる。縮りあり。
3	10YR3/1	(黒褐色土)	焼土・焼土粒・炭化物・灰白色粘土を多く混じる。縮りあり。
4	10R6/8	(赤橙色土)	黒褐色・炭化物をわずかにわずかに混じる焼土。さらさらしている。
5	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム土を混じる。やや縮りあり。(周溝)
6	10YR3/2	(黒褐色土)	灰白色粘土・焼土粒・炭化物を多く含む。カマド崩壊土。
7	10YR6/6	(明黄褐色土)	焼土粒を混じるソフトローム。軟質。
8	10YR2/3	(黒褐色土)	焼土粒・暗褐色土・ローム土の混合土。よく縮り非常に硬い。(貼床)
9	10YR3/3	(暗褐色土)	暗褐色土・ローム土・黒褐色の混合土。よく縮り硬い。(掘方)
10	10YR2/1	(黒色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒をわずかに含む。よく縮り硬い。
11	10YR3/2	(黒褐色土)	P2、ローム粒(φ3mm)を多く含む。縮りあり。上部に貼床あり。
P1			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	焼土・炭化物を多く、ローム土を少し混じる。やや軟質。
2	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒を・暗褐色土小ブロック(φ10mm)を混じる。よく縮り硬質。
P2			
11	10YR3/2	(黒褐色土)	ローム粒(φ3mm)を多く含む。縮りあり。上部に貼床あり。

第 32 図 SI835 実測図

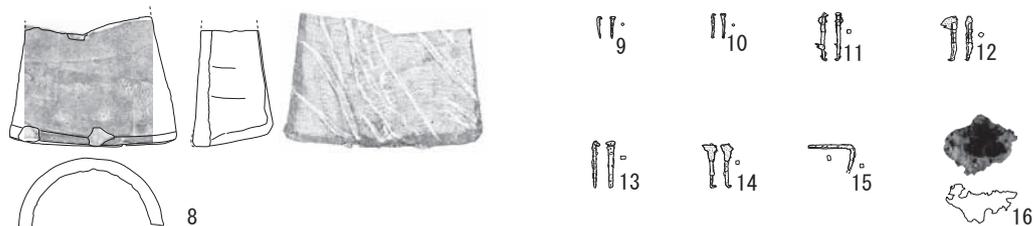
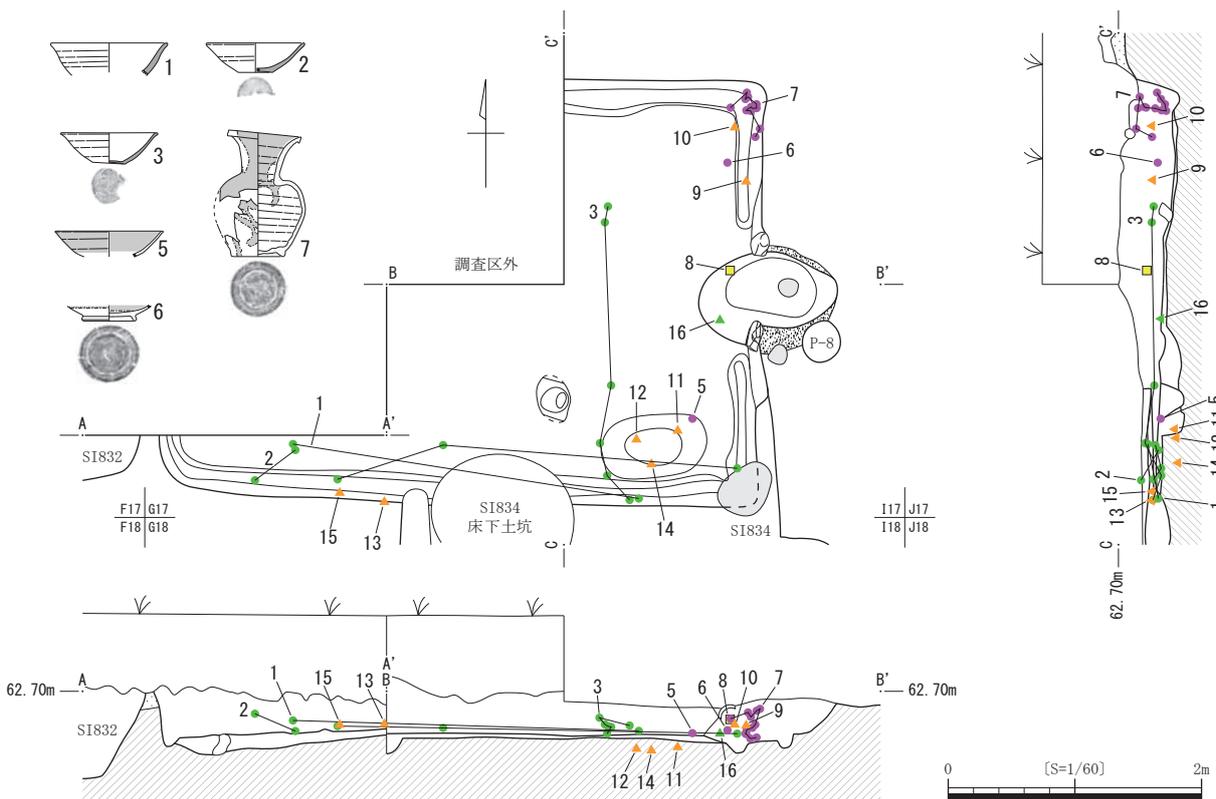
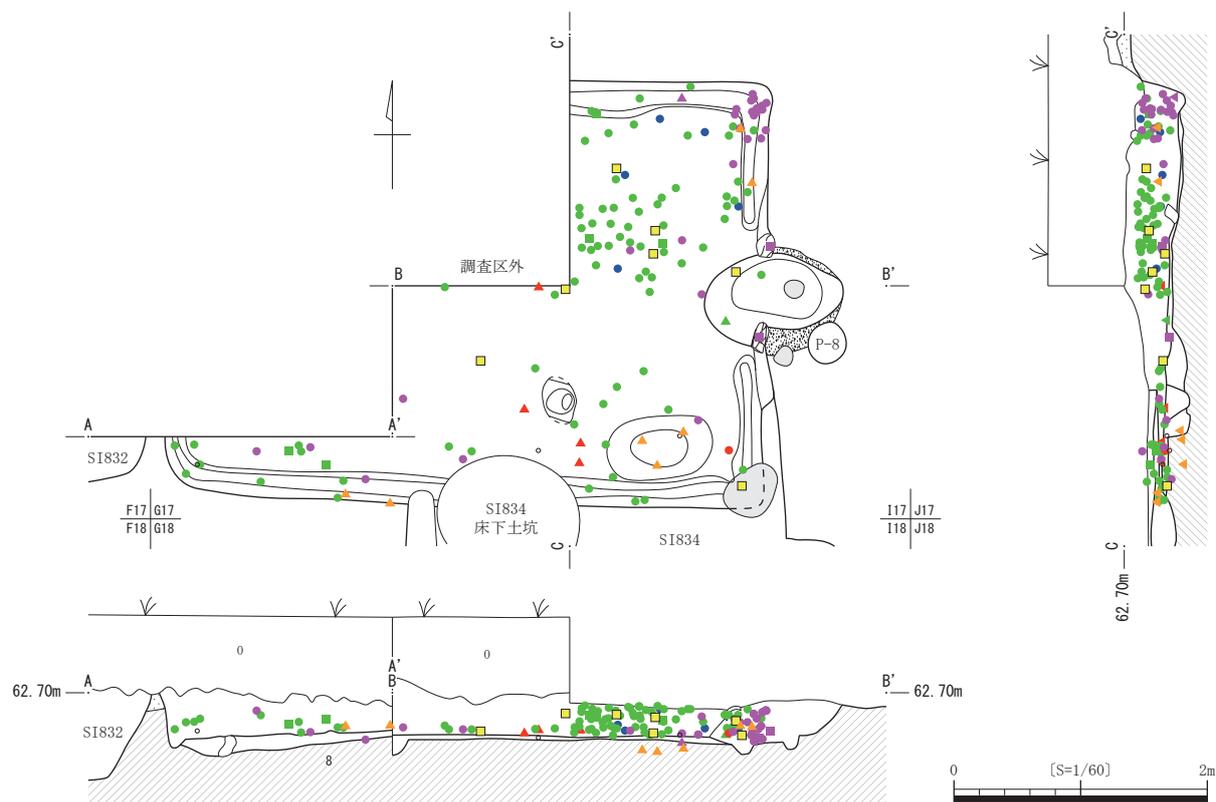
**出土遺物** 遺物はカマド前面から西壁にかけて土師器7点、須恵器96点、土師質土器4点、灰釉陶器12点、緑釉陶器1点、瓦9点、鉄製品8点、石製品2、礫3点、縄文土器11点など計153点（24937.8g）が出土している。住居廃棄時の埋戻しと考えられる覆土（第3層および第4層）出土を中心に14点を図示した。1～4は須恵器坏で、1は南多摩窯跡群編年G5古窯式期に相当する（服部他2011）。2～3は同編年G5新窯式期でも終末（旧G14窯式）に相当すると考えられる。5～7は灰釉陶器で、5・6は体部内外面をハケ塗り施釉するK-90窯式後半の坩、7は長頸壺で口縁部と胴部の接合が2段構成、口頸部から胴部上半をハケ塗りするK-90窯式後半のものと思われる（愛知県史編さん委員会2015）。8はI2-A1技法の男瓦で、東金子窯産のものである。9～14は鉄製品で、9・10は小型の折頭釘、11～14は折頭釘（11・12・14には木質残存）、15は門金具、16は坩型の鉄滓である。これらの遺物の大部分は住居廃棄時の埋戻しと考えられる覆土（第3層および第4層）から出土しており、その年代幅も灰釉陶器（K-90窯式後半）の9世紀末頃から須恵器G5新窯式期終末（旧G14窯式）の10世紀第3四半期頃と長期に及ぶものであるが、本住居に伴うものではない。

**時期** 本住居は10世紀第3四半期頃に廃棄されたものと考えられるが、住居の形態（東カマド、規模が大きい、床面まで深い）および住居の拡張などを考え合わせると時期は遡り、SI838・SI840の時期に近い10世紀前半代と考えられる。

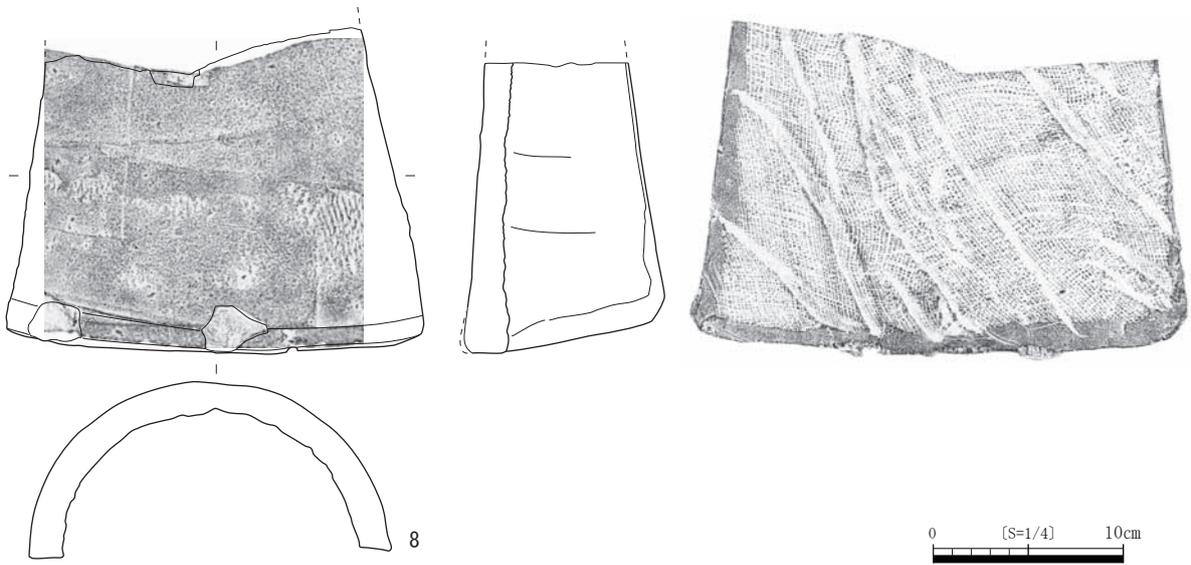
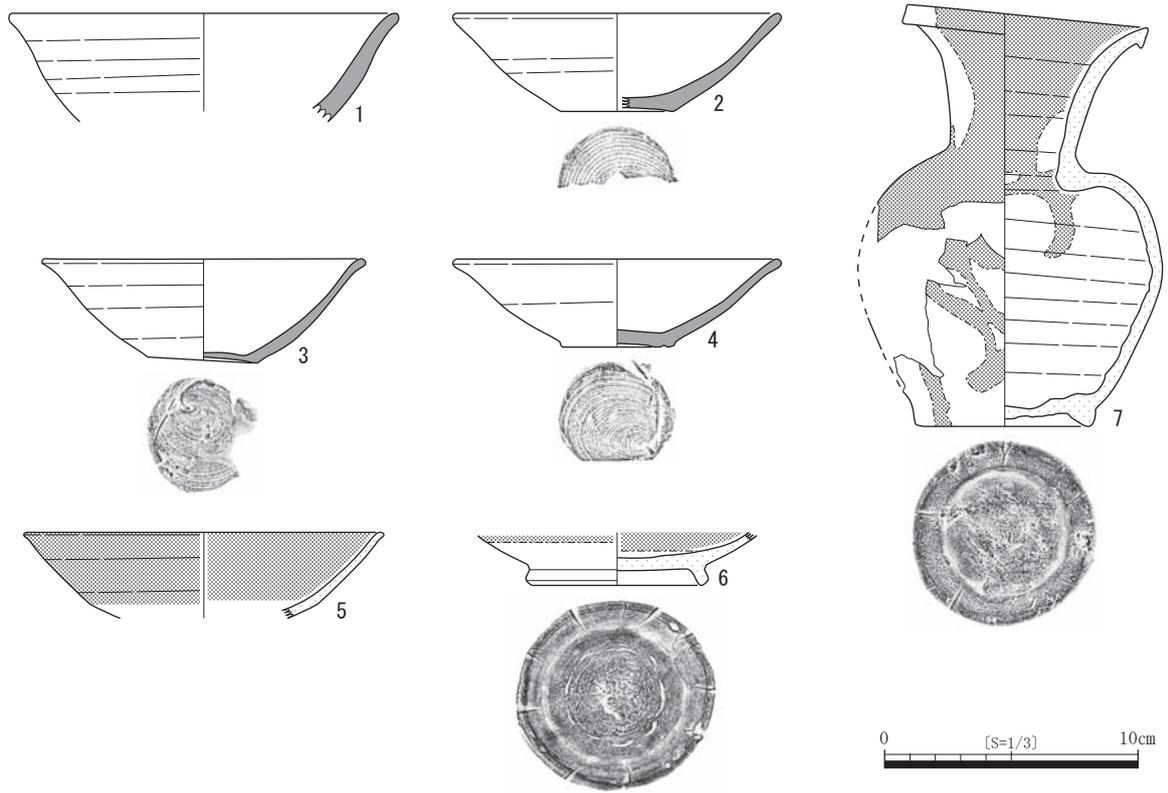


SI835 カマド			
1	10YR8/2	(灰白色粘土)	焼土粒・炭化物粒をわずかに混じる。
2	10YR5/2	(灰黄褐色土)	灰白色粘土・焼土粒(φ2mm)・炭化物粒を多く混じる。
3	10R6/8	(赤橙色土)	焼土ブロックと灰白色粘土の混合土
4	10YR3/2	(黒褐色土)	焼土粒・炭化物粒を少し混じる。
4'	10YR3/2	(黒褐色土)	焼土粒・ローム土をわずかに混じる。よく締り硬質。
5	10YR3/2	(黒褐色土)	焼土粒・灰白色粘土をわずかに混じる。焚口立石の裏込め土
6	10YR5/2	(灰黄褐色土)	灰白色粘土を少し混じる。側壁粘土残存部分。
6'	10R6/6	(赤橙色土)	焼けた灰白色粘土。側壁粘土残存部分。
7	10YR3/2	(黒褐色土)	焼土粒・炭化物粒をわずかに混じる。

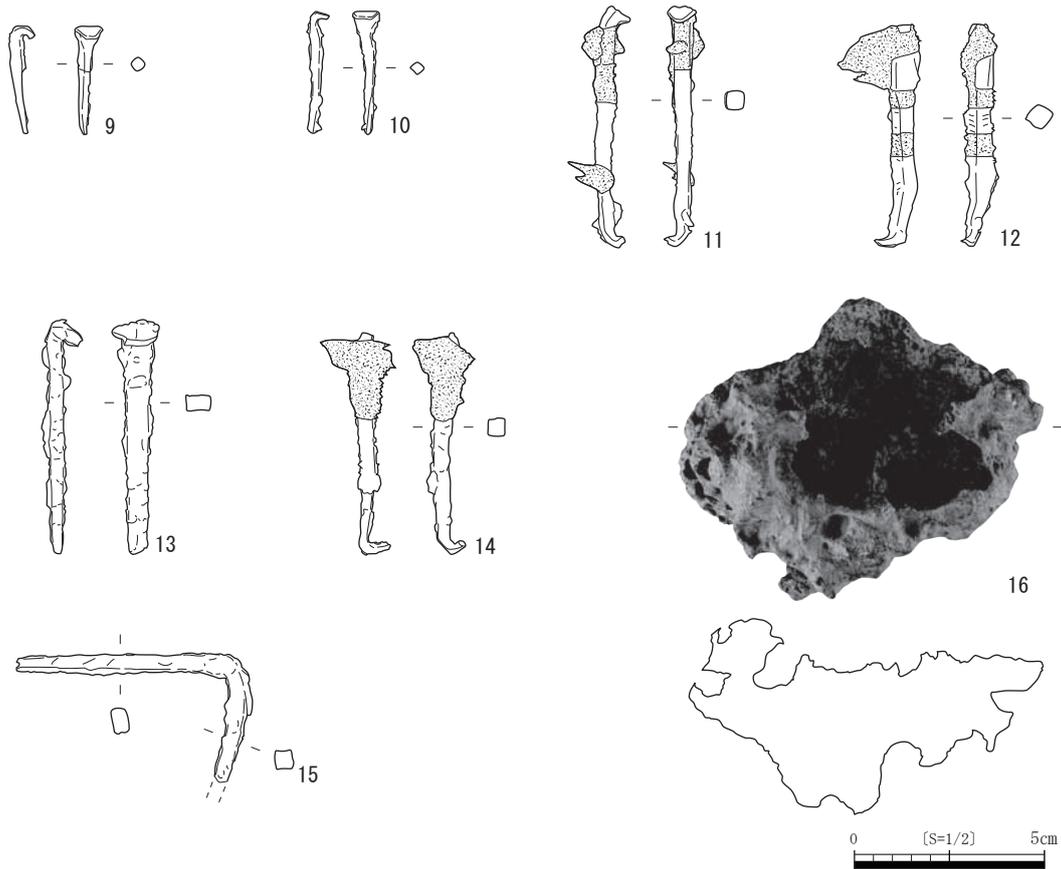
第33図 SI835 カマド実測図



第 34 図 SI835 遺物出土状況図 (上図：全点・下図：実測個体別)



第 35 図 SI835 出土遺物実測図 (1)



第 36 図 SI835 出土遺物実測図 (2)

第 11 表 SI835 出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
35-1 19-1-1	須恵器 坏	床直	口縁~体部 口縁部 1/4、 体部 1/2 弱残	(15.2) [4.3] -		ロクロ成形	外面 にぶい橙 色 内面 灰黄褐 色、橙色	良好	微砂粒多量、 雲母少量、赤 色粒子微量	南多摩窯産 G5 古窯式
35-2 19-1-2	須恵器 坏	P1 覆土	口縁~底部 口縁~体部 1/4、底部 1/2 弱残	(12.6) 3.9 (4.6) (3.6)		ロクロ成形 底部回転系切り無調整 口縁部横ナデ	内外面 にぶい 黄橙色 (酸化燐)	良好	細砂中量、雲 母少量	南多摩窯産 G5 新窯式
35-3 19-1-3	須恵器 坏	床直	口縁~底部 1/2 強残	12.5 4.1 4.4 (3.7)		ロクロ成形 底部回転系切り無調整	内外面 浅黄橙 色 (酸化燐)	良好	細砂少量	南多摩窯産 G5 新窯式
35-4 19-1-4	須恵器 坏	P1 覆土	口縁~底部 口縁~体部 1/4、底部ほ ぼ完存	(12.6) 3.5 4.6 4.0		ロクロ成形 底部回転系切り無調整	内外面 灰白色	やや軟 質	砂粒少量	南多摩窯産 G5 新窯式
35-5 19-1-5	灰釉陶器 塊	P1	口縁~体部破 片	(14.0) [3.4] -		ロクロ水挽き成形 体部内外面刷毛塗り施釉	地 灰色 施釉 灰オリーブ 色	堅緻	白色粒微量	K-90 窯式後半
35-6 19-1-6	灰釉陶器 塊	覆土	底部~体部底 部完存、体部 極小残	- [2.1] 6.8	三日月高台	ロクロ水挽き成形 底部~体部下端回転ヘラケ ズリ調整後貼付高台 体部外面・内面見込み部分 を除きハケ塗り施釉	地 灰白色 施釉 にぶい黄 色	堅緻	細砂	K-90 窯式後半
35-7 19-1-7	灰釉陶器 長頸瓶	覆土	ほぼ完形 胴部 2/3 残	9.6 16.75 7.0	口頸部がラッパ状 に開き、口縁部に 縁帯を作る	接合は二段構成 底部~胴部下半回転ヘラケ ズリ調整後貼付高台 口縁部内面、口頸部下端~ 胴部上半ハケ塗り施釉	地 灰白色 施釉 オリーブ 黄色	堅緻	白色粒中量	K-90 窯式

第 12 表 SI835 出土男瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴					備考	
				素材	凹面		凸面			端面 特徴
					布目	特徴	叩き	特徴		
35-8 19-1-8	カマド	22.0 [15.5]	1.8	粘土紐	14 × 19	狭端除く三端縁 ヘラケズリ	縄叩き	回転ナデ・狭端 除く三端縁ヘラ ケズリ	狭端除く三端縁 ヘラケズリ	I 2-A1 技法。凸面に自然釉 あり 東金子窯産

第13表 SI835 出土鉄製品観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚み		
36-9 19-1-9	折頭釘	覆土	2.85	0.3	0.3	0.8	
36-10 19-1-10	折頭釘	覆土	3.2	0.3	0.3	0.8	
36-11 19-1-11	折頭釘	P1	6.4	0.5	0.5	4.4	釘の上下で木目の方向異なる(板の合わせ目)
36-12 19-1-12	折頭釘	P1	[5.9]	0.5	0.5	5.7	頭部分欠失。上半部に木質残存
36-13 19-1-13	折頭釘	床直	6.2	0.65	0.4	7.9	
36-14 19-1-14	折頭釘	P1	5.9	0.45	0.5	5.5	上半部に木質残存
36-15 19-1-15	門金具	床直	6.2	0.4~0.6	0.4~0.7	6.8	

第14表 SI835 出土鉄滓観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
36-16 19-1-16	椀型滓	カマド	9.3	7.3	5.2	236.6	

### SI836住居 (第37～40図、第15表、図版8・9・20)

**位置・検出状況** Aトレンチ中央部のL～N17・18グリッドに位置し、遺構確認面はⅢc層である。住居のカマドから東壁にかけての部分がSI837住居を切っている。住居カマド寄りを横切るイモ穴により壊されており、遺存状態は余り良くない。

**形状・規模** 平面形は長方形で、主軸方位はN-1°-Eである。規模は南北約2.40 m×東西約2.95 mで、遺構確認面から床面までの深さは約0.10 mである。

**覆土** 黒褐色土の1層からなる。

**壁・床面・周溝** 壁はやや外傾気味に立ち上がる。床面はカマド前面から住居中央部にかけて南北1.70 m×東西1.50 mの範囲に硬化面が認められ、カマド前面部分に貼床がみられた。周溝は検出されなかった。

**ピット** ピットは検出されなかった。

**カマド** 北壁の北東隅寄りに位置する。カマド構築材の大部分を持ち去ったようで、覆土に白色粘土粒や焼土がわずかに見られる程度であった。規模は幅約54cm、奥行き65cmを測り、壁外に約30cm張り出している。瓦の据付穴の痕跡は全く認められず、構築材が粘土主体であったようである。

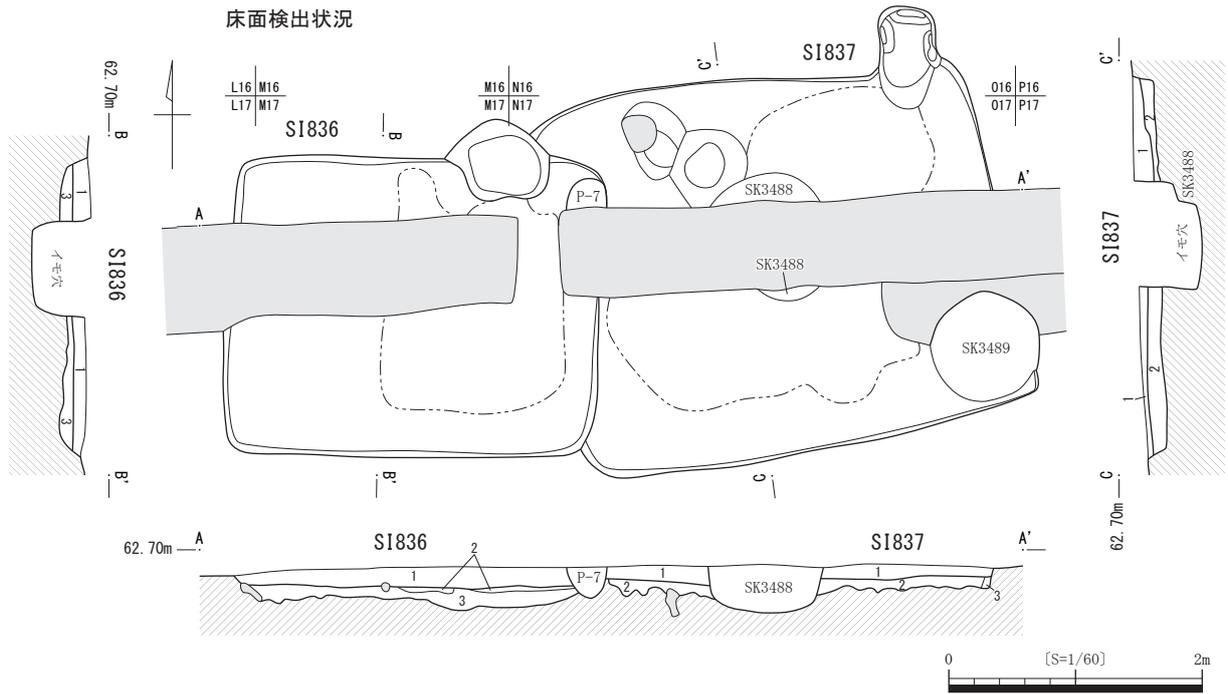
**掘方** 住居のカマド前面部分が深さ20cmほどの窪みになっている以外は、大部分が深さ10cmほど平坦に掘られている。

**出土遺物** 遺物はカマド前面を中心に土師器13点、須恵器14点、土師質土器35点、灰釉陶器1点、瓦9点、陶磁器1点、礫1点、縄文石器1点など計75点(4454.2g)が出土しているが図示できるものが少ない。カマド出土など3点を図示した。1は須恵器坏、2は須恵器大型塊で、何れも南多摩窯産と思われる。3は土師質土器の高台付塊である。

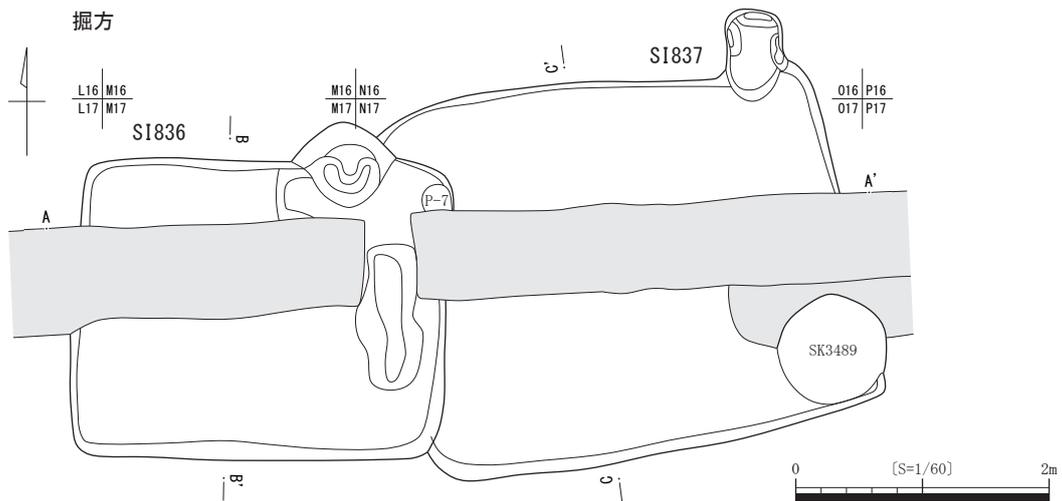
**時期** 土師質土器の高台付塊から福田分類編年の第Ⅱ群(11世紀中葉～後半)に相当する時期と考えられる。

### SI837住居 (第37・41～43図、第16～18表、図版8～10・20)

**位置・検出状況** Aトレンチ中央部のN・O16・17グリッドに位置し、遺構確認面はⅢc層である。住居の西壁側部分をSI836住居に、中央部分をSK3488土坑に、南東隅部分をSK3489土坑によってそれぞれ切られている。また、住居中央部を横切るイモ穴により壊されており、遺存状態は余り良くない。



SI836			
1	10YR2/2	(黒褐色土)	ローム微粒を含み、部分的に炭化物粒・焼土粒をわずかに混じる。締りあり。
2	10YR3/3	(暗褐色土)	焼土粒をわずかに混じる暗褐色土ブロック。よく締り硬質。(貼床)
3	10YR3/3	(暗褐色土)	暗褐色土ブロック・ロームブロック・黒褐色土の混合土。よく締り硬質。(掘方)
SI837			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム微粒を含み、部分的に炭化物粒・焼土粒(φ 2~5mm)を少し混じる。締りあり。
2	10YR3/3	(暗褐色土)	褐色土・ローム土・黒褐色土の混合土。よく締り硬質。(掘方)
3	10YR2/1	(黒色土)	ローム土(φ 10mm)を混じる。やや締りあり。



第 37 図 SI836・SI837 実測図

**形状・規模** 平面形は長方形で、主軸方位はN-11°-Eである。規模は南北推定約3.10 m×東西推定約3.70 mで、遺構確認面から床面までの深さは最大約0.10 mである。

**覆土** 黒褐色土の1層からなる。

**壁・床面・周溝** 壁はやや外傾気味に立ち上がる。床面はカマド前面から住居中央部にかけて南北2.45 m×東西2.20 mの範囲に硬化面が認められた。周溝は検出されなかった。

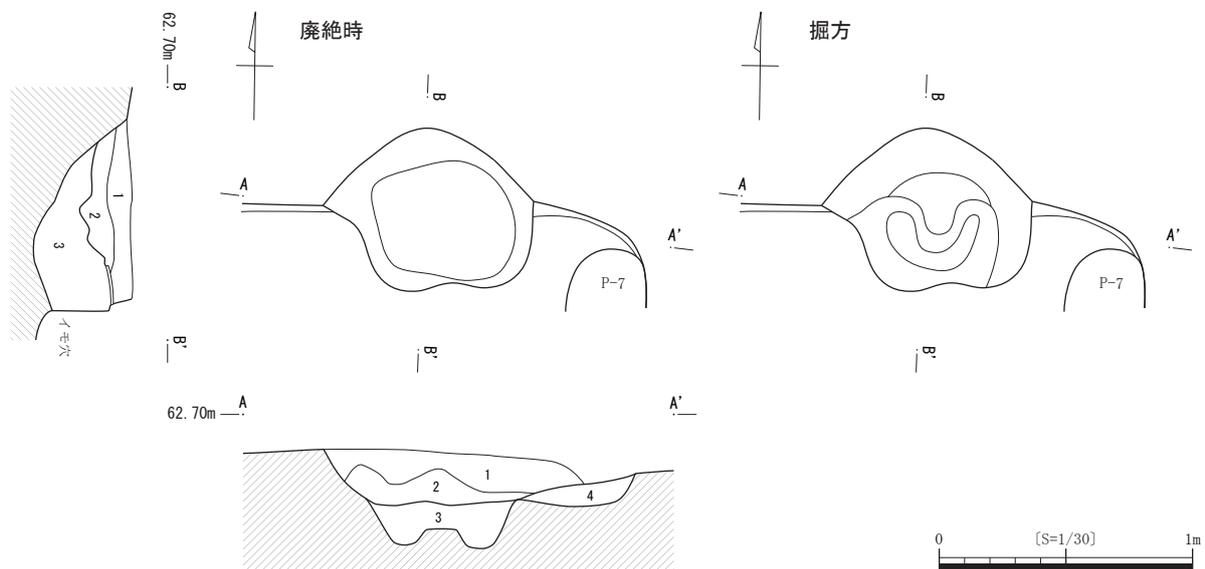
**ピット** ピットは検出されなかった。

**カマド** 北東隅壁に位置する。カマド構築材の大部分を持ち去ったようで、覆土に焼土や炭化物粒がわずかに見られる程度であった。規模は幅約50cm、奥行き74cmを測り、壁外に約46cm張り出している。瓦の据付穴と考えられる小穴が奥壁下に1基、両側壁下に2基認められた。

**掘方** 住居の大部分が深さ10～15cm、南側にやや傾斜して掘られている。

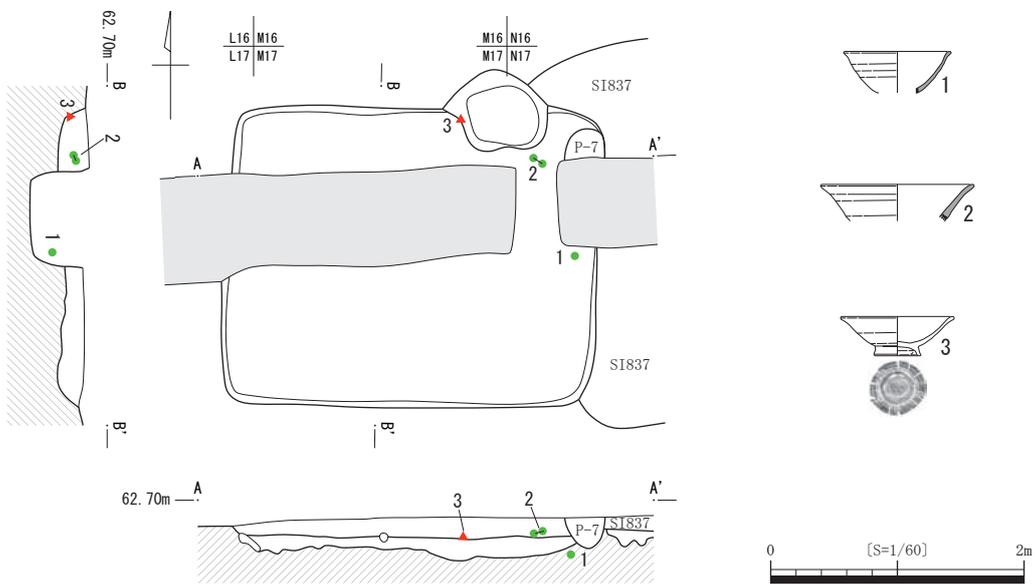
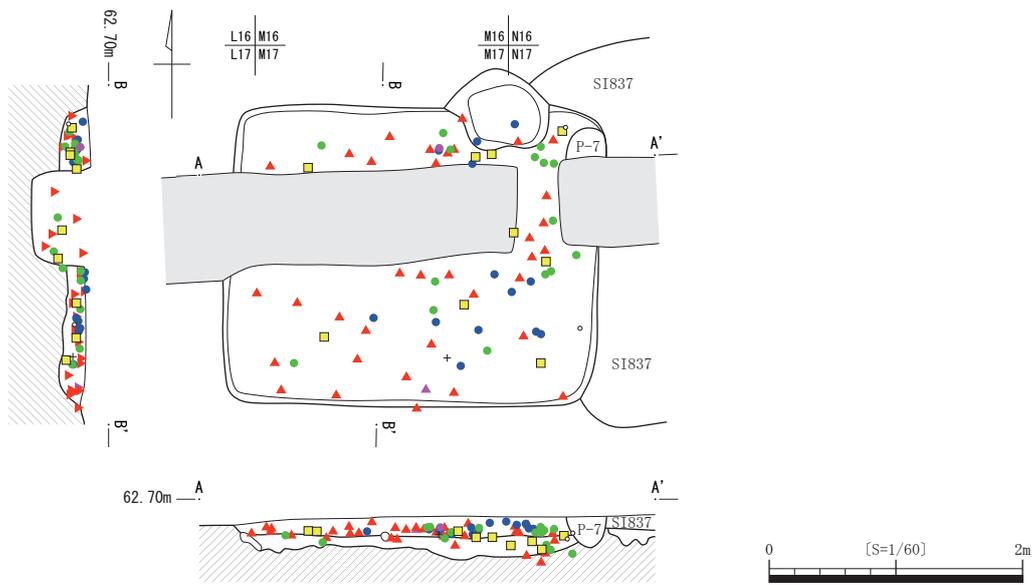
**出土遺物** 遺物はカマドとカマド前面、および住居西半部を中心に土師器20点、須恵器35点、灰釉陶器1点、瓦9点、鉄製品1点、縄文土器6点など計72点（2985.9g）が出土している。カマド・床直上出土を中心に7点を図示した。1の土師器甕は「コ」の字状口縁の武蔵型甕で、落川・一宮遺跡編年の第28段階に相当する（福田健司2002・2017）。2～5は須恵器で、2・3の坏は南多摩窯跡群編年G5古窯式期に相当する。4は長頸壺の底部、5は甕の内面を研面とした転用硯である。6はII1-A1技法の女瓦で、南多摩窯産（G5窯式期）のものである。7は鉄製品の刀子で、切先と茎尻を決失する。

**時期** 土師器甕、須恵器坏、女瓦などから南多摩窯跡群編年G5古窯式期（9世紀末～10世紀第1四半期）に相当する時期と考えられるが、カマドが住居の隅寄りにあり、壁に対して90°の向きで構築されることや、床面の深さが浅いなどの住居形態から、時期は11世紀前半代の可能性が高い。

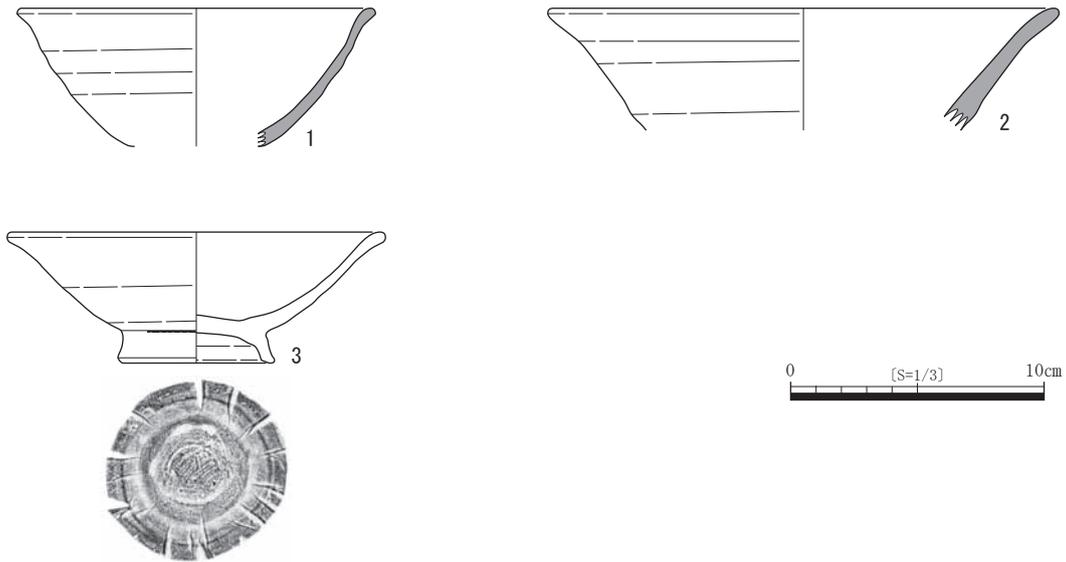


SI836 カマド			
1	10YR2/2	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒をわずかに含み、焼土微粒・炭化物粒を少し混じる。
2	10YR2/2	(黒褐色土)	灰白色粘土・焼土微粒・炭化物粒をわずかに混じる。
3	10YR3/2	(黒褐色土)	暗褐色土・黒褐色土の混合土。よく締り硬質。(掘方)

第38図 SI836 カマド実測図



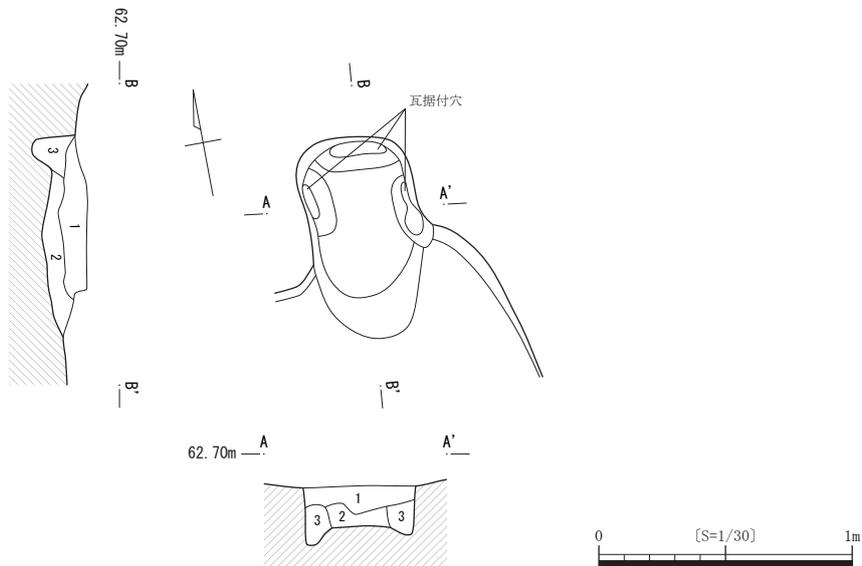
第 39 図 SI836 遺物出土状況図 (上図：全点・下図：実測個体別)



第 40 図 SI836 出土遺物実測図

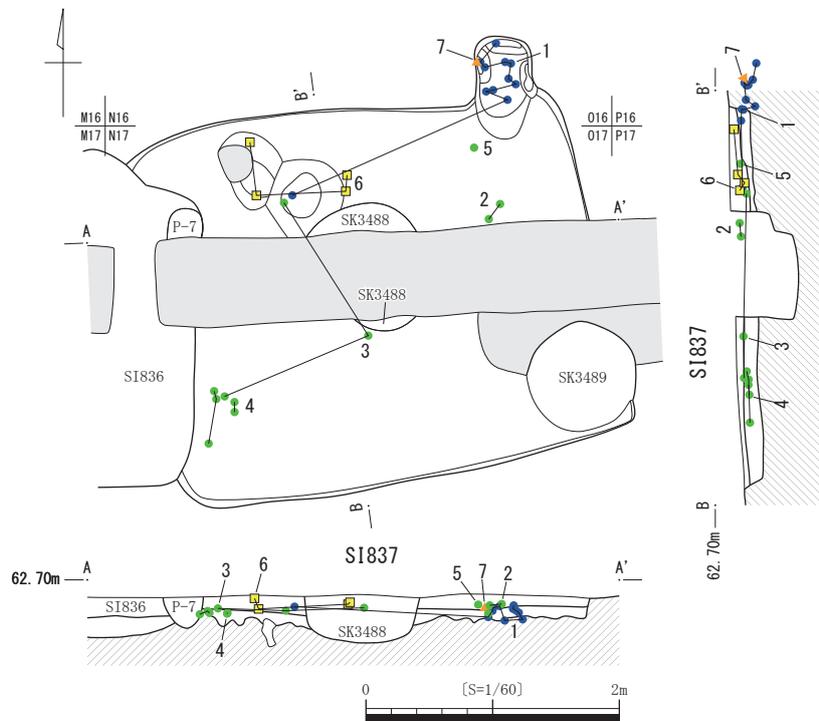
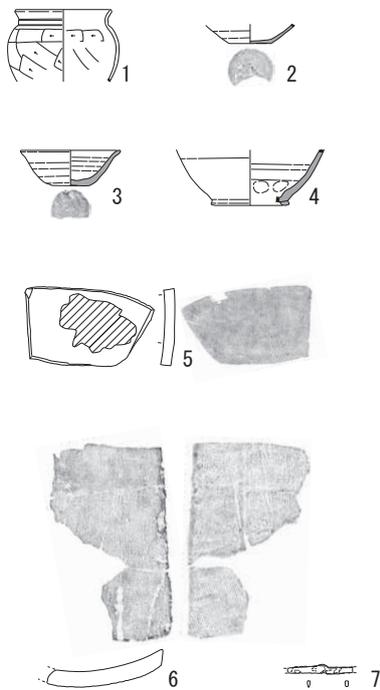
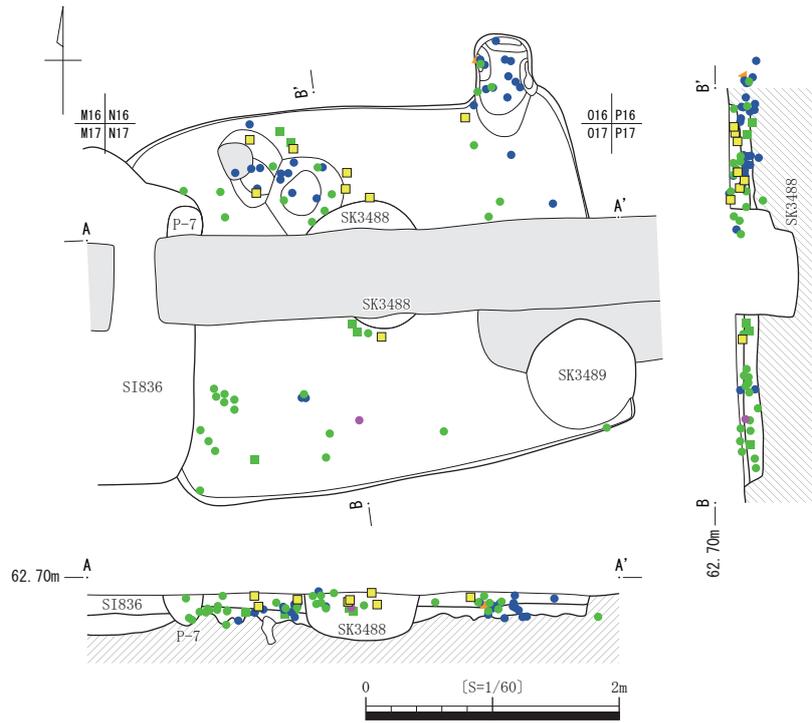
第 15 表 SI836 出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径 器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
40-1 20-1-1	須恵器 坏	掘方	口縁～底部破 片	(14.0) [5.5] (5.2)		ロクロ成形	内外面 浅黄橙 色	やや軟 質	小石少量	南多摩窯産
40-2 20-1-2	須恵器 埴	床直	口縁～体部 1/8 強残	(20.0) [4.85] —	大型の埴	ロクロ成形 口縁部内外面横ナデ	内外面 褐灰色	やや軟 質	小石少量、白 色粒少量、 英少量	南多摩窯産
40-3 20-1-3	土師質 土器 高台付埴	カマド	口縁～底部 口縁～体部 1/4 残、底部 完存	(14.7) 5.2 6.0 4.0		ロクロ成形 貼付高台 内面見込み部分回転ナデ	内外面 明赤褐 色	良好	細砂中量、赤 色粒子少量、 小石微量	

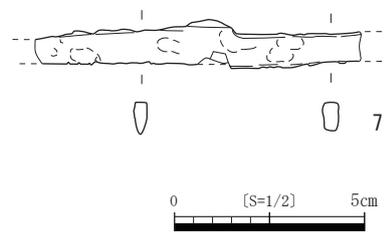
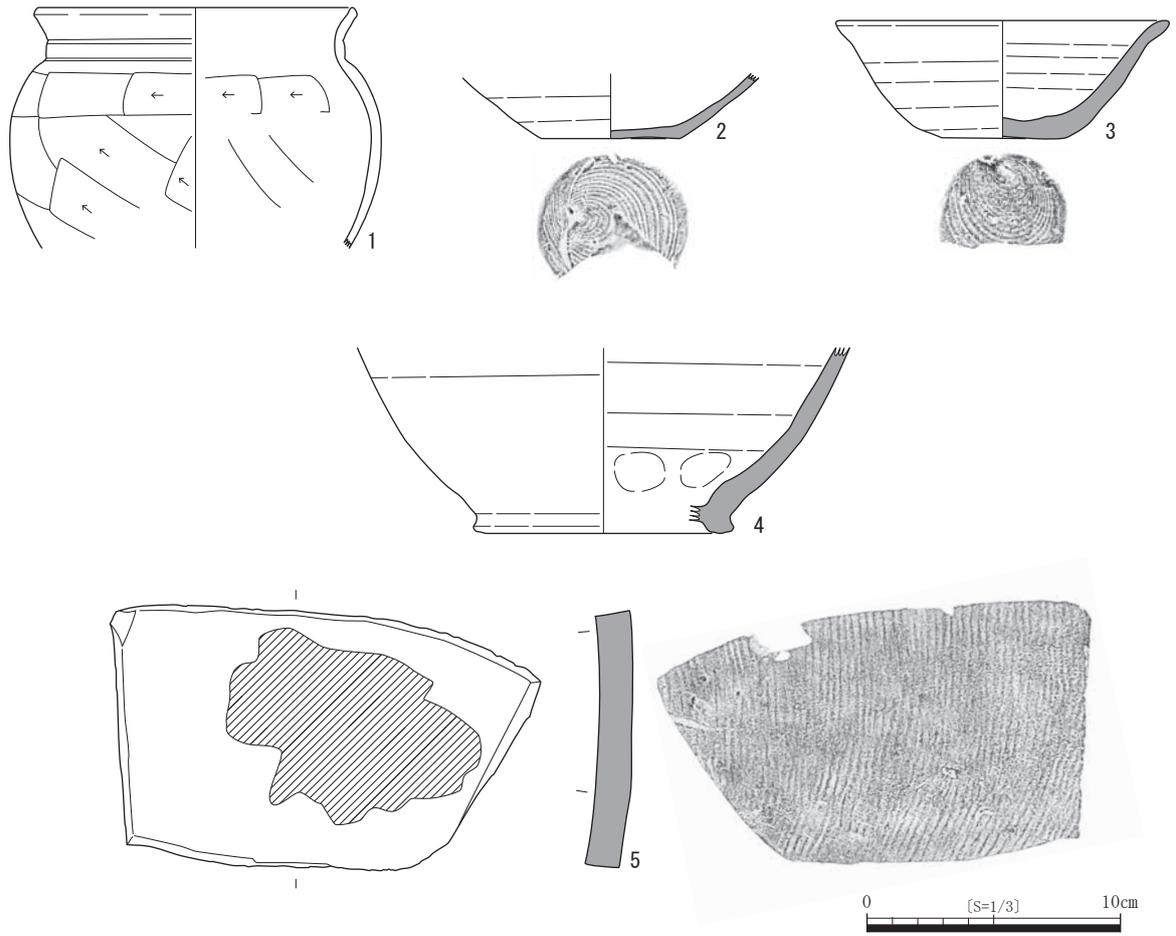


SI837 カマド			
1	10YR2/3	(黒褐色土)	焼土粒・炭化物粒を少量混じる。縮りあり。
2	10YR2/3	(黒褐色土)	焼土粒・焼土・ローム土を混じる。縮りあり。
3	10YR3/3	(暗褐色土)	焼土粒・炭化物粒をわずかに混じる。縮りあり。瓦抜取り穴？

第 41 図 SI837 カマド実測図



第 42 図 SI837 遺物出土状況図 (上図：全点・下図：実測個体別)



第 43 图 SI837 出土遺物実測図

第16表 SI837 出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
43-1 20-2-1	土師器 甕	カマド 床直	口縁～胴部 1/2弱残	(12.4) [9.6] —	コの字状口縁	外面 口縁部横ナデ、胴部 横位・斜位ヘラケズリ 内面 口縁部横ナデ、胴部 ヘラナデ	内外面 にぶい 橙色	良好	細砂、白色粒 少量、雲母微 量	武蔵型甕
43-2 20-2-2	須恵器 坏	床直	体部～底部 3/4弱残	[2.6] 5.8 4.8		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 褐灰色	堅緻	白色粒微量	南多摩窯産 G5古窯式
43-3 20-2-3	須恵器 坏	床直	口縁～底部 口縁～体部 1/4強、底部 1/2残	(13.0) 4.7 5.0 5.1		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整 口縁部横ナデ	内外面 橙色 (酸化燐)	やや軟 質	赤色粒微量	内外面に煤附着 (灯明皿?) 南多摩窯産 G5古窯式
43-4 20-2-4	須恵器 長頸瓶	床直	胴下部～底部 胴部1/4弱、 底部極小残	— [7.4] (10.2)		ロクロ成形 貼付高台	内外面 灰白色	やや軟 質	小石中量	南多摩窯産
43-5 20-2-5	須恵器 甕(転用甕)	床直	胴部破片			外面 平行叩き痕 内面 中央に研面あり	外面 ハイオ リーブ色 内面 灰色	堅緻	白色粒少量、 砂粒微量	

第17表 SI837 出土女瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴					備考	
				素材	凹面		凸面			端面
					布目	特徴	叩き	特徴		特徴
43-6 20-2-6	覆土 床直	— [8.0] [25.5]	2.0	粘土紐	21×18	端縁 無調整	縄叩き L10本		凸面に及ぶナデ	II 1-A1 技法 南多摩窯産 G5窯式

第18表 SI837 出土鉄製品観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚み		
43-7 20-2-7	刀子	カマド	[8.6]	0.75～ 0.85	0.35～ 0.40	8	切先及び基尻を欠失

### SI838住居 (第44～50図、第19～21表、図版10・11・21・22)

**位置・検出状況** Aトレンチの中央部の南端付近M～N21・22グリッドに位置する。住居の東壁カマド前面から北東隅壁にかけての部分が検出され、それ以外の住居の大部分は調査区域外である。遺構確認面はⅢc層で、遺存状態は良好である。

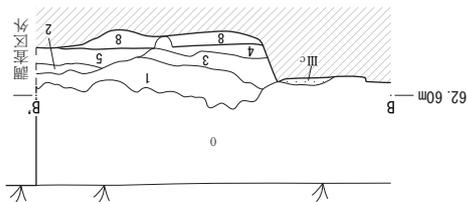
**形状・規模** 平面形は不明で、主軸方位はN-81°-Eである。規模は南北約3.75m以上×東西約1.35m以上で、遺構確認面から床面までの深さは約0.35mである。

**覆土** 黒色土(第1・5層)を主体とする6層からなり、最上層の第1層まで遺物を多く混じる。

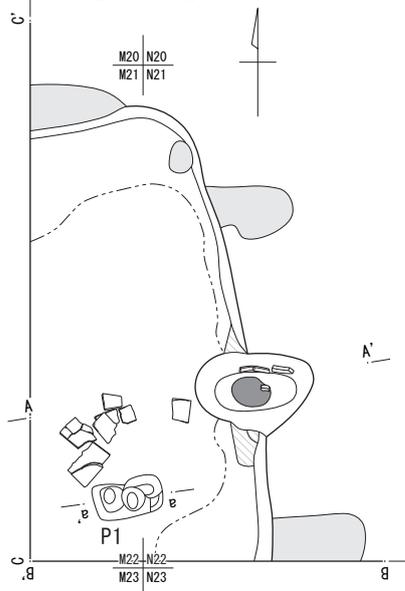
**壁・床面・周溝** 壁はやや外傾気味に立ち上がる。床面はカマド前面から住居中央部にかけて南北3.00m×東西1.50mの範囲に硬化面が認められたが、さらに住居中央部に広がるものと考えられる。調査区西壁下P2付近に小ロームブロックと黒色土の混合土による貼床(7層)が認められた。周溝は検出されなかった。

**ピット** ピットは床面上で1基(P1)、掘方のカマド前面付近で3基(P2～P4)が検出された。P1は長軸約50cm×短軸約30cmの長方形で、深さは約30cmである。不整形のP2は径約60cm、深さが約18cmである。円形のP3・P4は前者が径20cm、深さ15cm、後者が径25cm、深さ30cmである。

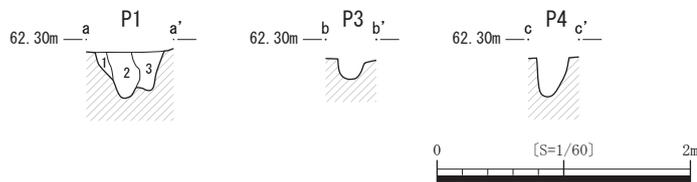
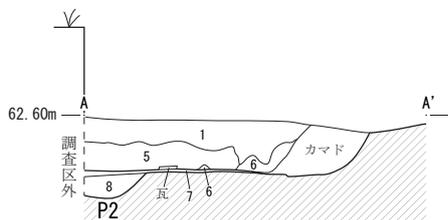
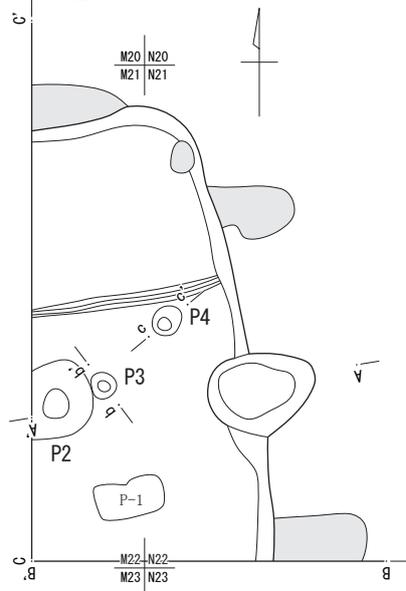
**カマド** 東壁に位置する。カマド検出当初は焼土・焼土粒・炭化物粒は見られるものの、灰白色粘土は全くと言って良いほど見られなかった。しかしながら、調査の過程で土器類を始め瓦類も予想以上に出土し、両側壁に女瓦が残存しているのではないかとの期待が持たれたが、結果的にはカマドの構築材は全て持ち去ったようで、カマドの掘り込みに土器類と瓦類が廃棄されたような状態であった。規模は幅約68cm、奥行き98cmを測り、壁外に約50cm張り出している。両袖の壁際にはカマド構築時に掘り残したローム土が残存していたが、残りが良い右袖で壁際から住居内側に幅35cm、長さ20cmほどであった。カマド底面には瓦の据付穴の痕跡などは全く認められなかった。



床面検出状況

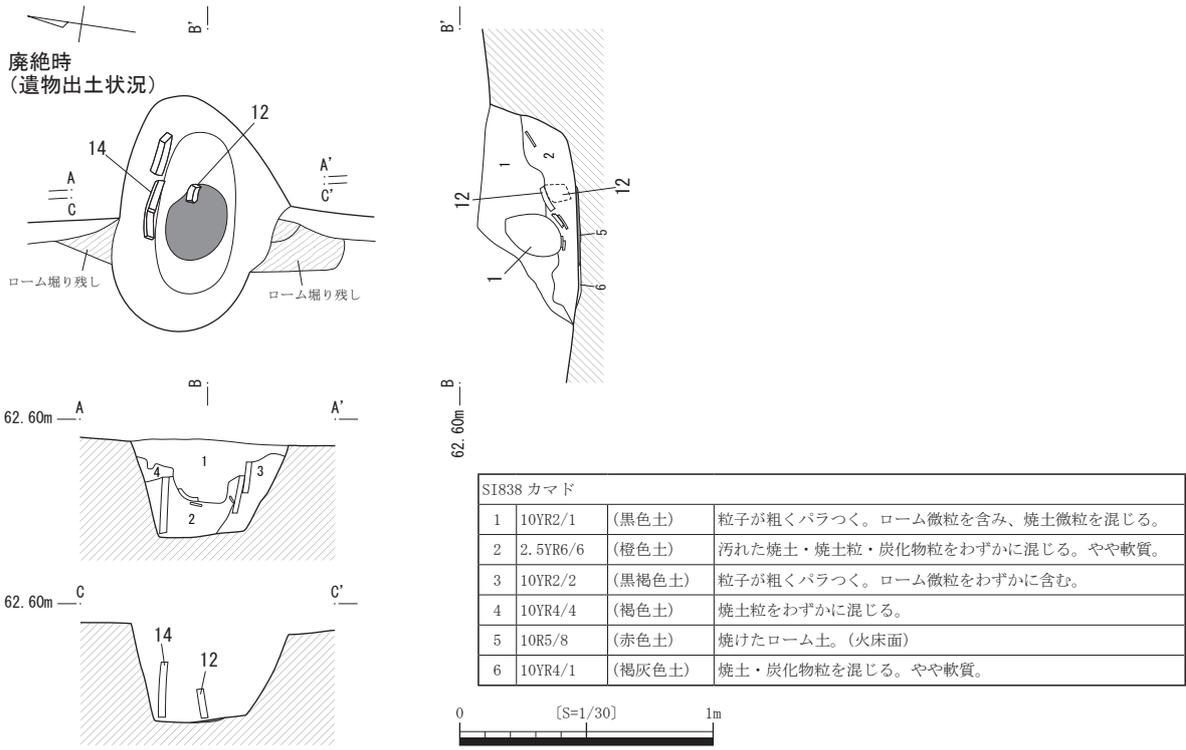


掘方

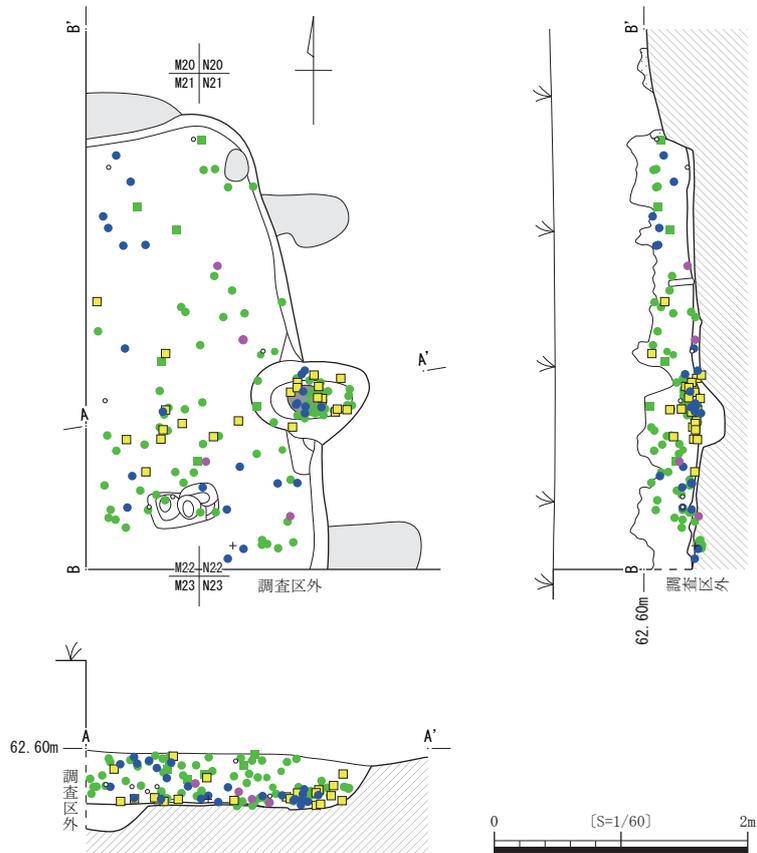


SI838			
1	10YR2/1	(黒色土)	粒子が粗くバラつく。全体にローム微粒を含み、焼土粒・灰白色粘土粒をわずかに混じる。よく締っている。
2	10YR2/1	(黒色土)	粒子が粗くバラつく。全体にローム微粒を含む。締りあり。
3	10YR2/1	(黒色土)	粒子が粗くバラつく。全体にローム微粒を含み、暗褐色土・ローム土を少量混じる。締りあり。
4	10YR3/1	(黒褐色土)	汚れたローム土を多く混じる。やや締りあり。壁崩壊土。
5	10YR2/1	(黒色土)	ローム微粒をわずかに含み、焼土粒・灰白色粘土粒を混じる。よく締っている。
6	10YR2/1	(黒色土)	明黄褐色土をやや多く、焼土粒を少し混じる。よく締っている。
7	10YR6/8	(明黄褐色土)	小ロームブロック・黒色土・焼土粒の混合土。よく締り硬質。(貼床)
8	10YR6/8	(明黄褐色土)	暗褐色ブロック・ロームブロックの混合土。よく締り硬質。(掘方)
P1			
1	10YR2/1	(黒色土)	ローム土 (φ 10mm) を混じる。よく締り硬質。
2	10YR2/2	(黒褐色土)	ローム微粒を含む。よく締っている。
3	10YR2/1	(黒色土)	下部にロームブロック・ローム土を多く混じる。よく締り硬質。

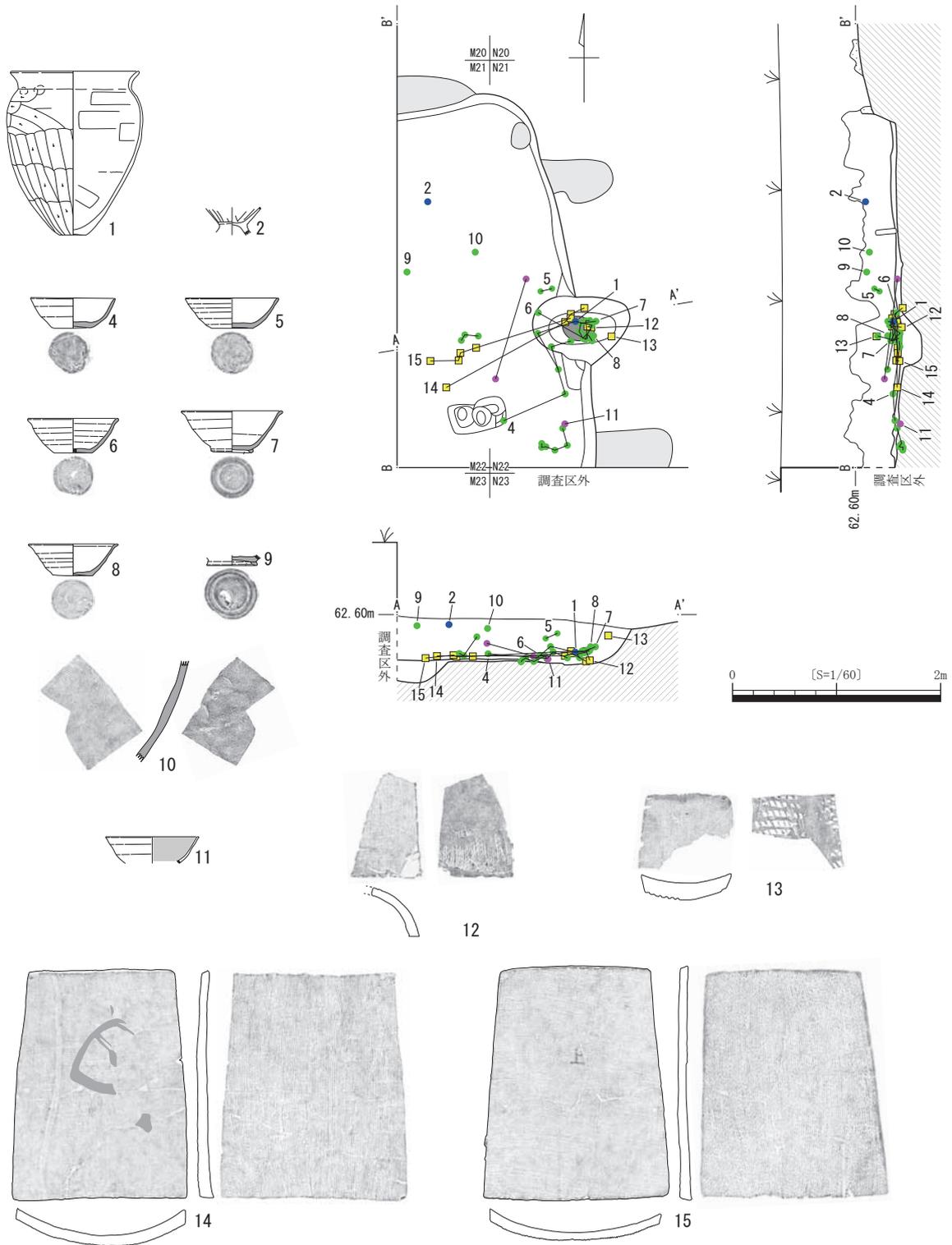
第 44 図 SI838 実測図



第45図 SI838 カマド実測図



第46図 SI838 遺物出土状況図 (全点)

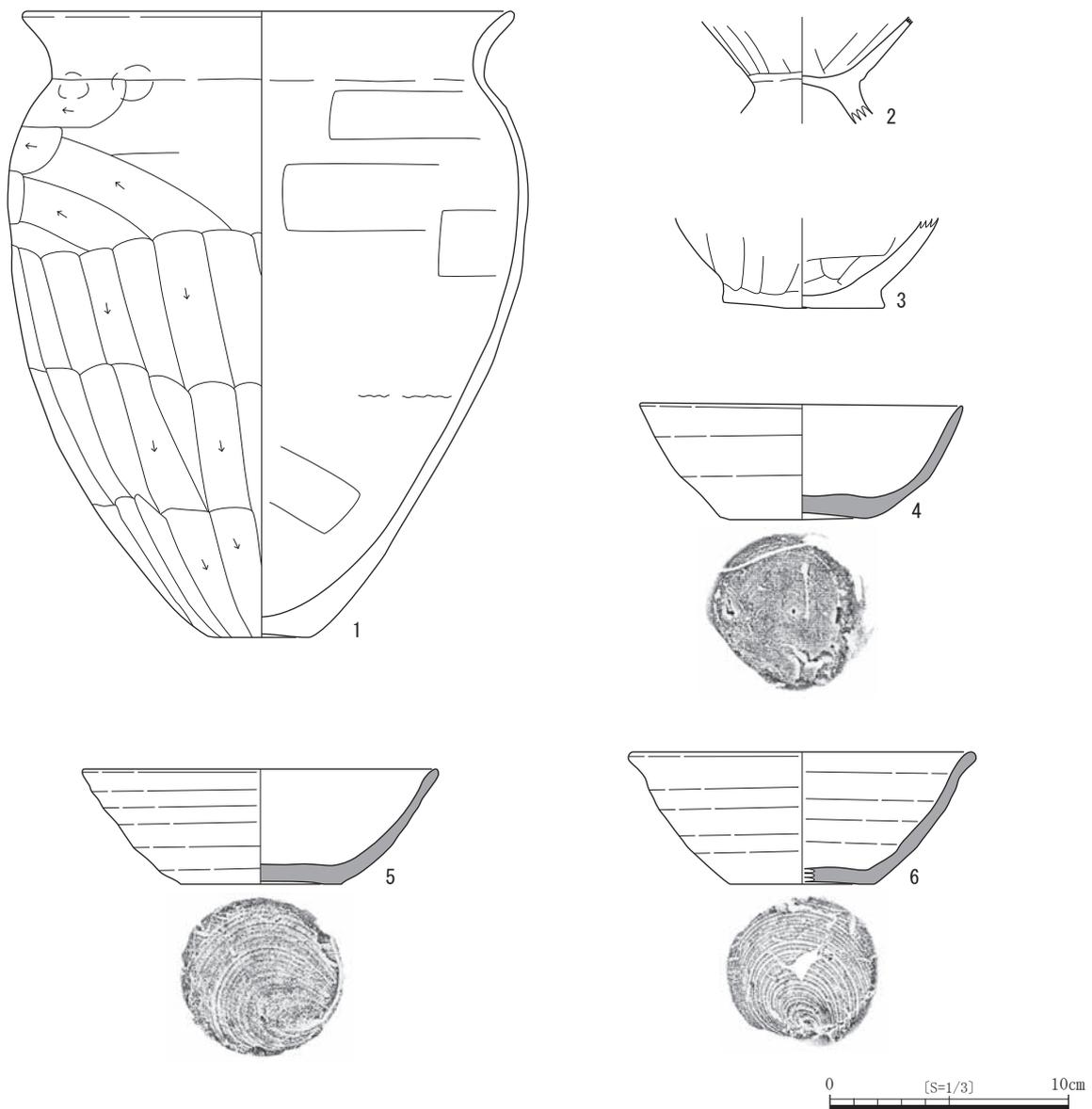


第 47 図 SI838 遺物出土状況図 (実測個別)

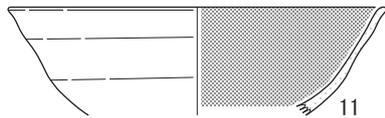
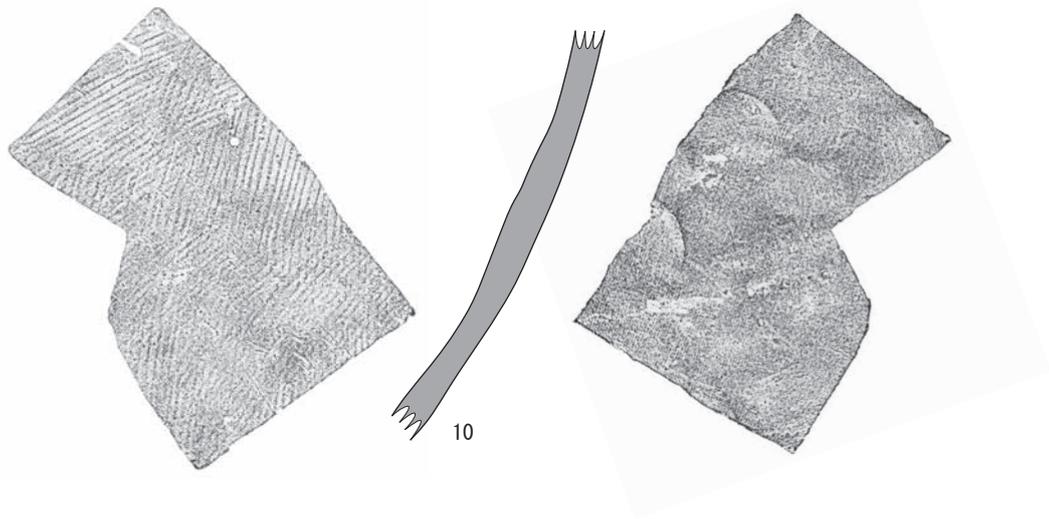
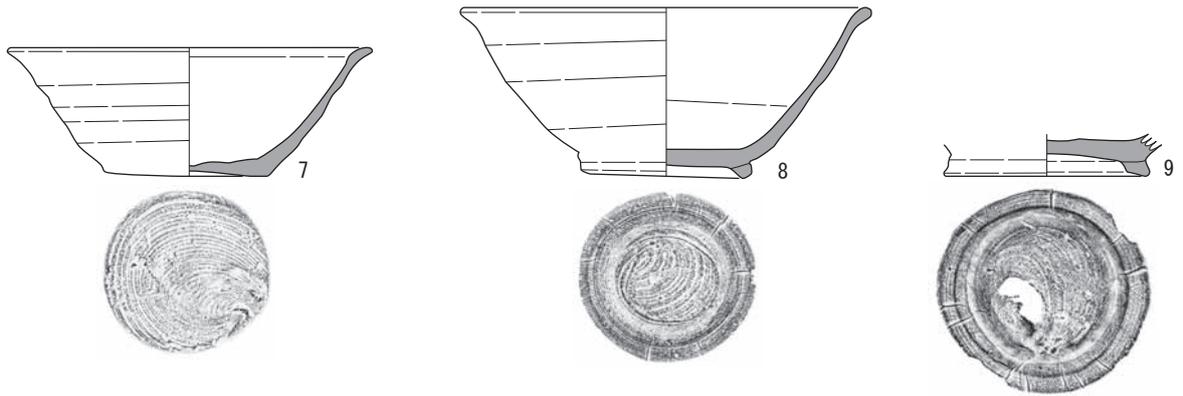
**掘方** 住居の大部分が最大6cmほど平坦に掘られているが、調査区南壁下部分が10～18cmとやや深くなっている。おそらく南壁に近い部分に相当するのではないかと考えられる。

**出土遺物** 遺物はカマドおよびカマド前面を中心に土師器27点、須恵器60点、灰釉陶器3点、瓦16点、礫6点、縄文土器5点、縄文石器1点など計118点（17679.8g）が出土している。カマド・床直上出土を中心に15点を図示した。1～3は土師器甕で、1は短い「く」の字状口縁甕、2は台付甕、3は台状底部甕で、これらは落川・一宮遺跡編年の第27段階に相当する。4～10は須恵器で、4・5の坏は南多摩窯跡群編年G25窯式期、6・7の坏と8の高台付碗はG5古窯式期にそれぞれ相当する。9は長頸壺の底部、10は甕の体部片である。11は灰釉陶器で、内側面のみハケ塗り施釉するK-90窯式前半の碗である。12～15は瓦で、12はI3-A1技法の男瓦、13はII1-B技法の女瓦を縦方向に二分割した熨斗瓦、14・15は南多摩窯産（G5窯式期）のII1-A1技法の完形女瓦で、14には「寺」と考えられる朱墨書、15には「上」の模骨文字がある。

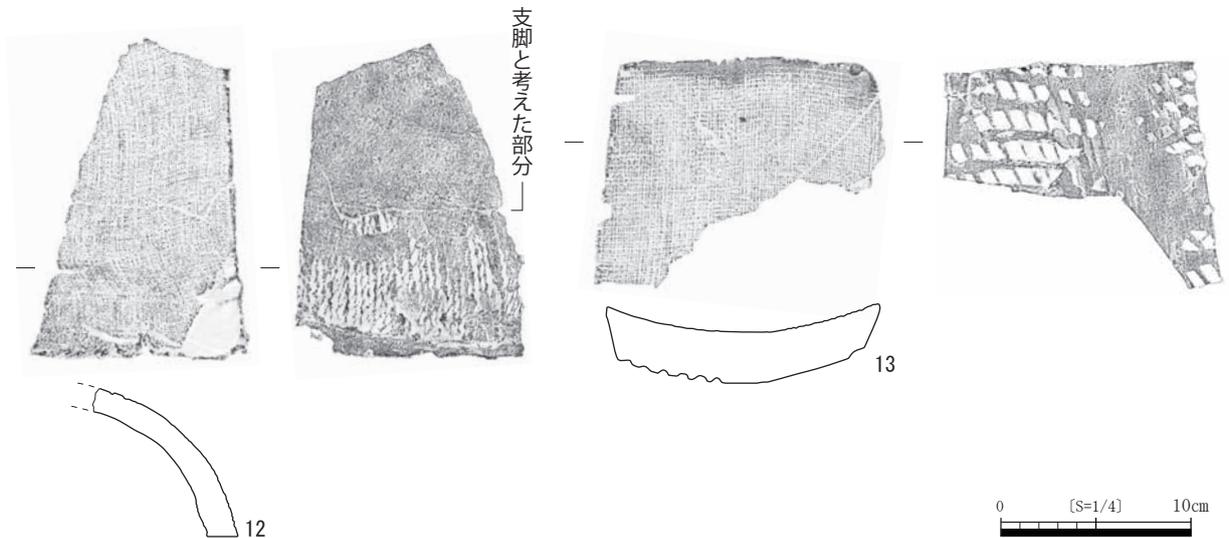
**時期** 土師器甕、須恵器坏、完形女瓦などから南多摩窯跡群編年G5古窯式期（9世紀末～10世紀第1四半期）に相当する時期と考えられる。



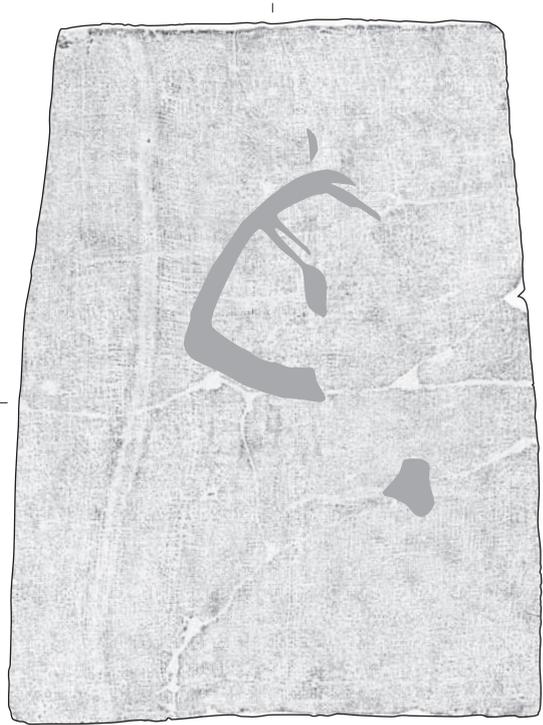
第48図 SI838 出土遺物実測図（1）



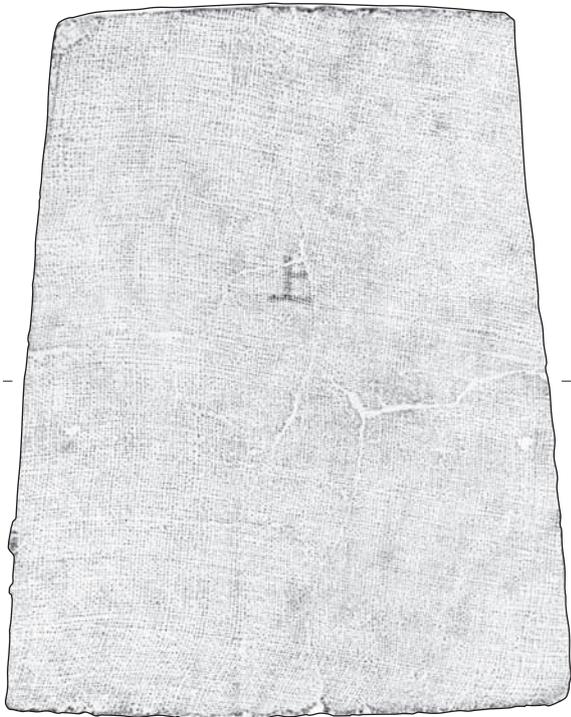
0 [S=1/3] 10cm



第 49 図 SI838 出土遺物実測図 (2)



14



15



0 [S=1/4] 10cm

第 50 图 SI838 出土遺物実測図 (3)

第 19 表 SI838 出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径 器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
48-1 21-1-1	土師器 甕	カマド	口縁～底部 口縁～頸部 1/4 残	(20.0) 21.4 4.4	短い「く」の字状 口縁	外面 口縁部横ナデ、指頭 痕あり、 胴部横位ヘラケズリ・縦位 ヘラケズリ 内面 口縁部横ナデ、胴部 横ヘラナデ	内外面 にぶい 黄橙色	良好	細砂、白色粒 少量、小石極 微量	
48-2 21-1-2	土師器 台付甕	覆土	脚接合部破片	- [4.5] -		外面 接合部横ナデ、胴部 縦位ヘラケズリ 内面 横位ヘラナデ、脚部 ナデ	内外面 橙色	良好	細砂、赤色粒 微量	
48-3 21-1-3	土師器 甕	覆土	底部破片	- [3.8] 6.6	台状底部甕	外面 胴部縦位ヘラケズリ 内面 不定方向のヘラナデ	内外面 橙色	良好	砂粒微量	
48-4 21-1-4	須恵器 坏	カマド、 床直	口縁～底部 口縁～体部 1/2 残、底部 ほぼ完存	13.4 4.95 6.4 5.7		ロクロ成形 底部回転系切り無調整	内外面 にぶい 黄橙色(酸化燐)	軟質	細砂、赤色粒 微量	内面煤付着 南多摩窯産 G25 窯式
48-5 21-1-5	須恵器 坏	覆土	口縁～底部 口縁部 1/4、 体部 1/2 残、 底部完存	(14.7) 4.85 6.8 6.4		ロクロ成形 底部回転系切り無調整	内外面 橙色 (酸化燐)	やや軟 質	赤色粒少量	南多摩窯産 G25 窯式
48-6 21-1-6	須恵器 坏	カマド	口縁～底部 口縁部 1/4、 体部 1/2 残、 底部完存	(14.1) 5.6 6.0 5.7		ロクロ成形 底部回転系切り無調整	内外面 褐灰色	堅緻	砂粒少量	南多摩窯産 G5 古窯式
49-7 21-1-7	須恵器 坏	カマド	口縁～底部 口縁部 1/4、 体部 3/4 残、 底部完存	(14.0) 5.1 6.4 5.5	口縁端部が強く外 反する	ロクロ成形 底部回転系切り無調整	内外面 橙色～ 黄灰色、下半酸 化燐	良好	砂粒少量	南多摩窯産 G5 古窯式
49-8 21-1-8	須恵器 高台付塊	カマド	口縁～底部 口縁～体部 3/4 残	15.7 6.8 6.0 5.8		ロクロ成形 底部回転系切り後貼付高台	内外面 黄灰色	堅緻	小石少量	口縁部内面に自然 釉 南多摩窯産 G5 古窯式
49-9 21-1-9	須恵器 高台付塊	覆土	底部破片	- [1.65] 7.8 6.6		ロクロ成形 底部回転系切り後付高台	内外面 にぶい 黄橙色	良好	細砂、赤色粒 微量	南多摩窯産
49-10 21-1-10	須恵器 甕	覆土	胴部破片	-		外面 平行叩き痕 内面 当て具痕のちナデ	外面 オリーブ 黒色 内面 灰色	堅緻	小石少量、白 色粒少量	
49-11 21-1-11	灰釉陶器 塊	床直	口縁部破片	(14.8) [4.3] -		ロクロ水挽き成形 内面のみハケ塗り施釉	地 灰白色 施釉 灰黄色	堅緻	細砂	K-90 窯式

第 20 表 SI838 出土男瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴					備考	
				素材	凹面		凸面			端面
					布目	特徴	叩き	特徴		特徴
49-12 22-1-12	カマド	11.0 [14.5]	1.6	粘土紐	26×26	端縁 無調整	縄叩き L8 本後 横ナデ	広端縁ヘラケズ リ	広端、左側端 1 面ヘラケズリ	I 3-A1 技法

第 21 表 SI838 出土女瓦等観察表

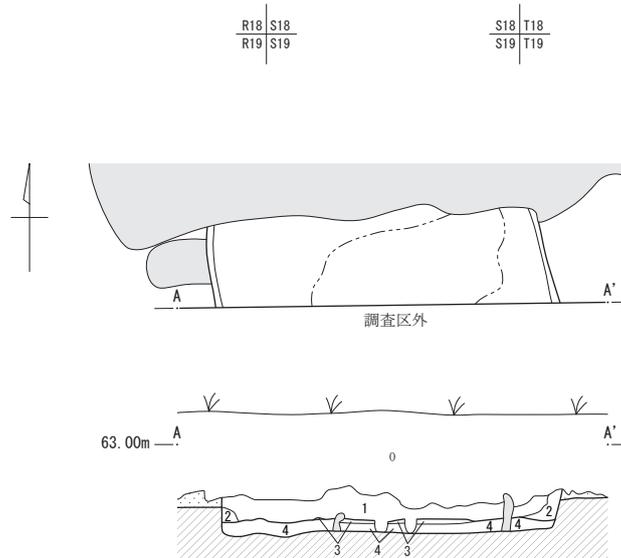
挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴					備考	
				素材	凹面		凸面			端面
					布目	特徴	叩き	特徴		特徴
49-13 22-1-13	カマド	13.5 - [12.5]	2.5	粘土板	18×24	狭端縁ヘラケズ リ	斜格子(疎)	端縁 無調整	狭端、右側端 1 面、左側端 2 面 ヘラケズリ	契斗瓦(女瓦を二分割)。II 1-B 技法 東金子窯産
50-14 22-1-14	床直 カマド	23.2 28.0 37.0	1.6	粘土横紐	28×29	4 端縁 無調整	縄叩き L11 本 叩き締め()形	4 端縁無調整、 狭端縁に 2 条の 棒状圧痕あり	4 端面指ナデ	凹面に朱墨(寺?)あり II 1-A1 技法 南多摩窯産 G5 窯式
50-15 22-1-15	床直 カマド	24.3 29.8 37.8	1.5	粘土横紐	17×20	4 端縁 無調整	縄叩き L10 本 叩き締め()形	広端縁に棒状圧 痕 1 条あり	広端ヘラケズ リ、残り 3 端は ナデ	凹面に模骨文字「上」あり II 1-A1 技法 南多摩窯産 G5 窯式

SI839住居（第51図、図版11）

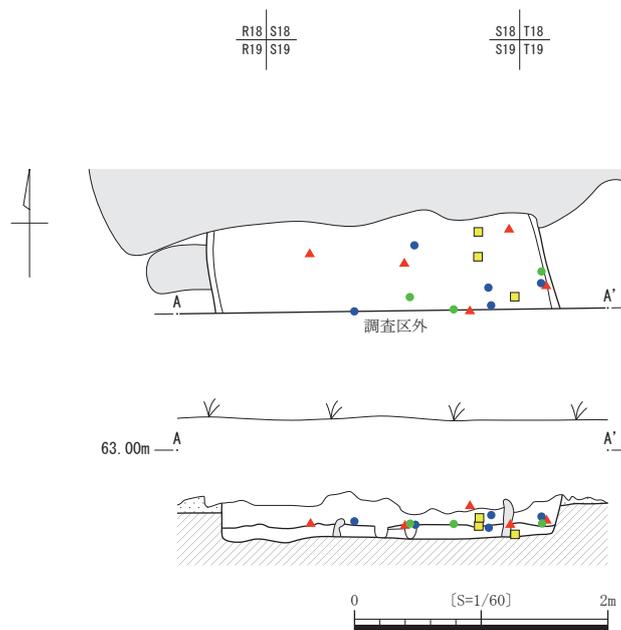
**位置・検出状況** Aトレンチの東端付近のR～T19・20グリッドに位置し、住居の南側部分が調査区域外である。遺構確認面はⅢc層である。住居の北壁部分が攪乱で削平されており遺存状態はやや不良である。

**形状・規模** 平面形は不明で、主軸方位はN-12°-Wである。規模は南北約0.80 m以上×東西約2.65 mで、遺構確認面から床面までの深さは約0.18 m（調査区南壁断面Ⅲc層上面からの深さは約0.22 m）である。

**覆土** 黒褐色土の1層からなる。



SI839			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。全体にローム微粒を含み、焼土粒・ローム土を少量混じる。締りあり。
2	10YR3/3	(暗褐色土)	ローム粒・黒色土粒（φ 5mm）を多く混じる。やや軟質。
3	10YR6/6	(明黄褐色土)	焼土粒を部分的に混じる黒色土。（貼床）
4	10YR6/6	(明黄褐色土)	暗褐色土・黒褐色土の混合土。よく締り硬質。（掘方）



第51図 SI839 実測図・遺物出土状況図（全点）

**壁・床面・周溝** 壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。床面は住居中央部に南北0.70 m×東西1.60 mの範囲に厚み約4 cmの貼床による硬化面が認められたが、調査区域外に広がるものと考えられる。周溝は検出されなかった。床は厚みが6～8 cmの暗褐色土とローム土の混合土による貼床（8層）で、住居全体に及んでいる。周溝は南壁の大部分と北壁の一部が明らかでないが、カマド前面部分を除き全周するものと考えられる。最大幅30cm、深さ約10cmである。

**ピット** 不明である。

**カマド** 不明である。

**掘方** 住居の大部分が6～12cmほどほぼ平坦に掘られている。

**出土遺物** 遺物は住居の東半部を中心に土師器5点、須恵器3点、土師質土器5点、瓦4点など計17点（228.5 g）が出土しているが、図示できるものはない。

**時期** 不明である。

### SI840住居（第52～59図、第22～28表、図版12～14・23～25）

**位置・検出状況** Aトレンチの東端付近U～W19・20グリッドに位置する。調査区内では住居の東壁カマド北端部と北東隅壁を結ぶ線より北側部分が検出されたが、カマドの張り出しが約75cmと長大で、しかも確認面において灰白色粘土に混じって側壁の構築材と考えられる瓦が多く確認された。そこで、カマドの完掘について事業者および国分寺市教育委員会の了解を得た上で、調査区を南側に東西3.50 m×南北2.00 mの範囲で拡張した。したがって、本調査段階では住居の南壁・西壁側が調査区域外であったが、8月9日に地盤改良工事に伴う市職員の立会調査で、南壁を検出している。遺構確認面はⅢc層である。住居の北西隅付近に後世の攪乱を受けているが、遺存状態は良好である。

**形状・規模** 平面形は長方形で、主軸方位はN-68°-Eである。規模は南北約4.00 m×東西約4.40 m以上で、遺構確認面から床面までの深さは最大0.45 mである。

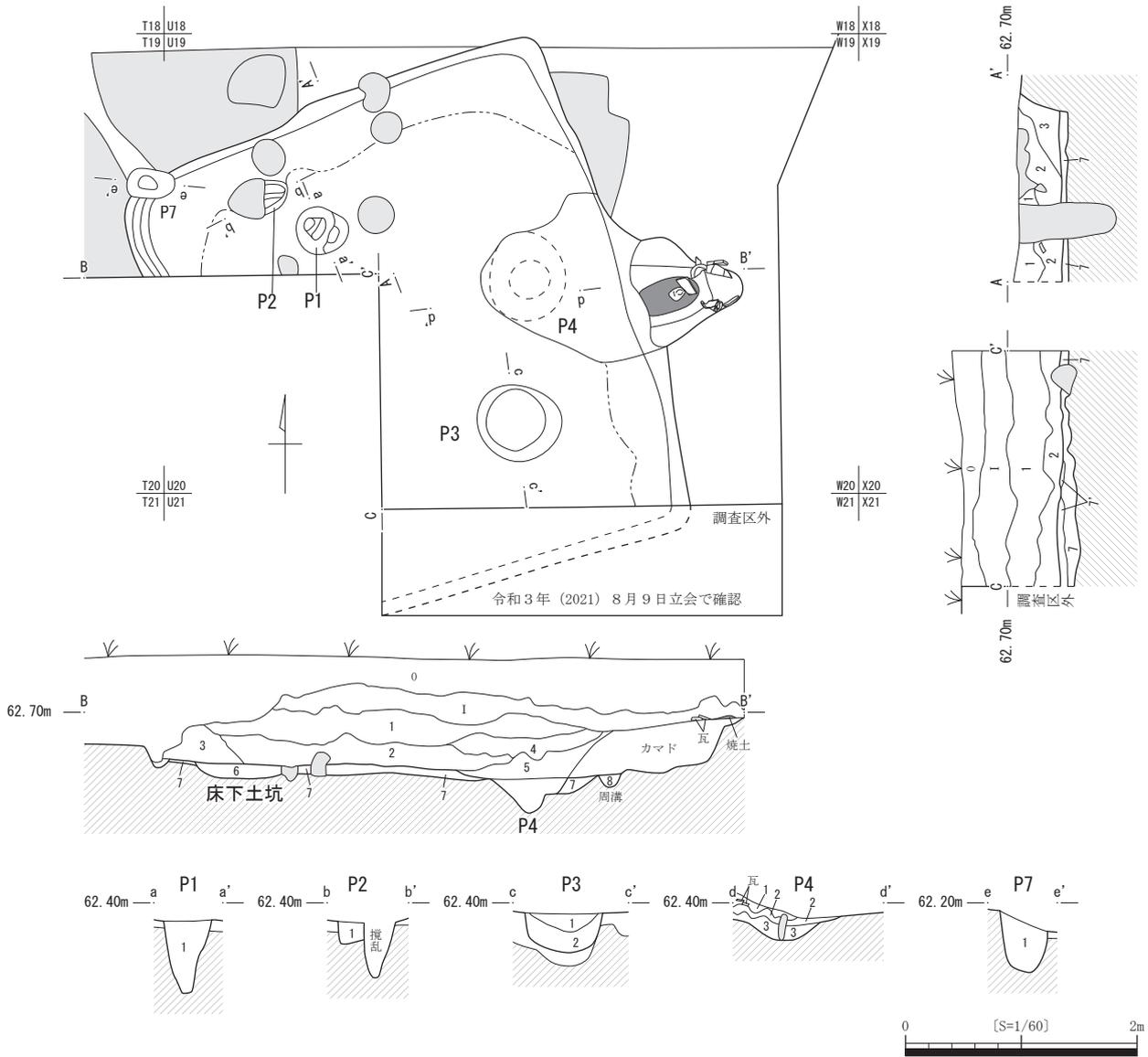
**覆土** 黒褐色土（第1・2層）を主体とする5層からなり、最上層の第1層まで遺物を多く混じる。

**壁・床面・周溝** 壁はやや外傾気味に立ち上がる。床面は調査区の壁下の幅50～60cmを除いた大部分に硬化面が、調査区西壁下に貼床（7層）がそれぞれ認められた。調査区域外にも広がるものと考えられる。周溝は西壁に検出され、幅約20cm、深さ約10cmである。

**ピット** ピットは床面上で5基（P1～P4・P7）、掘方の東壁下に3基（P5・P6・P8）が検出された。P1は径約45cmの円形で、深さ約58cmである。攪乱に切られているP2は径20cm以上、深さ約18cm、北西隅のP7は長径40cmの楕円形状で、深さ約50cmである。カマド前面の楕円形に近いP3・P4は長軸径約70cm強、深さが14～30cmである。後者にはカマドの掻出した灰が充満していた。掘方のP5・P6・P8は径30～35cm、深さが20cm前後である。

**カマド** 東壁に位置する。先述したようにカマドの確認面において灰白色粘土に混じって側壁の構築材と考えられる男瓦などが多く確認されたことで調査区を拡張して完掘を目指した。結果的にはカマドの煙道部の構築材である瓦が残存し、燃烧部は河原石の支脚を除き全て持ち去ったような状態であった。規模は幅約95cm、奥行き100cmを測り、壁外に約75cm張り出している。両袖の住居内への張り出しは認められず、壁際が焚口になるものと思われる。残りが良い煙道部は男瓦の完形品が広端部を上にも両側壁に相対して立っており、その先端側に女瓦を側壁に張り付けている、カマドはこれらを芯に灰白色粘土で築いたものと考えられる。煙道部男瓦の底面には瓦据付穴の痕跡が認められた。

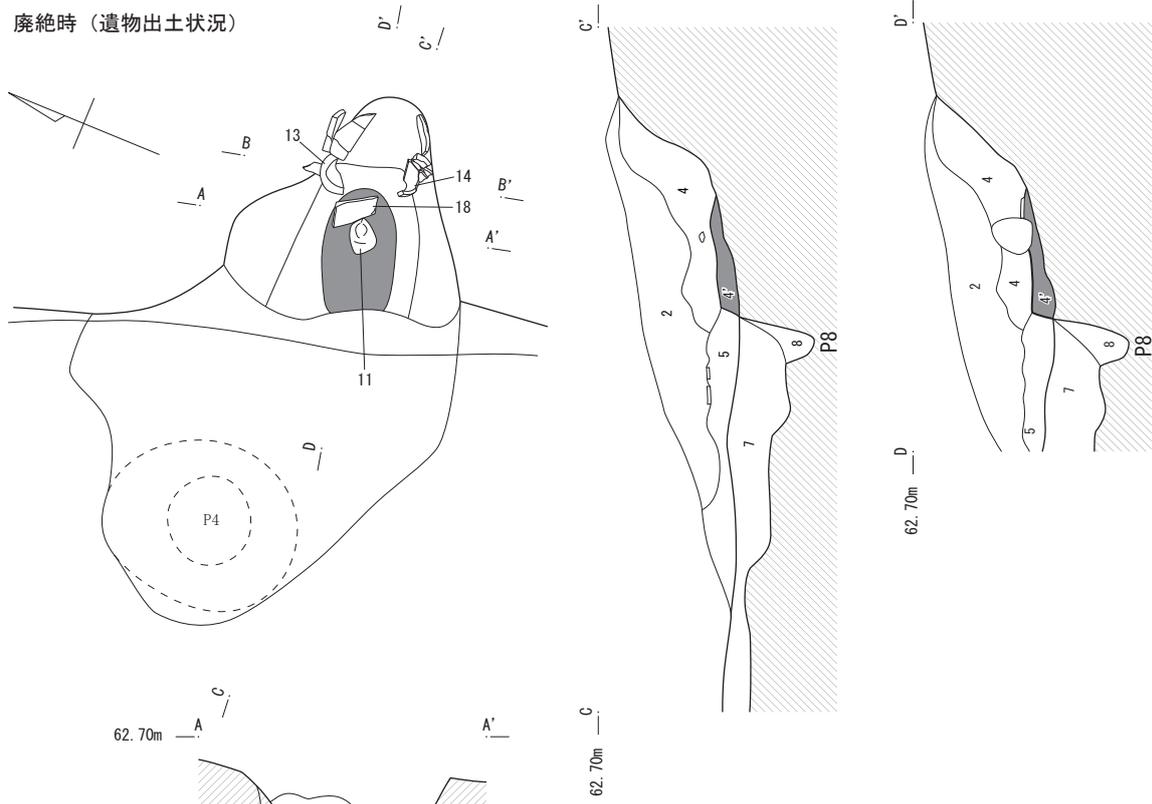
**掘方** 住居の大部分が最大6 cmほど平坦に掘られているが、住居内調査区南壁下部分が20cmとやや深くなっている。東壁と南壁下に幅25cm、深さ14cmほどの周溝状の小溝が検出された。即断はできないが、住居が拡張されている可能性が考えられる。また、北西隅寄りに径80cmの円形で、深さ16cmの床下土坑がある。



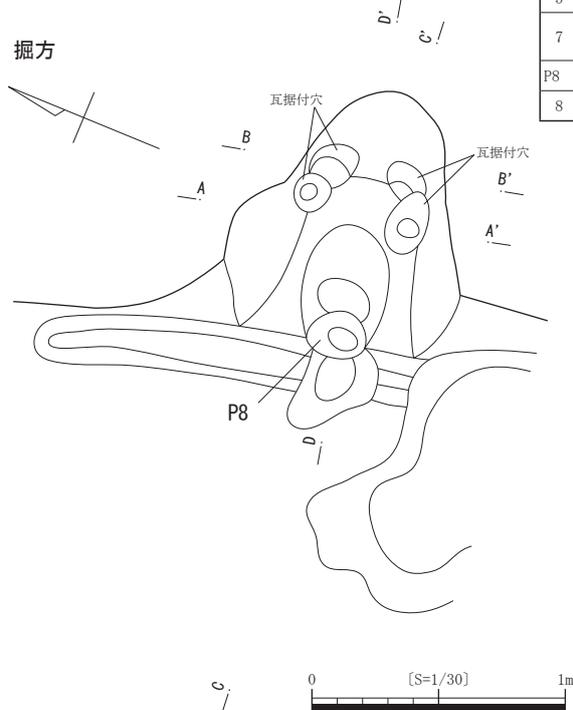
SI840			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒を含み、焼土粒をわずかに混じる。締りあり。
2	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 2~3mm) をやや多く含み、焼土粒・炭化物粒をわずかに混じる。締りあり。
3	10YR3/1	(黒褐色土)	汚れたローム土・暗褐色土をやや多く、ローム粒・焼土粒をわずかに混じる。締りあり。
4	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 1~2mm)・焼土粒 (φ 1~3mm) を混じる。炭化物粒をわずかに混じる。よく締っている。
5	10YR3/2	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 10mm)・焼土粒をやや多く混じる。カマド崩壊土。
6	10YR6/6	(明黄褐色土)	ロームブロック (φ 20mm) を多く混じる汚れたローム土。よく締り硬質。(床下土坑)
7	10YR6/6	(明黄褐色土)	ロームブロック (φ 10~30mm) が多く、ローム粒・焼土粒・黒褐色土が少ない混合土。よく締り硬質。(掘方)
7'	10YR3/1	(黒褐色土)	ロームブロック (φ 10mm) を多く、ローム粒・焼土粒・灰白色粘土粒をわずかに混じる。よく締り硬質。(貼床)
8	10YR5/6	(黄褐色土)	ローム粒・黒褐色土を多く混じる汚れたローム土。やや締りあり。(周溝)
P1			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム微粒を含み、ロームブロック (φ 10mm) を混じる。やや締りあり。
P2			
1	10YR6/6	(明黄褐色土)	ローム土 (多い) と黒褐色土の混合土。締りあり。
P3			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ロームブロック (φ 10mm)・焼土粒・炭化物粒をわずかに混じる。やや締りあり。
2	10YR3/4	(暗褐色土)	ローム土 (φ 2~10mm) を多く、焼土粒・灰白色粘土粒・炭化物粒を少し混じる。やや軟質。
P4			
1	10YR3/3	(暗褐色土)	ロームブロック (φ 5~20mm) を多く、焼土粒 (φ 5mm)・灰白色粘土・焼土を少し混じる。やや締りあり。
2	10R3/6	(暗赤色土)	焼土・焼土粒・炭化物粒・黒褐色土の混合土。締りあり。
3	10YR3/1	(黒褐色土)	焼土粒・灰白色粘土粒・炭化物粒を多く混じる。
P7			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ロームブロック (φ 10mm)・焼土粒・炭化物粒をわずかに混じる。やや締りあり。

第 52 図 SI840 実測図

廃絶時（遺物出土状況）

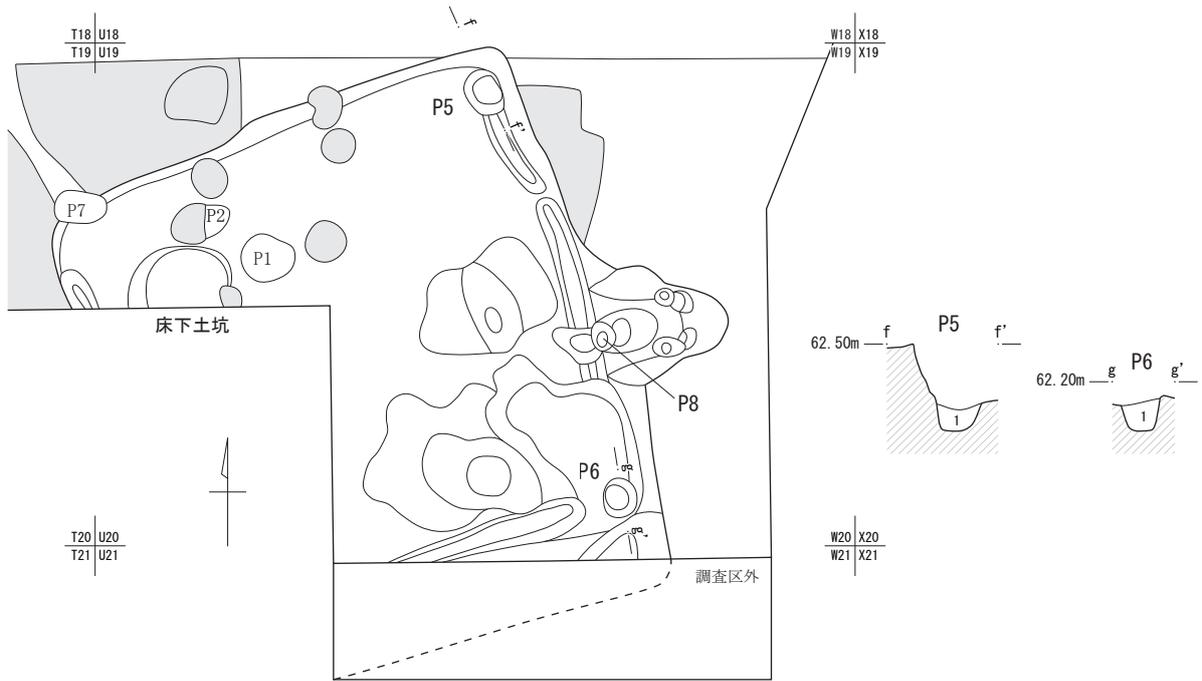


掘方

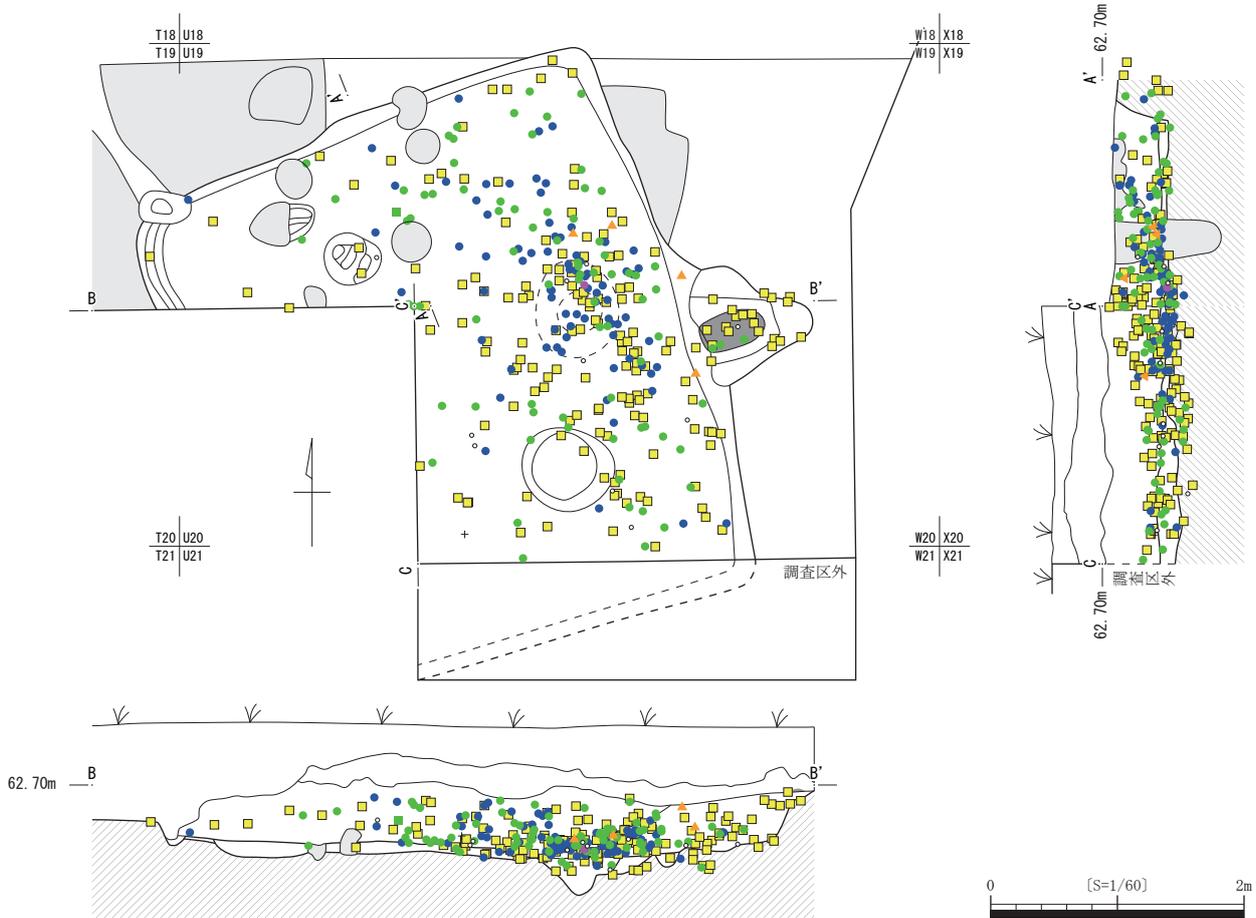


SI840 カマド			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	焼土粒・ロームブロック (φ 20mm) を混じる。
2	10YR3/3	(暗褐色土)	ロームブロック (φ 5~20mm) を多く、焼土粒 (φ 5mm)・灰白色粘土・焼土を少し混じる。やや縮りあり。
3	10YR7/6	(明黄褐色土)	焼土粒・焼土を少し混じる。
4	10R6/8	(赤褐色土)	焼土・焼土粒・灰白色粘土をやや多く混じる。やや軟質。
4'	10YR6/8	(赤橙色土)	焼土 (火床部)
5	10R3/6	(暗赤色土)	焼土・焼土粒・炭化物粒・黒褐色土の混合土。
7	10YR6/6	(明黄褐色土)	ロームブロック (φ 10~30mm) が多く、ローム粒・焼土粒・黒褐色土が少ない混合土。SI840 第7層 (掘方) と同じ。
P8			
8	10YR3/2	(黒褐色土)	ローム粒・ロームブロック (φ 10mm) を少し混じる。

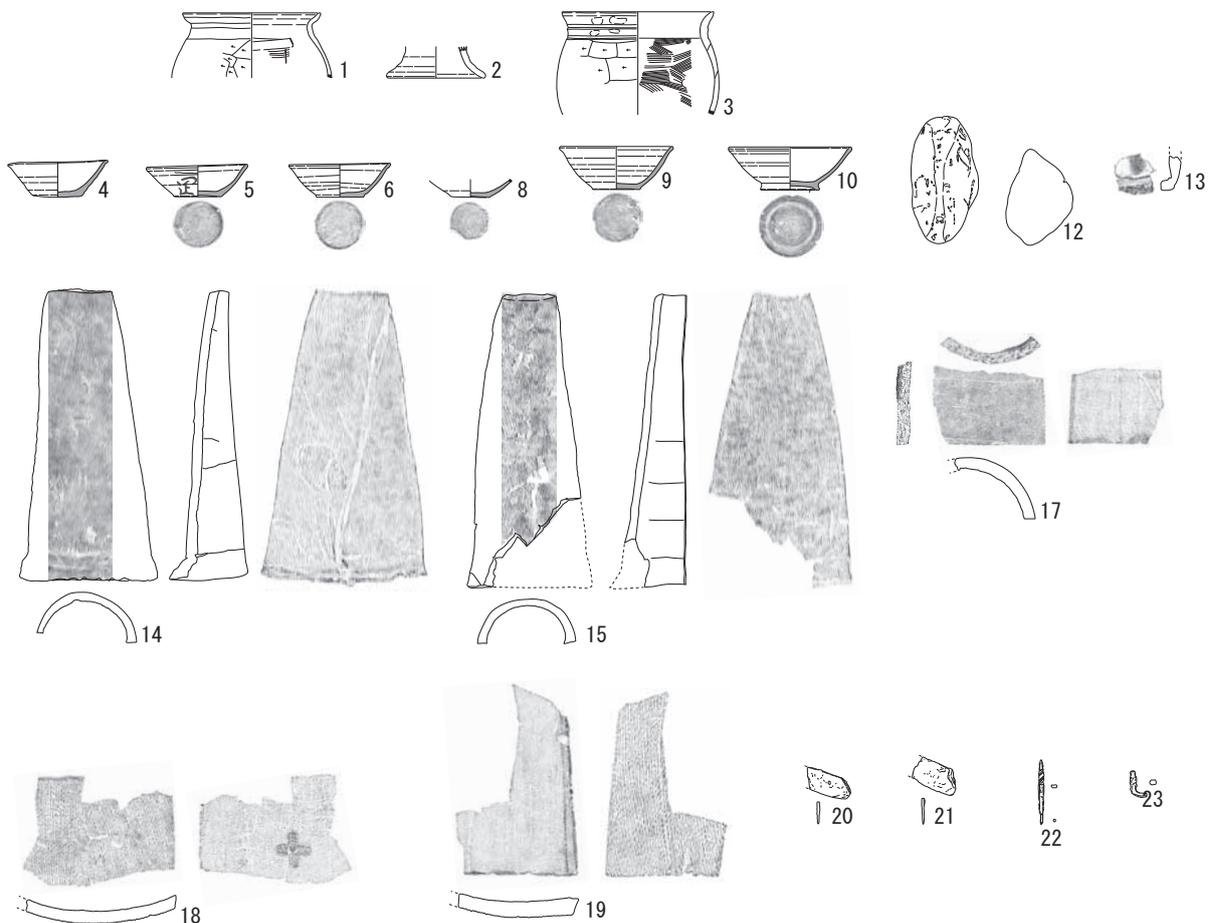
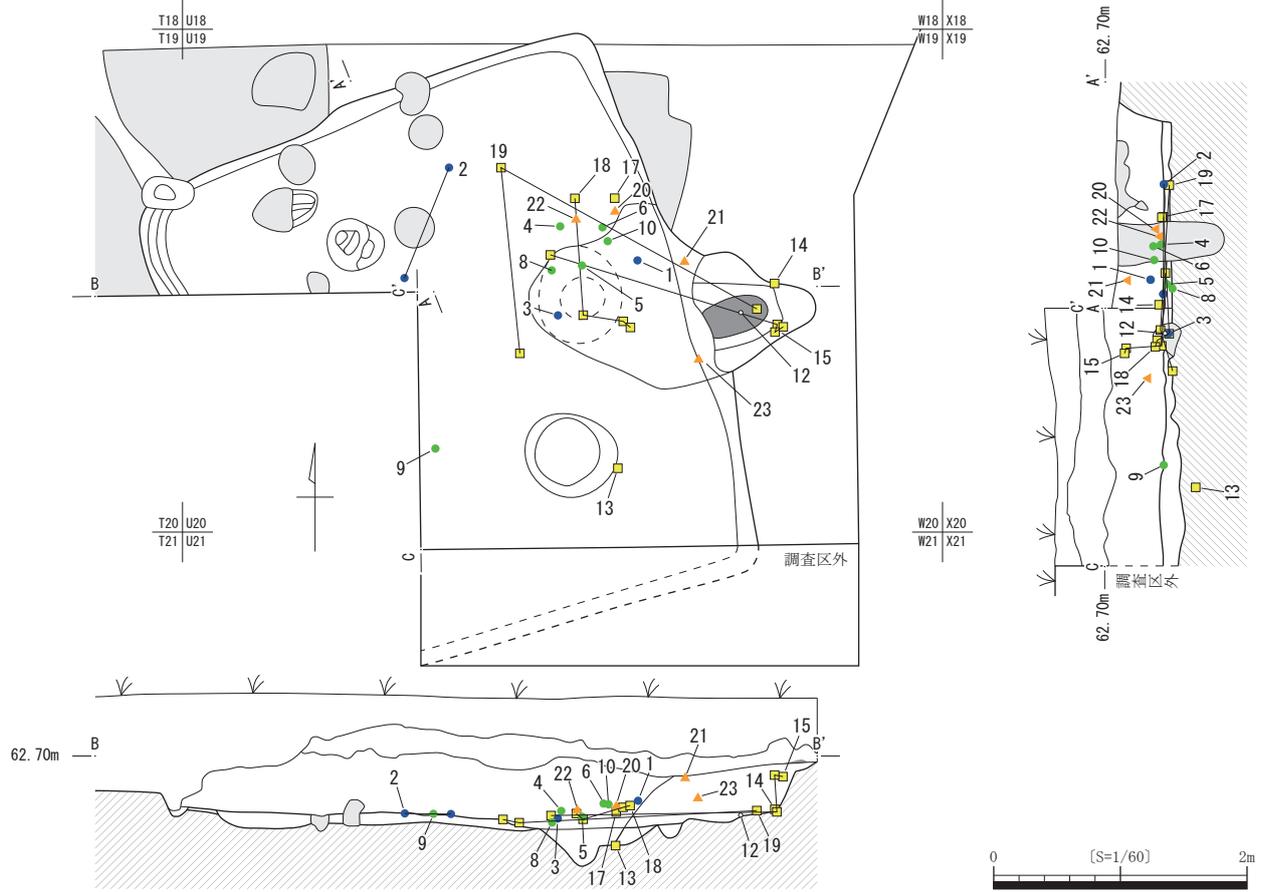
第53図 SI840 カマド実測図



SI840P5			
1	10YR5/6	(黄褐色土)	ローム粒・灰白色粘土粒が少なく、汚れたローム土が多い混合土。やや軟質。
P6			
1	10YR5/6	(黄褐色土)	ローム粒・灰白色粘土粒が少なく、汚れたローム土が多い混合土。やや軟質。P5 第1層と同じ。



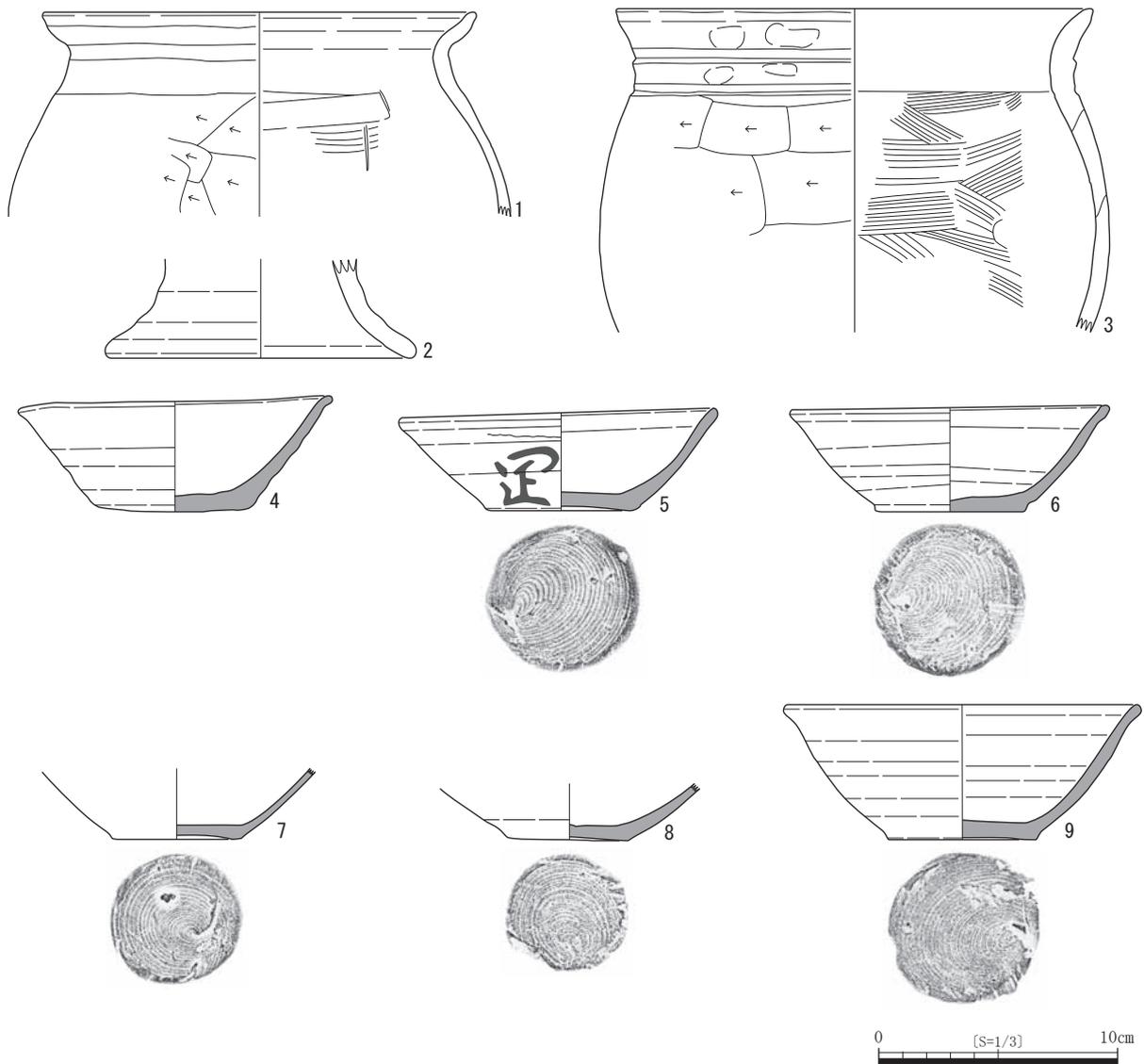
第54図 上図：SI840 掘方実測図・下図：遺物出土状況図（全点）



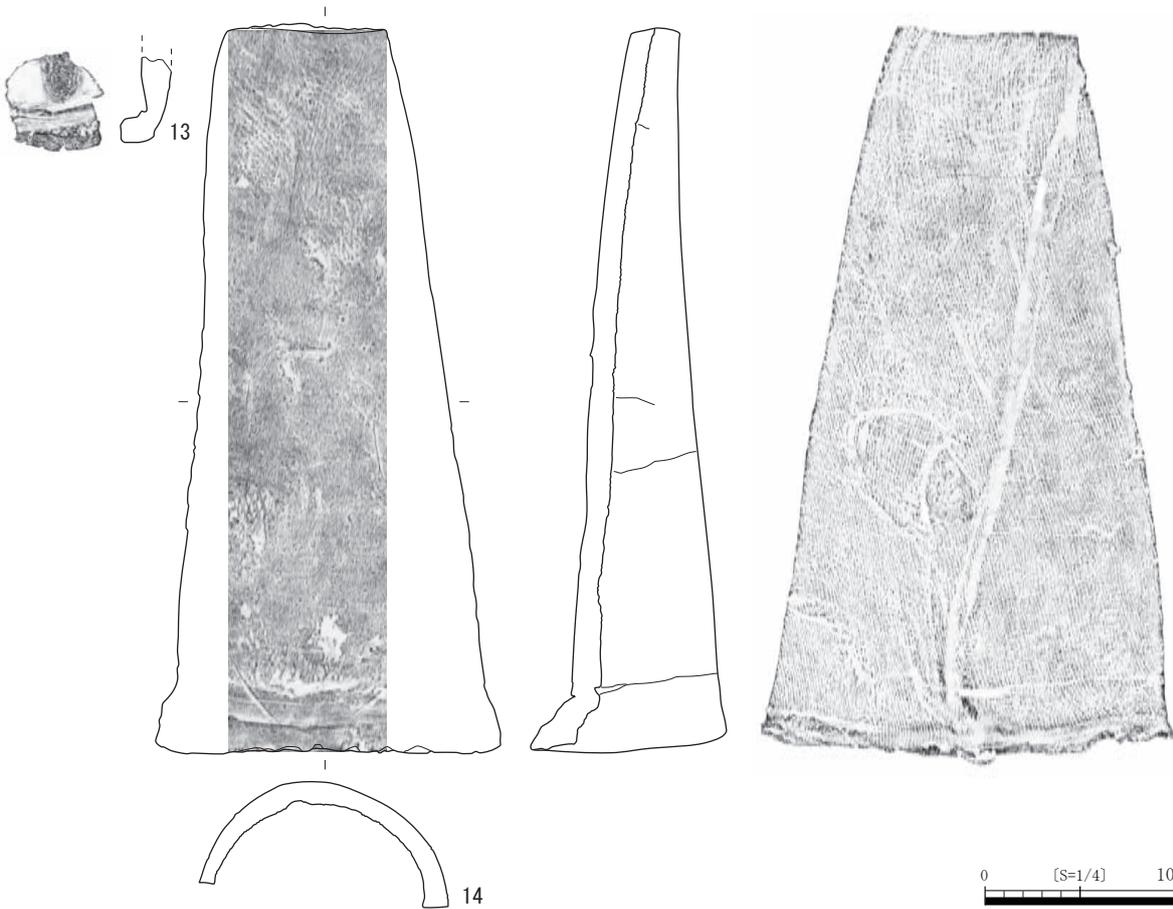
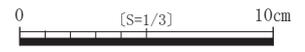
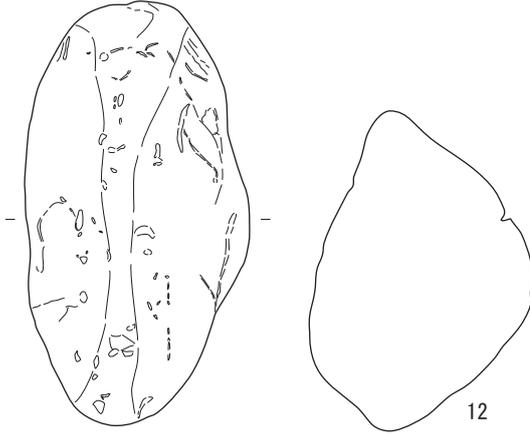
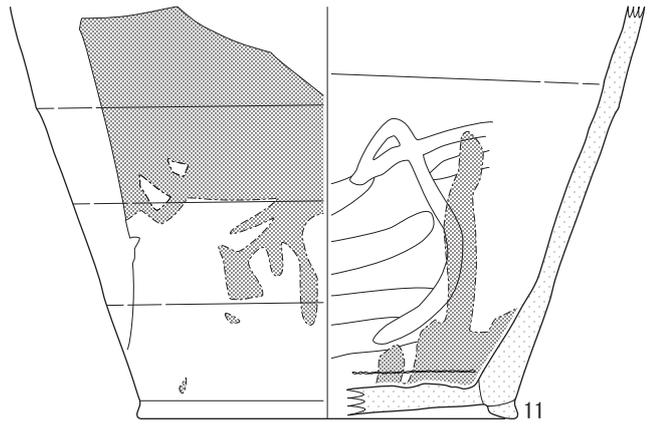
第 55 図 SI840 遺物出土状況図 (実測個別)

**出土遺物** 遺物はカマドおよびカマド前面を中心に土師器85点、須恵器125点、土師質土器1点、灰釉陶器3点、瓦148点、鉄製品5点、石製品1点、陶磁器（近現代、覆土中の攪乱出土と思われる）3点、礫11点、縄文土器2点、縄文石器1点など計385点（41485.9g）が出土している。カマド・床直上出土を中心に23点を図示した。1～3は土師器甕で、1は「コ」の字状口縁に似る受け口状口縁甕、2は台付甕の脚部、3は「コ」の字状口縁の武蔵型甕である。これらは落川・一宮遺跡編年の第27段階に相当する。4～10は須恵器である。4～6の坏は南多摩窯跡群編年G5古窯式期に相当し、5には「岡」の墨書、さらに3点とも燈明皿である。9・10は塀で坏と同様の時期と思われる。11は灰釉陶器である。大型の長頸壺で、胴部外面をハケ塗り施釉する。K-90窯式と思われる。12はチャート製の自然石を支脚としたものである。13～19は瓦である。13は素弁の鏡瓦、14～17はI3-A1技法の男瓦で16の凸面には押印「豊」の文字、17は凹面側から「一」形にヘラ切り後打ち割っている。18・19はII1-A1技法の女瓦で、前者は凹面の「+」の模骨文字から南多摩窯産（G5窯式期）、後者は凸型成形台側端縁突起の痕跡が認められ東金子窯産（塔再建期）である。20～24は鉄製品で、20・21は刃部先端を欠失する鎌、22は茎部に木質が残存するが錐と考えられる。23・24は不明である。

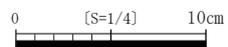
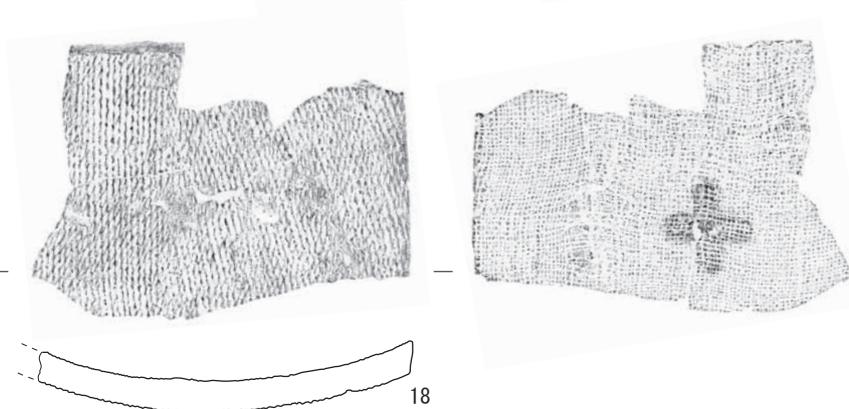
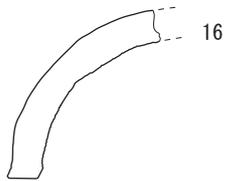
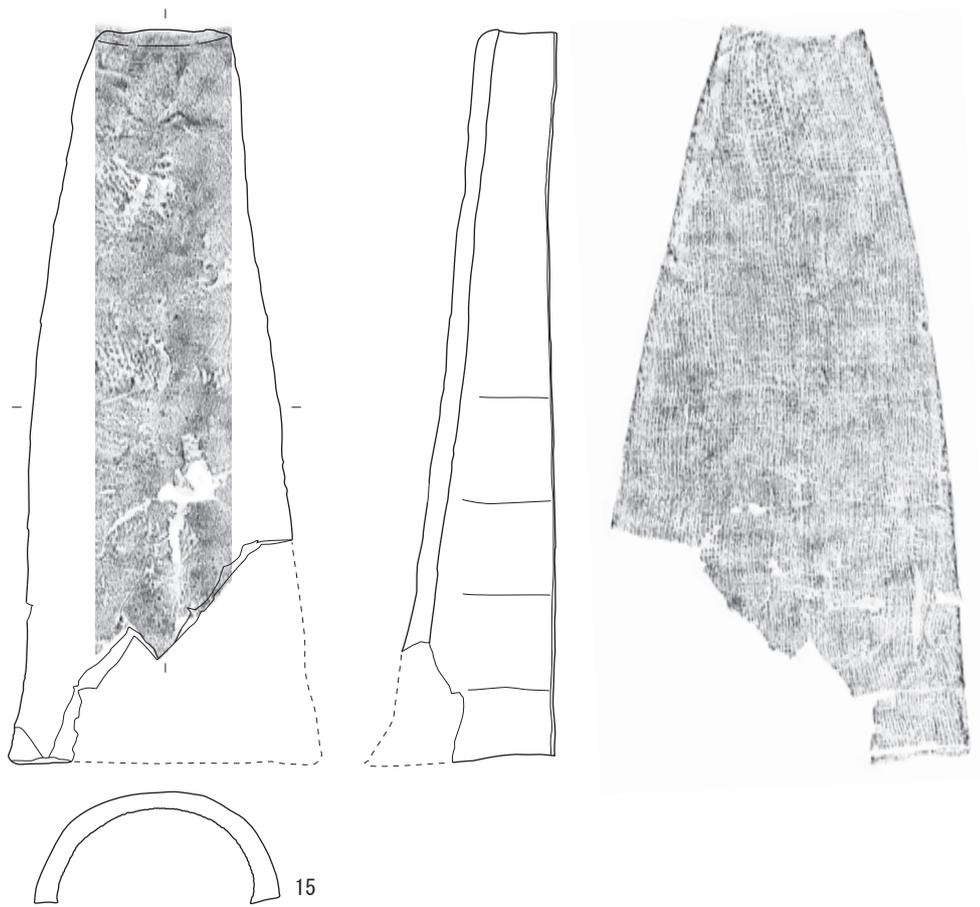
**時期** 土師器甕、須恵器坏・塀、瓦などから南多摩窯跡群編年G5古窯式期（9世紀末～10世紀第1四半期）に相当する時期と考えられる。



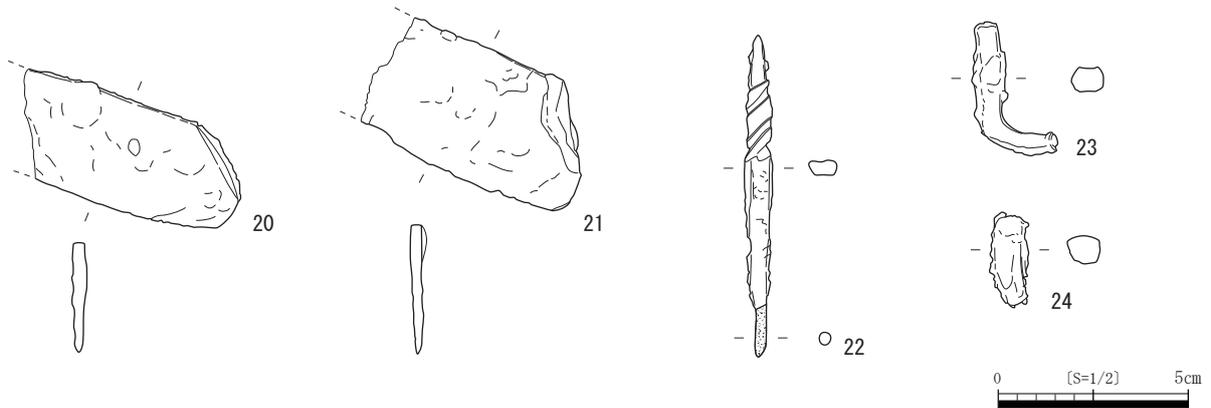
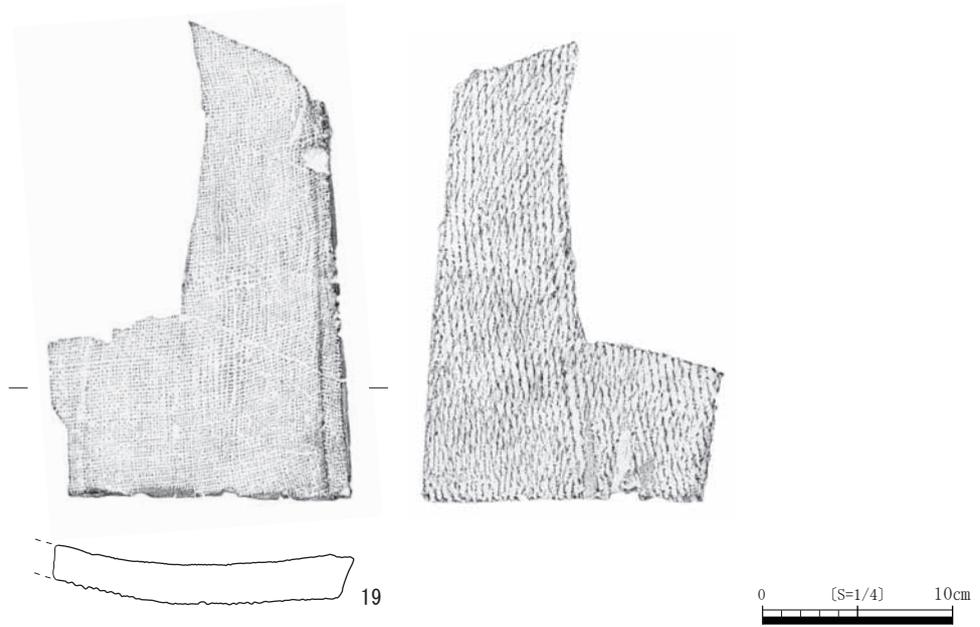
第56図 SI840 出土遺物実測図（1）



第 57 图 SI840 出土遺物実測図 (2)



第 58 図 SI840 出土遺物実測図 (3)



第 59 図 SI840 出土遺物実測図 (4)

第 22 表 SI840 出土土器観察表 (1)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径 器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
56-1 23-1-1	土師器 甕	覆土	口縁~胴上部 1/4 弱残	(18.0) [8.6] -	「コ」の字状口縁 口唇部受け口状	外面 口縁部横ナデ、胴部 横位ヘラケズリ 内面 口縁部横ナデ、胴部 刷毛目痕	内面 灰黄褐色 外面 黒褐色、 黒色	良好	細砂やや多 量、雲母やや 多量	
56-2 23-1-2	土師器 甕	床直	脚部 1/4 強残	- [4.2] (12.6)		回転ナデ	内面 灰褐色、 にぶい 外面 橙色、褐 灰色	良好	細砂多量、雲 母多量	
56-3 23-1-3	土師器 甕	床直	口縁~胴上部 1/4 弱残	(19.6) [13.6] -	「コ」の字状口縁	外面 口縁部指頭押え後ヘ ラナデ、胴部縦位ヘラケズ リ 内面 口縁部横ナデ、胴部 刷毛目痕	内面 灰黄褐色 外面 黒褐色、 灰黄褐色	良好	細砂やや多 量、砂粒少量、 雲母少量、赤 色粒子微量	武蔵型甕
56-4 23-1-4	須恵器 坏	床直	完形	12.8 4.9 3.0 4.7		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 橙色 (酸化焙)	良好	細砂やや多 量、雲母少量	内外面に煤(灯 明皿) 南多摩窯産 G5 古窯式
56-5 23-1-5	須恵器 坏	床直	完形	13.1 4.3 5.8 5.2		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 にぶい 橙色~褐灰色 (酸化焙)	良好	砂粒微量	内外面口縁部煤 附着(灯明皿) 外面体部に墨書 「岡」あり 南多摩窯産 G5 古窯式
56-6 23-1-6	須恵器 坏	床直	完形	13.1 4.5 5.8 5.0		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 灰黄色	良好	細砂少量	内外面口縁部煤 附着(灯明皿) 南多摩窯産 G5 古窯式

第 23 表 SI840 出土土器観察表 (2)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
56-7 23-1-7	須恵器 坏	掘方 覆土	体下～底部 体下部 1/4 残、 底部完存	— [3.0] 5.2 5.1		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 にぶい 赤褐色	良好	細砂微量、赤 色粒子微量	南多摩窯産 G5 古窯式
56-8 23-1-8	須恵器 坏	床直	体下～底部 体下部 1/2 弱 残、 底部完存	— [2.4] 4.6 4.2		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内面 にぶい橙 色 外面 橙色 (酸 化燐)	良好	細砂多量、砂 粒少量、赤色 粒子微量	南多摩窯産 G5 古窯式
56-9 23-1-9	須恵器 坏	床直	口縁～底部 口縁 1/4 強、 体部 1/2 残、 底部完存	(14.6) [5.7] 6.1 (5.8)		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 にぶい 黄褐色	良好	細砂少量、赤 色粒子微量	南多摩窯産 G5 古窯式
57-10 23-1-10	須恵器 高台付塊	床直	口縁～底部 口縁～体部 1/4 残、 底部完存	(15.8) [5.7] 7.25 6.2		ロクロ成形 貼付高台、回転ナデ	内面 灰黄褐色 外面 灰黄色	良好	細砂微量、雲 母微量、砂粒 微量	南多摩窯産 G5 古窯式
57-11 23-1-11	灰釉陶器 長頸壺	覆土	胴下部～底部 1/4 残	— (15.0) [16.4]	胴部は直線的に立 ち上がる	ロクロ成形 外面 胴部下端ヘラケズリ、 底部回転ヘラケズリ、胴部 ハケ塗り施釉 内面 ほぼ同位置から斜方 向指ナデ、底部境 (指) ナ デ	内外面 灰白色 施釉部分 浅黄 色	堅緻	細砂微量	K-90 窯式

第 24 表 SI840 出土石製品観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	石質	備考
			長さ	幅	厚み			
57-12 24-1-12	支脚	カマド	16.9	8.8	12.2	1811.4	チャート	自然石を転用

第 25 表 SI840 出土鏡瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	直径	内区				幅	外区			全長	備考	
			中房径 形態	蓮子数	弁区径 弁幅	弁数 形態		内縁		外縁			
								幅	文様	幅			高
57-13 24-1-13	覆土	[4.5]				(1)SA	1.3			1.4	a	[2.65]	

第 26 表 SI840 出土男瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴						備考
				素材	凹面		凸面		端面 特徴	
					布目	特徴	叩き	特徴		
57-14 24-1-14	カマド	8.45 18.1 38.6	1.2	粘土紐	17×20	4 端縁無調整、 布合わせ目痕あり	縄叩き L12 本	縄叩き後板状工 具により回転ナ デ 広端縁ナデ、そ の他無調整	狭端ナデ 広端凹面に模 骨の食い込んだ 凹面が半円残存	I 3-A1 技法 南多摩窯産
58-15 24-1-15	カマド 覆土	7.0 [3.3] 38.9	0.9	粘土紐	18×20	4 端縁無調整、 粘土紐接合痕 (4 条)		縄叩き後板状工 具により回転ナ デ 広端縁ヘラナ デ、狭端縁ナデ	狭端ナデ 広端無調整 側端面ヘラケズ リ	I 3-A1 技法
58-16 25-1-16	覆土	— — [11.5]	1.9	粘土紐	20×19	右側端ヘラケズ リ		縦位ナデ	ヘラケズリ	I 3-A1 技法 凸面に押印「豊」あり 南比企窯産
58-17 25-1-17	床直	— — [10.4]	1.6	粘土紐	22×18	広端縁・左側端 縁ヘラケズリ		回転ナデ、端縁 無調整	ヘラケズリ	凹面側から長さ 4.3～4.6cm の「ㄣ」型のヘラ切り込み あり 南比企窯産

第 27 表 SI840 出土女瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴						備考
				素材	凹面		凸面		端面 特徴	
					布目	特徴	叩き	特徴		
58-18 25-1-18	カマド 床直	— — [10.1]	1.6	粘土紐	16×14	狭端縁・左側端 縁無調整	縄目叩き L10 本	端縁無調整	狭端面ナデ、左 側端ヘラケズリ	凹面に模骨文字「十」あり II 1-A1 技法 南多摩窯産
59-19 25-1-19	カマド 床直	— 14.7 [25.5]	2.3	粘土紐	20×16	広端縁・右側端 縁ヘラケズリ。 右側端に成形台 側端の突起圧痕 あり	縄目叩き L8 本	広端縁に棒状圧 痕あり	広端ヘラケズリ 側端指ナデ	II 1-A1 技法 東金子窯産

第28表 SI840 出土鉄製品観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚み		
59-20 25-1-20	鎌	床直	[4.9]	2.9	0.3	16.9	刃先側を欠失
59-21 25-1-21	鎌	カマド	[5.5]	3.4	0.3	26.2	刃先側を欠失
59-22 25-1-22	錐?	床直	8.5	基部0.3 身部0.75	基部厚 0.3 身部厚 0.4	6.3	身部に振りあり
59-23 25-1-23	釘?	カマド	[3.6]	0.85	0.65	5.6	
59-24 25-1-24	不明	カマド	[2.5]	0.85	0.7	3.9	

### SI841住居 (第60～62図、第29・30表、図版14・26)

**位置・検出状況** Fトレンチの北壁のX・Y10グリッドに位置し、住居の南東隅を含む南壁を除き大部分が調査区域外である。遺構確認面はⅢc層である。住居の南東隅部分がSI842住居を切っている。

**形状・規模** 平面形・カマドの位置は不明である。主軸方位はN-3°-Wである。規模は南北1.00 m以上×東西約3.15 m以上で、遺構確認面から床面までの深さは約0.30 mである。

**覆土** 黒褐色土の1層からなる。

**壁・床面・周溝** 壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。床はIV層中まで掘り込まれ、掘方のロームブロックと黒褐色土の混合土の上面に硬化部分が見られる。周溝は不明である。

**ピット** 不明である。

**カマド** 不明である。

**掘方** 貼床は全体に20cmほどの深さで、掘方はほぼ平坦に掘られている。

**出土遺物** 遺物は住居南壁寄りの覆土を中心に土師器17点、須恵器23点、瓦7点、鉄製品2点、礫1点など計50点(7084.2g)が出土しているが、図示できるものは少ない。1は須恵器の無紐蓋で南多摩窯跡群編年G5古窯式期に相当する。2・3は鉄製品で、前者は毛抜き形鉄製品(鑷子:ちょうし)と考えられ、後者は刀子の茎部分である。

**時期** 時期は南多摩窯跡群編年G5古窯式期(9世紀末～10世紀第1四半期)に相当する可能性が高い。

### SI842住居 (第60・61・63図、第31表、図版14・26)

**位置・検出状況** Fトレンチの北壁のY10グリッドに位置し、住居の南東隅部分を除き大部分が調査区域外である。遺構確認面はⅢc層である。住居の西側部分をSI841住居に切られている。

**形状・規模** 平面形・カマドの位置は不明である。主軸方位はN-3°-Wである。規模は南北0.30 m以上×東西約1.3 m以上で、遺構確認面から床面までの深さは約0.22 mである。

**覆土** 黒褐色土の1層からなる。

**壁・床面・周溝** 壁はやや垂直気味に立ち上がる。床はIV層中まで掘り込まれ、住居中央部に暗褐色土とロームブロックの混合土により貼床を構築している。周溝は不明である。

**ピット** 不明である。

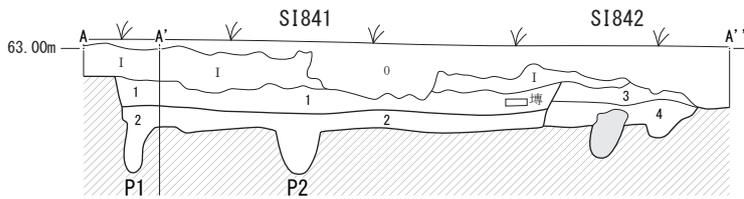
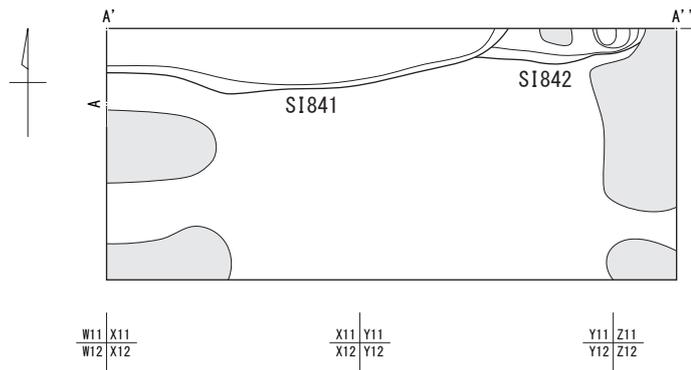
**カマド** 不明である。

**掘方** 貼床は全体に20cmほどの深さで、掘方はほぼ平坦に掘られている。

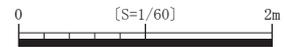
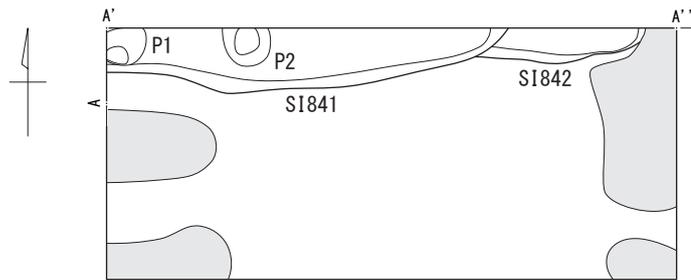
**出土遺物** 遺物はわずかに須恵器1点(21.8g)が出土した。1は須恵器の蓋で南多摩窯跡群編年G25～G5古窯式期に相当すると考えられる。

**時期** 不明である。

床面検出状況

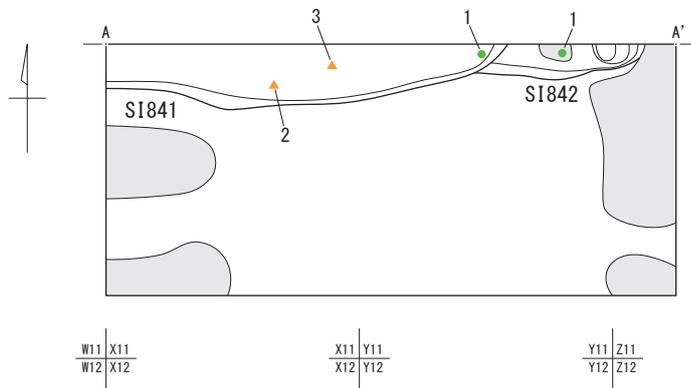
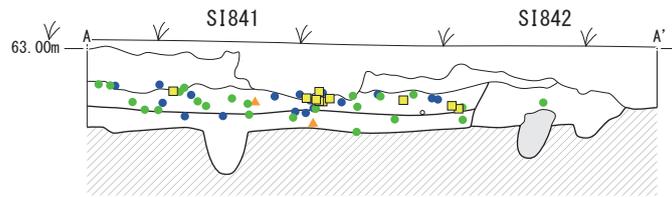
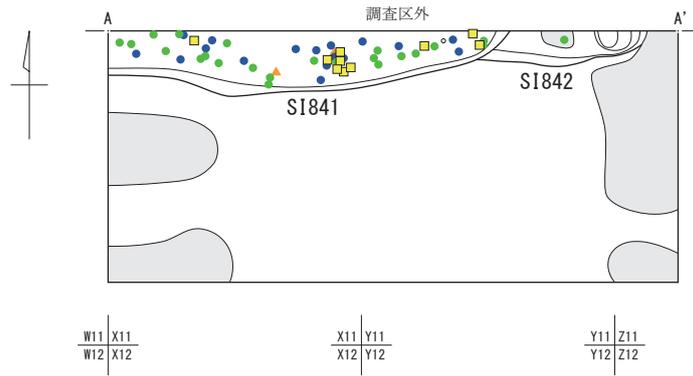


掘方

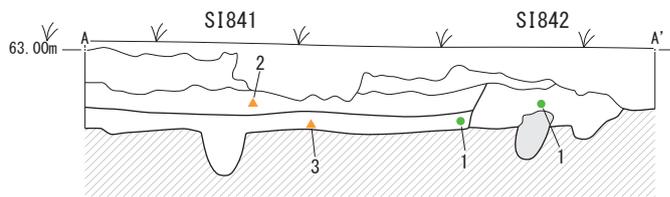


SI841			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒を含み、焼土粒・炭化物粒をわずかに混じる。締りあり。
2	10YR5/6	(黄褐色土)	ロームブロック (φ 10 ~ 40mm、多い) と黒褐色土の混合土。締りあり。(掘方)
P1			
2	10YR5/6	(黄褐色土)	ロームブロック (φ 10 ~ 40mm、多い) と黒褐色土の混合土。締りあり。SI841 第2層(掘方)と同じ。
P2			
2	10YR5/6	(黄褐色土)	ロームブロック (φ 10 ~ 40mm、多い) と黒褐色土の混合土。締りあり。SI841 第2層(掘方)と同じ。
SI842			
3	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒 (φ 2 ~ 3mm) を含み、第1層より黒味が強く、締りあり。
4	10YR7/6	(明黄褐色土)	ロームブロック (φ 20mm、多い) と黒褐色土の混合土。よく締り硬質。(掘方)

第 60 図 SI841・SI842 実測図



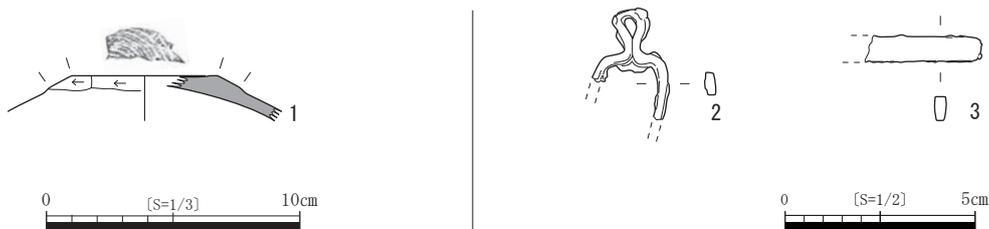
SI841



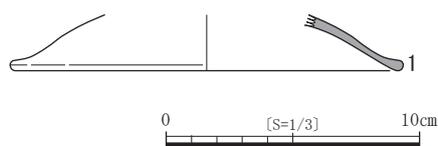
SI842



第 61 図 SI841・SI842 遺物出土状況図 (上図：全点・下図：実測個別)



第 62 図 SI841 遺物実測図



第 63 図 SI842 遺物実測図

第 29 表 SI841 出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径 器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
62-1 26-1-1	須恵器 蓋	掘方	天井部～体部 1/4 残	天井部径 (5.8) [1.8]		天井部回転糸切り後無調整 周縁部回転ヘラケズリ	内外面 灰黄色	良好	細砂多量、赤 色粒子微量	南多摩窯産 G5 古窯式

第 30 表 SI841 出土鉄製品観察表

挿図番号 図版番号	種類	出土位置	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚み		
62-2 26-1-2	鑷子	覆土	[2.95]	0.2	0.6	2.8	鑷子（毛抜き）と考えられる
62-3 26-1-3	刀子	掘方	[3.1]	0.65	0.3	1.2	基部の茎尻側

第 31 表 SI842 出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径 器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
62-1 26-2-1	須恵器 蓋	覆土	体部～口縁部 1/4 弱	(15.0) [2.2]		ロクロ成形	内面 にぶい赤 褐色 外面 明赤褐色 (酸化燐)	良好	細砂やや多量	南多摩窯産 G25～G5 古窯 式

## (2) 土坑

### SK3476土坑 (第64図)

**位置・検出状況** Aトレンチ西端SI833住居の東壁、I 20グリッドに位置し、遺構確認面はⅢc層である。本土坑はSI833住居の北壁を切っている。

**形状・規模** 平面形は楕円形で、規模は長軸約90cm×短軸約62cm、遺構確認面からの深さは約5cmである。

**覆土** ローム微粒を含む黒褐色土の1層からなる。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土から平安時代と考えられる。

### SK3477土坑 (第64図、図版15)

**位置・検出状況** Aトレンチ西端SI833住居の北側、H・I 19グリッドに位置し、遺構確認面はⅢc層である。

**形状・規模** 平面形は円形で、規模は径約84cm、遺構確認面からの深さは約10cmである。

**覆土** SK3476土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

**出土遺物** 遺物は土師質土器3点、瓦1点の計4点(63.8g)が出土したが図示できるものはない。

**時期** 平安時代と考えられる。

### SK3478土坑 (第64図)

**位置・検出状況** Aトレンチ西端SI831住居の東壁、F・G 20グリッドに位置し、南半が調査区域外にある。遺構確認面はⅢc層である。本土坑はSI831土坑の東壁を切っている。

**形状・規模** 平面形は隅丸方形に近く、現存する規模は南北約80cm以上×東西約120cm、遺構確認面からの深さは約50cmである。

**覆土** I層を切るI層に酷似する1層と焼土粒を多く含む2層の黒褐色土からなる。

**出土遺物** 遺物は土師器1点、土師質土器3点の計4点(32.4g)が出土したが図示できるものはない。

**時期** I層を切っていることから近現代と考えられる。

### SK3479土坑 (第64図、図版15)

**位置・検出状況** Aトレンチ西端SI831住居の北壁、F・G 19グリッドに位置し、遺構確認面はⅢc層である。本土坑はSI831住居の北壁を切っている。

**形状・規模** 平面形は隅丸方形で、規模は一辺が約85cm、遺構確認面からの深さは約20cmである。

**覆土** SK3476土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土から平安時代と考えられる。

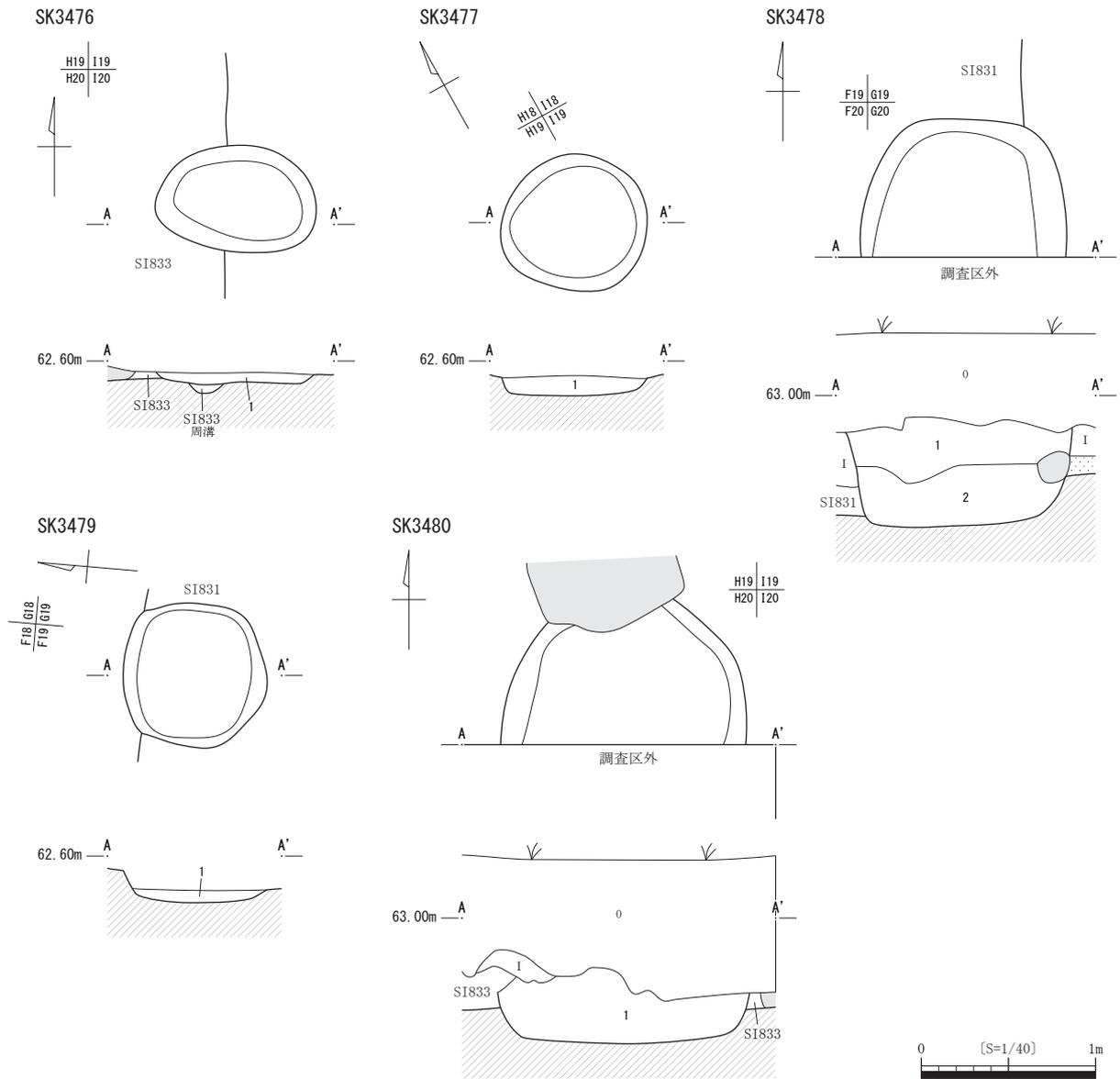
### SK3480土坑 (第64・68図、第32表、図版15・26)

**位置・検出状況** Aトレンチ西端SI833の中央部、H20グリッドに位置し、南半が調査区域外にある。遺構確認面はⅢc層である。本土坑はSI833住居の中央部を切っている。

**形状・規模** 平面形はほぼ円形で、現存する規模は径約140cm、遺構確認面からの深さは約40cmである。

**覆土** SK3476土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

**出土遺物** 遺物は土師質土器4点、瓦5点の計9点(371.5g)が出土したが図示できるものは少なく、土師質土器2点を図示した。1は坯の底部で南多摩窯跡群編年旧G14窯式に相当すると思われる。2



SK3476			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒を含む。
SK3477			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒を多く含む。やや締りあり。
SK3478			
1	10YR2/3	(黒褐色土)	焼土粒・灰白色粘土粒・炭化物粒を少し混じる。締りあり。第I層に似る。
2	10YR2/3	(黒褐色土)	焼土粒(φ1~2mm)を多く・炭化物粒を微量混じる。やや締りあり。
SK3479			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒を多く含む。やや締りあり。
SK3480			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム粒(φ2~10mm)・焼土微粒・炭化物粒を混じる。締りあり。

第 64 図 SK3476 ~ SK3480 実測図

は大型の足高高台塚である。

時期 平安時代と考えられる。

#### SK3481土坑（第65図、図版15）

位置・検出状況 Aトレンチ西端SI833住居の北側、G・H19グリッドに位置し、北側にSI834住居が近接する。遺構確認面はⅢc層である。

形状・規模 平面形はほぼ円形で、規模は径約120cm、遺構確認面からの深さは約20cmである。

覆土 SK3476土坑と同質の黒褐色土を主体とする2層からなる。

出土遺物 遺物は土師器1点、須恵器3点、土師質土器6点、瓦1点の計11点（284.0g）が出土したが図示できるものはない。

時期 平安時代と考えられる。

#### SK3482土坑（第65・68図、第32表、図版15・26）

位置・検出状況 Aトレンチ西端SI835住居の北側、I15・16グリッドに位置し、遺構確認面はⅢc層である。本土坑はSK3493J土坑の南半部を切っている。

形状・規模 平面形はほぼ円形で、規模は径約130cm、遺構確認面からの深さは約40cmである。

覆土 ローム粒と焼土粒などを含む黒褐色土の1層からなる。

出土遺物 遺物は須恵器3点、土師質土器8点、縄文土器2点の計13点（184.9g）が出土したが、土師質土器3点を図示した。3～5は土師質土器で、3は福田分類の32類に相当すると考えられる。4は坏底部、5は高台付塚である。

時期 平安時代と考えられる。

#### SK3483土坑（第65・68図、第32表、図版15・26）

位置・検出状況 Aトレンチ西端SI834住居の西壁、H18グリッドに位置し、遺構確認面はⅢc層である。本土坑はSI834住居を切っており、また西壁の一部を攪乱により壊されている。

形状・規模 平面形は楕円形で、規模は長軸約115cm、短軸約93cm、遺構確認面からの深さは約35cmである。

覆土 ローム粒・ローム土を多く混じる黒褐色土の1層からなる。

出土遺物 遺物は土師器1点、土師質土器5点、瓦4点、の計10点（580.7g）が出土したが、土師質土器1点を図示した。6は土師質土器の高台付塚である。

時期 平安時代と考えられる。

#### SK3484土坑（第65図）

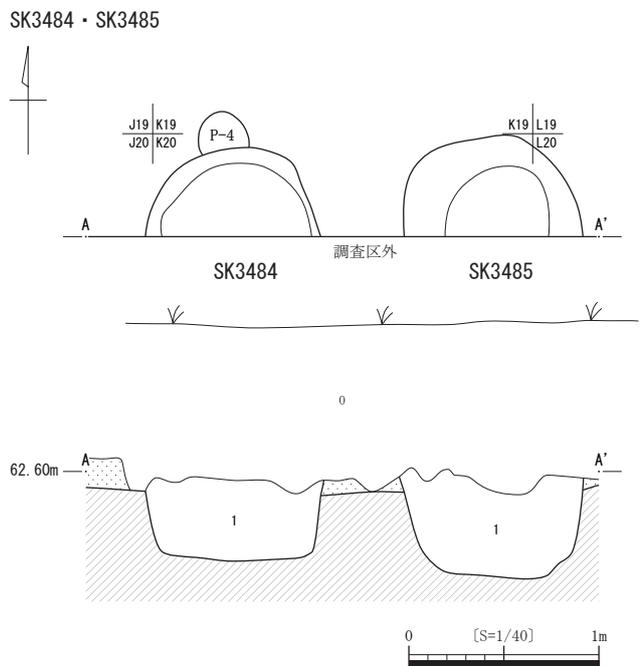
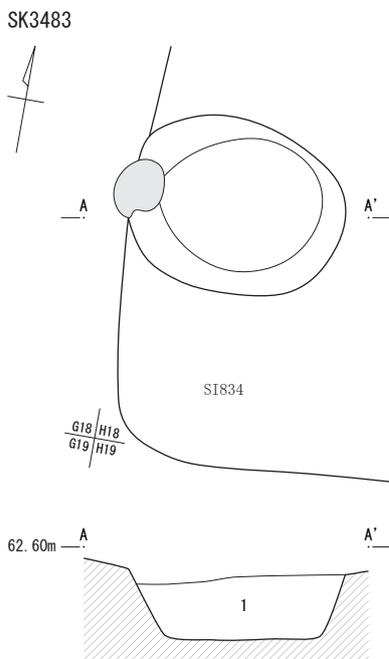
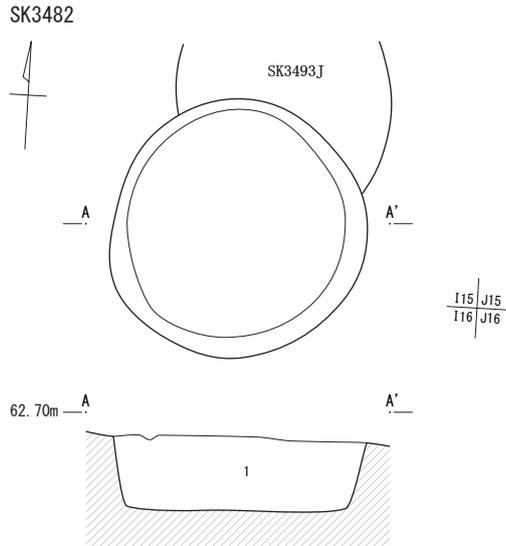
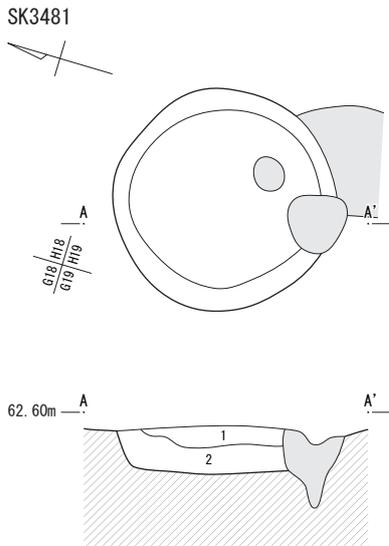
位置・検出状況 Aトレンチ西側の調査区南壁、J・K20グリッドに位置し、南半が調査区域外にある。遺構確認面はⅢc層である。北壁をP-4に切られている。

形状・規模 平面形は不整円形で、規模は径約93cm、遺構確認面からの深さは約45cmである。

覆土 SK3483土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

出土遺物 遺物は土師器1点、須恵器2点、土師質土器3点、瓦3点、の計9点（260.2g）が出土したが図示できるものはない。

時期 平安時代と考えられる。



SK3481			
1	10YR2/3	(黒褐色土)	褐色土・ローム小ブロックを多く混じる。締りあり。
2	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒を含む。やや締りあり。
SK3482			
1	10YR2/2	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 2 ~ 10mm) やや多く、焼土微粒・炭化物粒をわずかに混じる。やや締りあり。
SK3483			
1	10YR2/2	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 2 ~ 10mm) やや多く混じる。やや締りあり。
SK3484			
1	10YR2/3	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 5mm) ・ローム土を多く混じる。やや締りあり。
SK3485			
1	10YR2/3	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 5 ~ 10mm) ・ローム土を多く混じる。やや締りあり。

第 65 図 SK3481 ~ SK3485 実測図

### SK3485土坑（第65図）

**位置・検出状況** Aトレンチ西側の調査区南壁、K・L20グリッドに位置し、SK3484土坑が東に近接する。南半が調査区域外にあり、遺構確認面はⅢc層である。

**形状・規模** 平面形は不整円形で、規模は径約95cm、遺構確認面からの深さは約56cmである。

**覆土** SK3483土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土から平安時代と考えられる。

### SK3486土坑（第66図）

**位置・検出状況** Aトレンチ中央部付近、L19グリッドに位置し、遺構確認面はⅢc層である。

本土坑はP-5を切っている。

**形状・規模** 平面形は不整楕円形で、規模は長軸約106cm、短軸約60cm、遺構確認面からの深さは約67cmである。

**覆土** SK3483土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

**出土遺物** 遺物は土師器2点、土師質土器2点、瓦3点、の計7点（589.5g）が出土したが図示できるものはない。

**時期** 平安時代と考えられる。

### SK3487土坑（第66図、図版15）

**位置・検出状況** Aトレンチ中央部付近、M19グリッドに位置し、SK3486土坑の東に近接する。遺構確認面はⅢc層である。

**形状・規模** 平面形は不整円形で、規模は長軸約106cm、短軸約85cm、遺構確認面からの深さは約36cmである。

**覆土** ローム粒をわずかに含む黒褐色土1層からなる。

**出土遺物** 遺物は土師器2点、須恵器3点、土師質土器4点、瓦1点、の計10点（116.3g）が出土したが図示できるものはない。

**時期** 平安時代と考えられる。

### SK3488土坑（第66図）

**位置・検出状況** Aトレンチ中央SI837住居の中央部、N・O17グリッドに位置する。遺構確認面はⅢc層である。本土坑はSI837住居を切っており、また土坑の大部分をイモ穴に壊され、依存状態は不良である。

**形状・規模** 平面形は不整楕円形で、規模は長軸約106cm、短軸約90cm、遺構確認面からの深さは約36cmである。

**覆土** SK3482土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

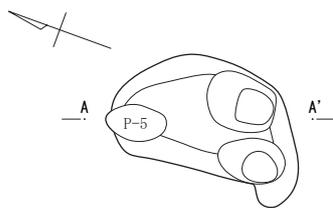
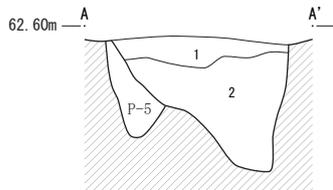
**出土遺物** 遺物は須恵器4点、土師質土器1点の計5点（116.3g）が出土したが図示できるものはない。

**時期** 平安時代と考えられる。

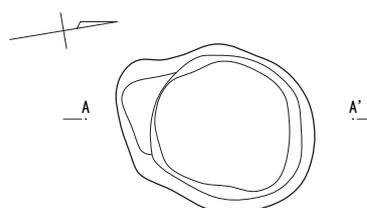
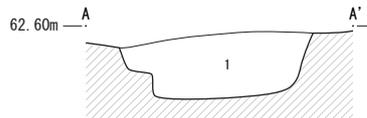
### SK3489土坑（第66・68図、第32表、図版15・26）

**位置・検出状況** Aトレンチ中央SI837住居の南東隅、O・P17・18グリッドに位置する。遺構確認面はⅢc層である。本土坑はSI837住居を切っており、また北半をイモ穴で浅く削平されている。

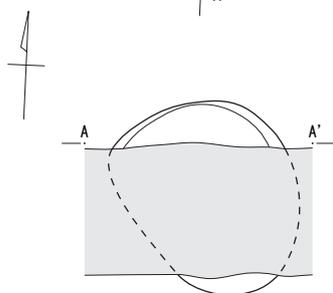
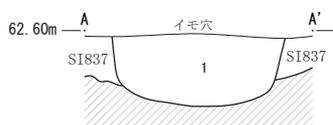
SK3486


 $\frac{L19}{L20} \frac{M19}{M20}$ 


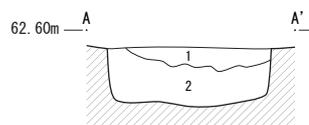
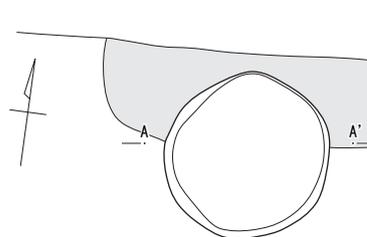
SK3487


 $\frac{M18}{M19} \frac{G18}{G19}$ 


SK3488

 $\frac{N16}{N17} \frac{O16}{O17}$ 

 $\frac{N17}{N18} \frac{O17}{O18}$ 


SK3489



0 [S=1/40] 1m

SK3486			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 2 ~ 5mm) やや多く混じる。やや締りあり。
2	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒・ローム小ブロック・ローム土をやや多く混じる。やや締りあり。
SK3487			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 2 ~ 5mm) をわずかに混じる。やや締りあり。
SK3488			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	焼土粒 (φ 2 ~ 5mm) ・ローム粒・ローム土を少し混じる。やや締りあり。
SK3489			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒 (φ 2 ~ 5mm) やや多く混じる。やや締りあり。
2	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム粒・ローム小ブロック・ローム土をやや多く混じる。やや締りあり。

第 66 図 SK3486 ~ SK3489 実測図

**形状・規模** 平面形は円形で、規模は径約90cm、遺構確認面からの深さは約32cmである。

**覆土** SK3483土坑と同質の黒褐色土2層からなる。

**出土遺物** 遺物は土師器4点、須恵器4点、土師質土器3点の計11点（152.5g）が出土したが、土師質土器1点を図示した。1は土師質土器の高台付塊である。

**時期** 平安時代と考えられる。

#### SK3490土坑（第67図、図版15）

**位置・検出状況** Aトレンチ中央南側SI838住居の北東隅寄り、N20・21グリッドに位置する。遺構確認面はⅢc層である。

**形状・規模** 平面形は隅丸方形に近く、規模は長軸径約107cm、遺構確認面からの深さは約17cmである。

**覆土** SK3476土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

**出土遺物** 遺物は土師質土器1点、縄文石器1点の計2点（1291.3g）が出土したが図示できるものはない。

**時期** 平安時代と考えられる。

#### SK3492土坑（第67図）

**位置・検出状況** Aトレンチ中央部の調査区北壁、R17グリッドに位置する。北半の大部分が調査区域外である。遺構確認面はⅢc層である。

**形状・規模** 平面形は円形で、規模は径約80cm、遺構確認面からの深さは約22cmである。

**覆土** SK3483土坑と同質の黒褐色土1層からなる。

**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土から平安時代と考えられる。

#### SK3495土坑（第67図）

**位置・検出状況** Aトレンチ東端、W18・19グリッドに位置する。東半の大部分が調査区域外である。遺構確認面はⅢc層である。

**形状・規模** 平面形は楕円形で、規模は長軸82cm以上、短軸60cm以上、遺構確認面からの深さは約32cmである。

**覆土** 汚れたローム土を多くまじる黒褐色土1層からなる。

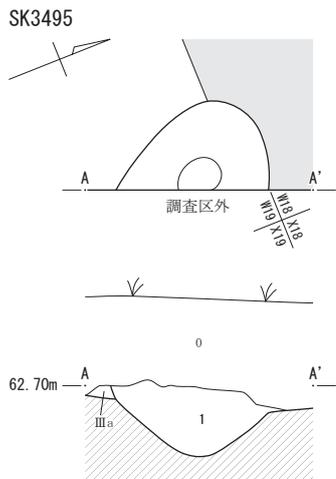
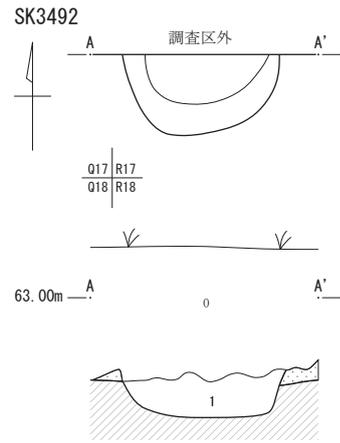
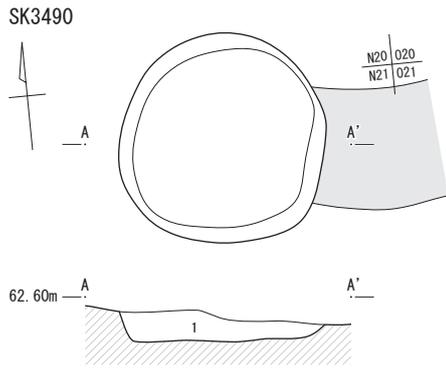
**出土遺物** 遺物は出土しなかった。

**時期** 覆土から平安時代と考えられる。

### （3）小穴（第69～71図、第33表、図版15）

ピットは18基を検出した。Aトレンチ調査区内に散在しており、やや中央部寄りに多いようである。遺構確認面はⅢc層である。平面形が円形で径が0.30m以上のものが多く、この中でP-2・P-3は柱痕跡と埋土が確認できるものである。覆土はP-2～P-4・P-6～P-8・P-10・P-11・P-13・P-14・P-17・P-18がSK3476土坑と同質の黒褐色土であり、平安時代に所属すると考えられる。ピットの詳細については、第33表小穴計測表を参照されたい。

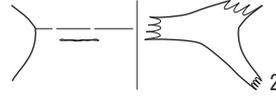
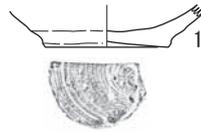
遺物は、P-1（土師器・須恵器の計2点、14.0g）、P-3（瓦1点、239.7g）、P-6（瓦1点、11.6g）・P-8（縄文土器1点、24.2g）、P-12（瓦1点、30.8g）、P-15（土師質土器2点、瓦1点の計3点、538.5g）から出土しているが、何れも小破片で図示できるものはない。



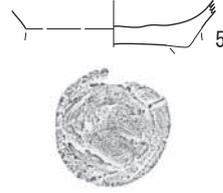
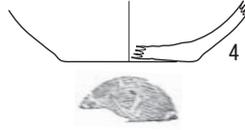
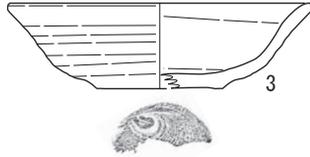
SK3490			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム粒・焼土粒を混じる。やや締りあり。
SK3492			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	黒褐色土粒 (φ 5 ~ 10mm)・ローム粒 (φ 5 ~ 10mm) を多く混じる。締りあり。
SK3495			
1	10YR3/2	(黒褐色土)	汚れたローム土をやや多く、ローム粒・焼土粒を少し混じる。よく締りあり。

第 67 図 SK3490・SK3492・SK3495 実測図

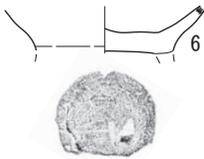
SK3480



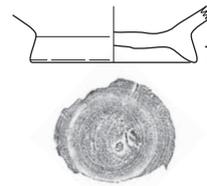
SK3482



SK3483



SK3489

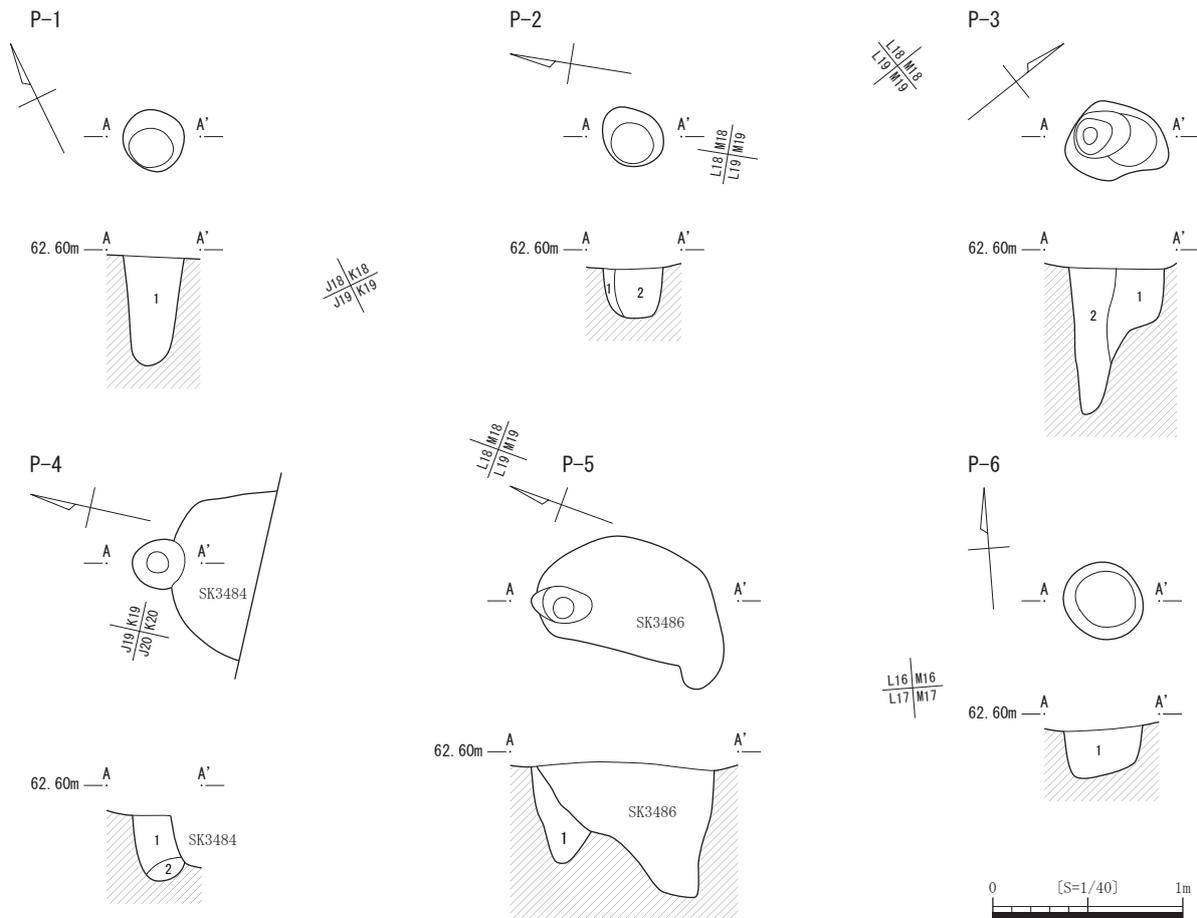


0 [S=1/3] 10cm

第 68 図 SK3480・SK3482・SK3483・SK3489 出土遺物実測図

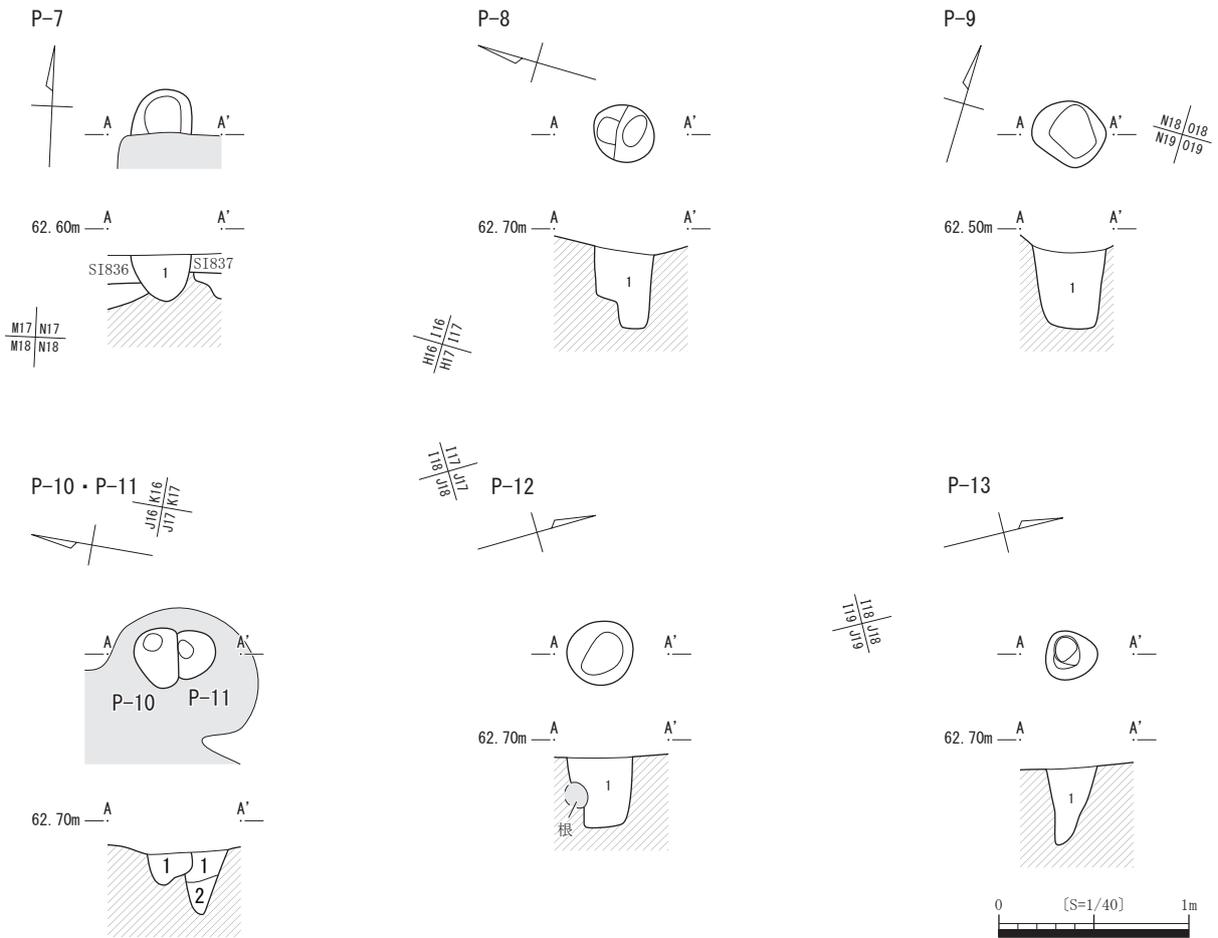
第 32 表 SK3480・SK3482・SK3483・SK3489 出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径 器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
68-1 26-3-1	土師質 土器 坏	SK3480 覆土	体下部～底部 体下部 1/2 弱、 底部 1/2 強残	— [1.7] 4.8 3.9		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内面 にぶい橙色 外面 体部 橙色、 にぶい橙色	良好	細砂少量、赤 色粒子少量、 雲母微量	
68-2 26-3-2	土師質 土器 高台付塊	SK3480 覆土	底部～高台 1/2 弱残	— (3.6) —	足高高台	ロクロ成形 貼付高台。内外面横ナデ	内外面 橙色	やや 軟質	砂粒少量、石 英微量	
68-3 26-3-3	土師質 土器 坏	SK3482 覆土	口縁～底部 口縁～体部 1/4 強、 底部 1/2 弱残	(11.8) [3.4] (5.0) 3.4		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 橙色	良好	細砂多量、砂 粒微量	
68-4 26-3-4	土師質 土器 坏	SK3482 覆土	体下部～底部 体下部極小、 底部 1/2 弱残	— [2.4] (5.2)		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 にぶい 橙色	良好	細砂多量、金 雲母少量、赤 色粒子微量	
68-5 26-3-5	土師質 土器 高台付塊	SK3482 覆土	体下部～底部 体下部極小、 底部完存	— [1.9] 5.8 5.0		底部回転糸切り後貼付高台 (高台剥落)	内外面 浅黄橙 色	良好	細砂少量、赤 色粒子微量	
68-6 26-3-6	土師質 土器 高台付塊	SK3483 覆土	体下部～底部 体下部 1/4 弱、 底部 3/4 弱残	— [1.9] 5.0 4.5		ロクロ成形 底部回転糸切り後貼付高台 (高台剥落)	内面 浅黄橙 色、黄橙色 外面 浅黄橙色	良好	微砂粒多量、 黒雲母微量、 赤色粒子微量	
68-7 26-3-7	土師質 土器 高台付塊	SK3489 覆土	底部	— [2.25] (6.4) 4.4		ロクロ成形 底部回転糸切り後貼付高台	内外面 橙色	良好	細砂少量、赤 色粒子微量	



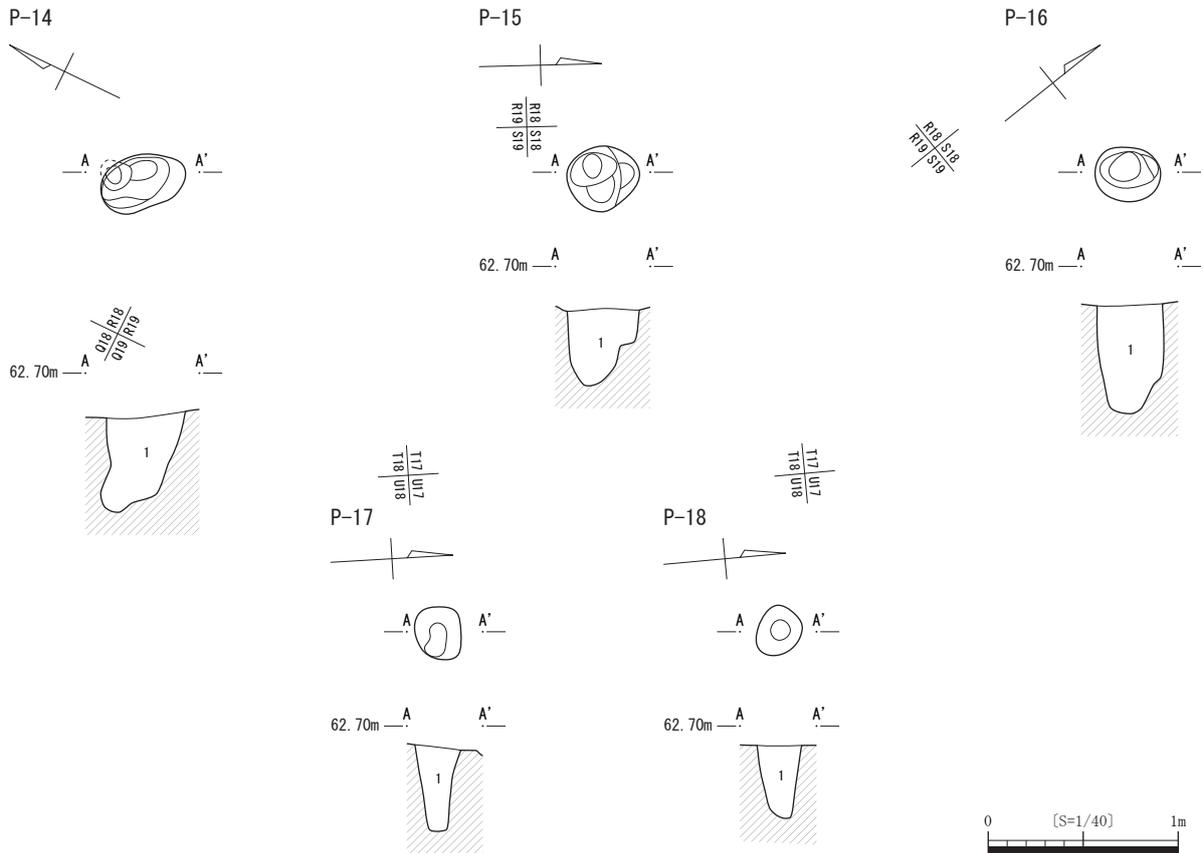
P-1			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	焼土・微粒・ローム微粒をわずかに、ローム土をやや多く混じる。締りあり。
P-2			
1	10YR4/4	(褐色土)	汚れたローム土主体。部分的に黒褐色土を混じる。締りあり。(埋土)
2	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒をわずかに含む。(柱痕跡)
P-3			
1	10YR3/2	(黒褐色土)	ローム土を多く混じる。やや締りあり。(埋土)
2	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒・焼土微粒をわずかに混じる。やや軟質。(柱痕跡)
P-4			
1	10YR2/1	(黒色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒・ローム土をわずかに混じる。部分的によく締り、硬質。
2	10YR5/6	(黄褐色土)	黒色土を混じる。やや締りあり。
P-5			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	ローム土を混じる。締りあり。
P-6			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム土を混じる。締りあり。

第 69 図 小穴実測図 (1)



P-7			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒をわずかに含む。
P-8			
1	10YR2/1	(黒色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒を含む。暗褐色土・灰白色粘土を少し混じる。締りあり。
P-9			
1	10YR3/2	(黒褐色土)	暗褐色土を多く、ローム粒を少し混じる。締りあり。
P-10			
1	10YR3/2	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム粒を少し、ローム土をやや多く混じる。やや締りあり。
P-11			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム微粒を含む。
2	10YR3/2	(黒褐色土)	汚れたローム土を多く混じる。締りなし。
P-12			
1	10YR3/2	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム粒を少し混じる。やや締りあり。
P-13			
1	10YR3/2	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム粒を少し混じる。やや締りあり。

第70図 小穴実測図(2)



P-14			
1	10YR3/1	(黒褐色土)	粒子が粗くバラつく。ローム土 (φ 1 ~ 3mm) を多く混じる。やや締りあり。
P-15			
1	10YR4/4	(褐色土)	黒褐色土を混じる汚れたローム土。やや締りあり。
P-16			
1	10YR4/4	(褐色土)	ローム土 (φ 2 ~ 3mm) を多く混じる汚れたローム土。やや締りあり。
P-17			
1	10YR2/1	(黒色土)	ローム微粒・汚れたローム土を混じる。やや締りあり。
P-18			
1	10YR2/1	(黒色土)	ローム微粒・汚れたローム土を混じる。やや締りあり。

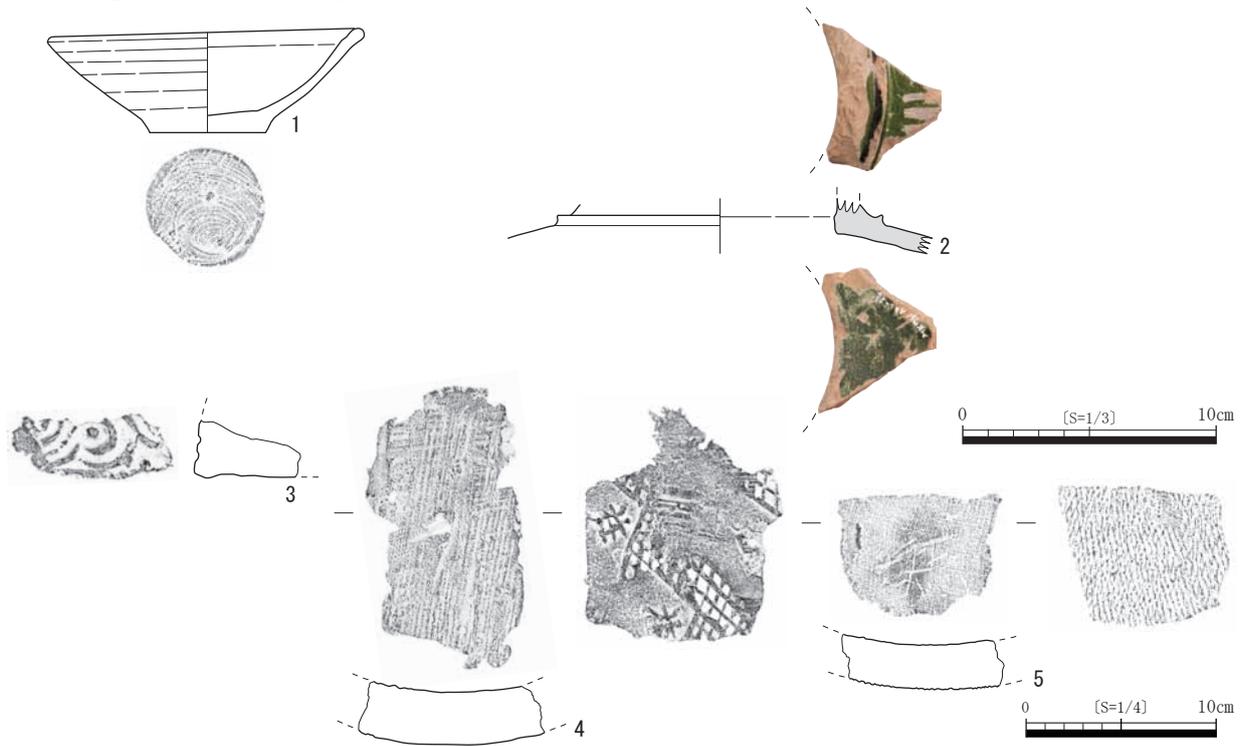
第 71 図 小穴実測図 (3)

第 33 表 小穴計測表

ピット番号	時期	規模 (cm)			備考
		長径	短径	深さ	
P-1	不明	33	33	55	
P-2	平安時代	35	30	24	柱痕跡あり
P-3	平安時代	50	40	82	柱痕跡あり
P-4	平安時代	28	25	35	
P-5	不明	30	20	50	
P-6	平安時代	42	38	22	
P-7	平安時代	24 以上	28	24	
P-8	平安時代	33	33	43	
P-9	不明	38	32	45	
P-10	平安時代	32	24	20	
P-11	平安時代	25	20	30	
P-12	不明	35	35	34	
P-13	平安時代	30	26	37	
P-14	平安時代	48	38	45	
P-15	不明	40	35	36	
P-16	不明	35	30	58	
P-17	平安時代	28	25	36	
P-18	平安時代	28	24	36	

(4) 遺構外出土遺物 (第72図、第34～36表、図版26)

確認調査出土遺物を含めると、Aトレンチの表土を中心に土師器13点、須恵器21点、土師質土器47点、灰釉陶器1点、緑釉陶器2点、瓦53点、陶磁器(近現代)3点、鉄製品1点、礫2点、縄文土器30点、縄文石器2点など計175点(10012.6g)が出土しているが、図示できるものは少ない。Aトレンチの表土出土を中心に5点を図示した。1は土師質土器で、福田分類の12類に相当すると考えられる。2は緑釉陶器の広口瓶と考えられ、尾北窯の篠岡産である。3は偏行唐草文宇瓦の顎の剥離した破片で284型式に相当する(依田2018)。4はⅡ1-B技法の女瓦で、凸面に押型「荏」がある。5は女瓦で凹面に焼成後の線刻「犬？」がある。



第72図 遺構外出土遺物実測図

第34表 遺構外出土土器観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	部位 残存率	口径 器高 底径 内底径 (cm)	器形・文様	成形・調整	色調	焼成	胎土	備考
72-1 26-4-1	土師質 土器 坏	表土	口縁～体部 1/2強、底 部ほぼ完存	12.1 4.2 4.6 3.9		ロクロ成形 底部回転糸切り無調整	内外面 橙色	良好	細砂、赤色粒子 少量	
72-2 26-4-2	緑釉陶器 広口瓶	表土	破片	— [2.2] (9.0)		内外面緑釉、ハケ塗り施釉	内外面 オリーブ 灰色	良好	白色粒極微量	尾北窯篠岡産

第35表 遺構外出土宇瓦観察表

挿図番号 図版番号	出土位置	上限弧幅 下限弧幅 弧深 (cm)	厚み (cm)	内区		外区				胎区		文様 深さ	全長	備考
				厚み (cm)	文様	上		下		幅	文様			
						厚み (cm)	文様	厚み (cm)	文様					
72-3 26-4-3	表土	— (7.1) —	3.1	2.8	HK	—	—	0.5	a	—	a	0.2	5.4	284型式

第36表 遺構外出土女瓦観察表

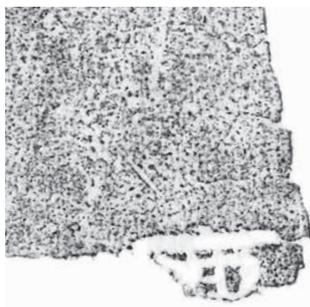
挿図番号 図版番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚み (cm)	成・整形の特徴					備考	
				素材	凹面		凸面			端面
					布目	特徴	叩き	特徴		
72-4 26-4-4	表土	— [14.8]	2.8	粘土板	26×26	狭端縁へラケズリ	格子叩き			凸面に押型「荏」あり Ⅱ1-B技法 東金子窯産
72-5 26-4-5	表土	— [7.3]	2.3	粘土紐?	28×30		縄叩き L11本			凹面に線刻(焼成後)「犬？」あり

墨書土器

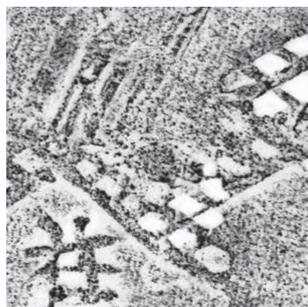
𠄎

「岡」 S1840 5

文字瓦



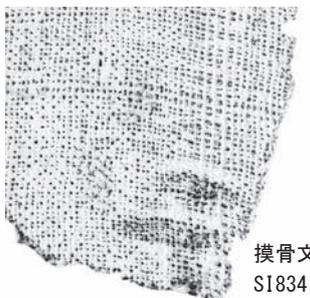
押印「豊」 S1840 16



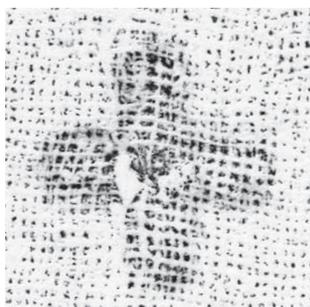
押型「荏」 遺構外 4



摸骨文字「上」 S1838 15



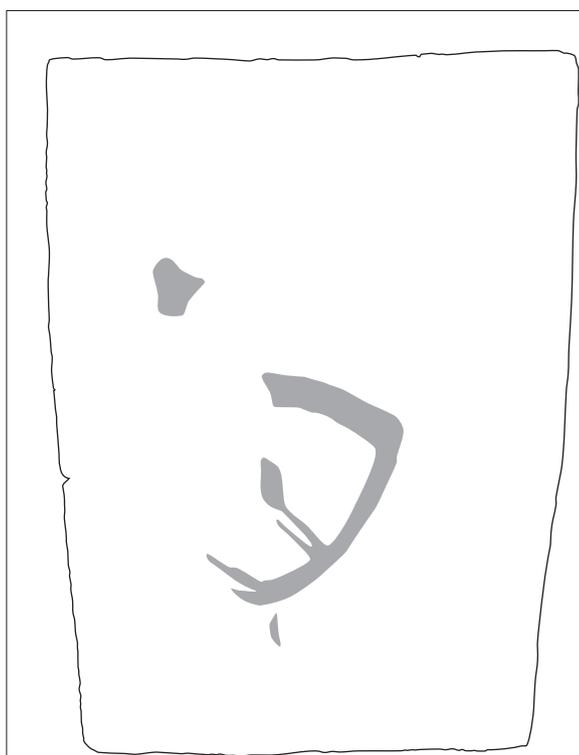
摸骨文字逆字「干」  
S1834 8



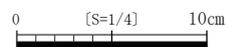
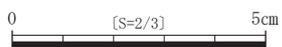
摸骨文字「十」 S1840 18



線刻「犬？」 遺構外 5



朱墨書「寺？」 S1838 14



第 73 図 出土文字集成

第37表 出土遺物集計表

遺構名	縄文土器		土師器		須恵器		土師質土器		灰軸陶器		瓦		鉄製品		石製品		中世以降		薬		その他		総計	
	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)	点数(個)	重量(g)
SI831	1	4.5	17	242.4	71	657.2	14	175.5	4	31.7	35	4989.2	1	159.8	0	0	0	0	4	401.5	0	0	147	6661.8
SI832	0	0	1	5.0	5	83.5	1	17.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	105.9
SI833	1	25.5	3	75.5	1	55.6	5	25.3	0	0	14	3694.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	3949.2
SI834	1	5.5	26	527.1	36	1298.9	72	502.1	2	4.8	26	10173	7	188.9	0	0	0	0	3	62.6	1	0.6	174	12763.5
SI835	11	119.8	7	52.0	96	1241.7	4	62.1	12	566.6	9	2020.2	8	268.5	2	18200	0	0	3	2400	1	6.9	153	24937.8
SI836	0	0	13	41.3	14	287.1	35	233.0	1	2.9	9	2280.3	0	0	0	0	1	2.9	1	932.5	1	674.2	75	4454.2
SI837	6	46.8	20	288.5	35	1034.3	0	0	1	2.4	9	1605.9	1	8.0	0	0	0	0	0	0	0	0	72	2985.9
SI838	5	63.6	27	1259.5	60	1691.3	0	0	3	30.0	16	11682.8	0	0	0	0	0	0	6	2158.8	1	793.8	118	17679.8
SI839	0	0	5	33.8	3	22.1	5	20.0	0	0	4	152.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	228.5
SI840	2	36.3	85	1501.4	125	2881.6	1	27	3	333.6	148	31652.6	5	58.9	1	1811.7	3	158.7	11	2438.1	1	586.0	385	41485.9
SI841	0	0	17	81.3	23	158.2	0	0	0	0	7	4760.1	2	4.0	0	0	0	0	1	2080.6	0	0	50	7084.2
SI842	0	0	0	0	1	21.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	21.8
SK3477	0	0	0	0	0	0	3	19.5	0	0	1	44.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	63.8
SK3478	0	0	1	2.9	0	0	3	29.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	32.4
SK3480	0	0	0	0	0	0	4	111.0	0	0	5	333.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	371.5
SK3481	0	0	1	7.0	3	51.6	6	49.9	0	0	1	175.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	284
SK3482	2	15.3	0	0	3	33.7	8	135.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	184.9
SK3483	0	0	1	13.2	0	0	5	52.6	0	0	4	514.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	580.7
SK3484	0	0	1	4.7	2	5.9	3	8.2	0	0	3	241.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	260.2
SK3486	0	0	2	22.8	0	0	2	6.6	0	0	3	560.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	589.5
SK3487	0	0	2	16.7	3	25.2	4	27.6	0	0	1	46.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	116.3
SK3488	0	0	0	0	4	31.7	1	8.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	40.2
SK3489	0	0	4	45.4	4	47.2	3	59.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	152.5
SK3490	0	0	0	0	0	0	1	13.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1291.3	
SK3493	0	0	0	0	0	0	1	2.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.1
P1	0	0	1	3.3	1	10.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	14
P3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	239.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	239.7
P6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	11.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	11.6
P8	1	24.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	24.2
P12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	30.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	30.8
P15	0	0	0	0	0	0	2	7.5	0	0	1	531	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	538.5
表土	30	341.9	13	160.8	21	953	47	457.2	1	16.2	53	7415.4	1	40.1	0	0	3	95.0	2	490	4	43.0	175	10012.6
4号棟立会	1	14.5	1	24.5	5	52	0	0	0	0	2	54.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	145.7
17号棟立会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	44.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	44.9
合計	60	683.4	248	4399.1	512	10616.8	235	2104	27	988.2	355	83255.6	25	728.2	3	20011.7	7	256.6	31	10964.1	10	3382.2	1514	137244.2

## 第5章 まとめ

### 1. 縄文時代の陥し穴について

今次調査では、思いがけずAトレンチ中央部において縄文時代の陥し穴1基が検出された。長軸2.30×短軸1.10 m（底面0.50 m）を測る大型の陥し穴であり、出土遺物が無く時期は不明であるが早期の所産と思われる。本調査区の立地する立川段丘上では縄文時代の遺構（土坑、集石土坑など）・遺物（中期が多い）も少なからず明らかになっているが、管見によれば陥し穴の検出例はそれほど多くない。府中市境の東八道路建設に伴う調査では4基（東京都建設局他1985）、国分寺市公共下水道面整備に伴う調査では1基（国分寺市遺跡調査会1998）が検出されており、その詳細は次の通りである（第74図）。

#### 東八道路

**SK 6土坑** 所謂「Tピット」と呼ばれる溝型陥し穴で、長軸3.40 m×短軸0.80 m（底面0.12～0.24 m）、深さ1.30 mである。底面に小穴3基を伴う。国分寺崖線下より南約660 m地点に位置する。

**SK34土坑** 平面形は不整楕円形で、長軸1.85 m×短軸1.20 m（底面0.65 m）、深さ1.30 mである。底面に小穴は無い。国分寺崖線下より南約631 m地点に位置する。

**SK36土坑** 平面形は楕円形で、長軸1.60 m×短軸0.95 m（底面0.65 m）、深さ0.80 mである。底面に小穴2基を伴う。国分寺崖線下より南約652 m地点に位置する。

**SK40土坑** 平面形は不整楕円形で、長軸1.40 m×短軸0.90 m（底面0.60 m）、深さ0.65 mである。底面に小穴2基を伴う。国分寺崖線下より南約655 m地点に位置する。

以上4基の陥し穴に伴う出土遺物は無く、時期は不明であるが、調査地区内からは早期中葉の沈線文系土器（田戸上層式）と条痕文系土器（子母口式）、スタンプ形石器が出土している。また、当該調査地点は国分寺崖線下（湧水地）より南631～660 m地点に散在する。

#### 国分寺市公共下水道（第35次調査地区）

**SK254J土坑** 平面形が長楕円形の溝型陥し穴で、長軸2.30 m×短軸0.90 m（底面0.08～0.10 m）、深さ1.35 mである。国分寺崖線下（湧水地）より南約135 m地点に位置する。出土遺物は無く時期は不明であるが、調査地区の近隣からは早期のスタンプ形石器が出土している。

#### 多喜窪遺跡C地点（第563次調査地区）

また、国分寺崖線上の武蔵野段丘縁辺には縄文中期の拠点集落である多喜窪遺跡があり、崖線下には今でも湧水が豊富にみられるが、その中で湧水量の多い都指定名勝「真姿の池湧水群」をのぞむ場所は多喜窪遺跡C地点と呼ばれ、縄文時代早期の遺構・遺物が集中する場所でもある。多喜窪遺跡C地点の第563次調査地区では陥し穴が7基検出されており（国分寺市遺跡調査会2005）、その詳細は次の通りである。

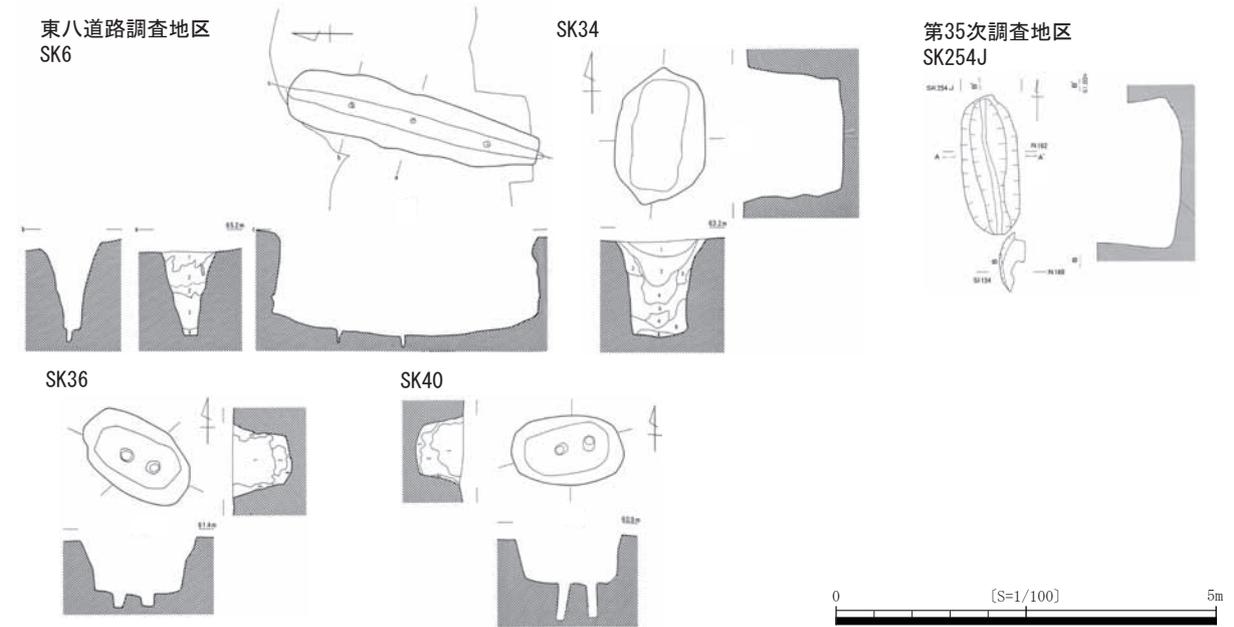
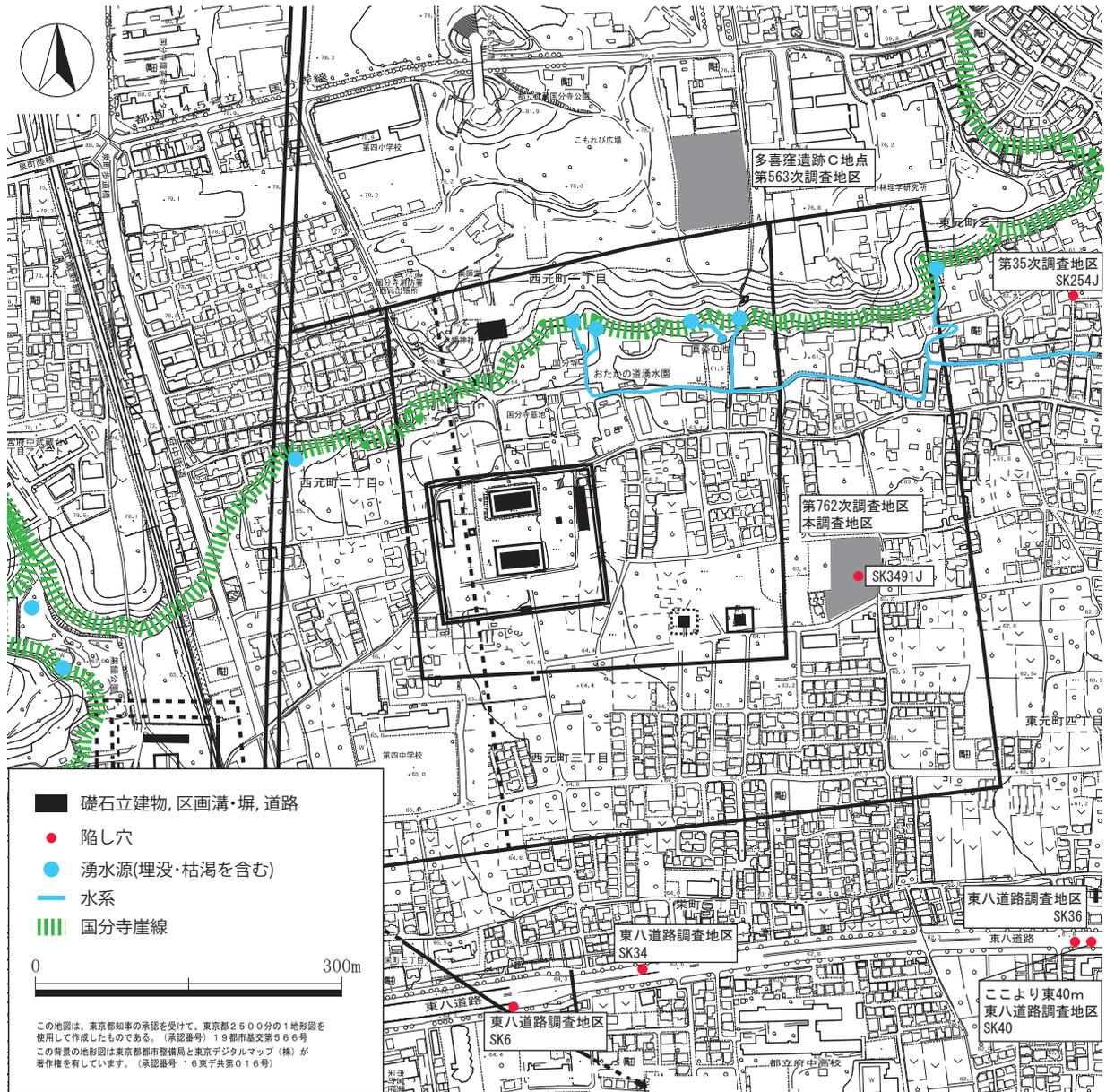
**SK2903J土坑** 平面形が狭長方形の溝型陥し穴で、長軸残存0.75 m×短軸0.55 m（底面0.25 m）、深さ0.95 mである。底面残存部分に小穴2基を伴う。

**SK2911J土坑** 平面形は長楕円形で、長軸1.71 m×短軸0.90 m（底面0.65 m）、深さ0.69 mである。底面に小穴3基を伴う。

**SK2913J土坑** 平面形は長方形で、長軸1.44 m×短軸0.91 m（底面0.60 m）、深さ0.86 mである。底面に小穴4基を伴う。また、撚糸文系土器（稻荷台式）が出土している。

**SK2945J土坑** 平面形は長方形で、長軸2.06 m×短軸0.88 m（底面0.50 m）、深さ0.83 mである。底面に小穴4基を伴う。また、撚糸文系土器（稻荷台式）が出土している。

**SK3032J土坑** 平面形は狭長方形の溝型陥し穴で、長軸2.34 m×短軸0.81 m（底面0.20 m）、深さ1.00 mである。底面に小穴1基を伴う。



第74図 縄文時代陥し穴分布図

SK3059J土坑 平面形は長方形で、長軸推定1.36 m×短軸0.76 m（底面0.50 m）、深さ0.68 mである。底面に小穴2基を伴う。

SK3079J土坑 平面形は長方形で、長軸1.66 m×短軸0.87 m（底面0.30 m）、深さ0.82 mである。底面に小穴3基を伴う。

これらから、立川段丘上と武蔵野段丘縁辺の陥し穴にはその形態と出土土器・石器に共通点が認められるようであり、これはとりもなおさず立川段丘上の陥し穴が早期の陥し穴であることを物語るものと言えよう。しかし、その在り方は丘陵地や台地縁辺部のような集中的な分布はみせず、東西に走行する国分寺崖線の湧水地を背景に、その前面（南側）に単独で散在する分布をとる傾向が強いものと考えられる。

## 2. 平安時代の遺構について

本調査地区は、既に述べたように僧寺伽藍地の塔1の北東約133 m、また伽藍地区画東辺溝の東約80 m地点の寺院地内に位置しており、周辺ではこれまで個人住宅建設に伴う調査や市公共下水道工事に伴う調査（国分寺市遺跡調査会1994）などが実施されている。南側の市道に隣接した地域からは東西2間×南北4間以上の大型建物を含む複数の建物と竪穴住居が伽藍地区画南辺溝の東延長付近まで確認され（第77図）、それより南側地域では寺院地南辺区画溝まで住居などが未確認であることから、寺の付属施設である「苑院・花園院」とその関連施設と推定されている（第10図）。

このように本調査地区は「苑院・花園院」推定地の北隣接地にあたるが、調査があまり実施されていない地域でもあり、どのような土地利用が行われていたのか見ていくことにしたい。

### ① 遺構の時期について

遺構の時期を決める出土遺物の年代観は落川・一の宮遺跡編年を参考にしたが、『武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書 遺物編』（依田2018）では当編年の第30段階（10世紀第3四半期）と第31段階（10世紀第4四半期）以降の古代末期に相当する時期について、100年の編年的空白が介在するとの指摘（黒尾2008）などを受けて、今後解決すべき編年研究上の課題であるとしている。また、武蔵国分寺跡では西脇俊郎・福田信夫の両氏による当該期の編年についての先行研究があり、編年案も提示されている（西脇1980・1981）。武蔵国分寺跡の既刊の報告書では、土師質土器が主体になっていく古代末期の時期決定にはこれらの編年観が参考にされているようである。このような現状から、出土遺物の年代観については落川・一の宮遺跡編年は第30段階（10世紀第3四半期）までを、以降は福田分類編年（福田信夫1984）をそれぞれ参考にすることにした。その結果、住居跡の時期は次の整理することができた。

9世紀末～10世紀第1四半期	SI838・SI840・(SI835)
10世紀末～11世紀初頭	SI834・(SI837)
11世紀中葉～11世紀後半	SI831・SI836
不明	SI833・SI832・SI839・SI841・SI842

これらは、9世紀末～10世紀第1四半期の一群と10世紀末～11世紀後半の一群に大別され、前者は武蔵国分寺変遷第Ⅱ期（整備・拡充期）の武蔵国分寺最終修造が行われた時期に、後者は武蔵国分寺変遷第Ⅲ期（衰退期）の時期にそれぞれ相当する（註4）。そこで、ここでは武蔵国分寺最終修造時の状況と武蔵国分寺変遷第Ⅲ期（衰退期）の実態について検討を加えることにしたい。

## ② 第Ⅱ期武蔵国分寺最終修造期の状況について

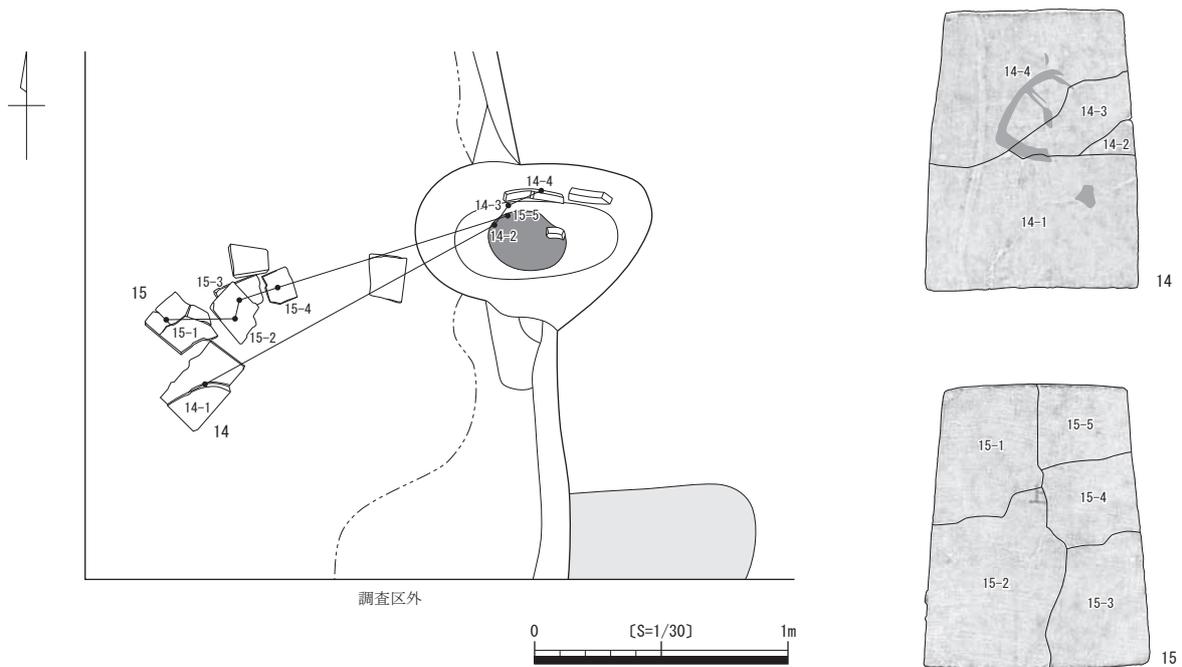
武蔵国分寺の最終修造期（9世紀末～10世紀第1四半期）には南多摩窯跡群御殿山地区の須恵器窯で所用瓦が生産された。SI838住居出土の女瓦（14・15）およびSI840住居出土の男瓦（13・14）がその代表例で、女瓦凹面の模骨文字（「上」・「+」など）も顕著な特徴の一つである。また、両住居はカマド前面を中心に覆土最上層まで多くの遺物が含まれているが、住居埋没過程で遺物が自然に流入したとは考え難く、遺物を多く含む土で住居に埋め込んだのではないかと推察される。さらに、両住居のカマドの検出状況は、SI838住居では瓦・粘土の構築材は全て持ち去ったようで残存しておらず、SI840ではカマド煙道部の構築材である瓦は残存していたが、燃焼部は河原石の支脚を除き瓦・粘土全て持ち去ったような状態であった。特に、SI838住居のカマド内には、多くの土器類と瓦類が廃棄されたような状態で出土したが、カマド内女瓦とカマド前面の女瓦が接合し、2枚の完形品となるなど特異な出土状況であった。これについては後ほどふれることにする。以上のような調査結果から、これらの住居は武蔵国分寺の最終修造に伴って短期に設置されたものと考えられる。

武蔵国分寺の大規模修造（武蔵国府を含む主要な建物の建替えなど）は天平神護2年（766）、承和12年（845）、元慶2年（878）の計3回実施されたと考えられているが、その修造体制も尼寺跡周辺で出土する2時期（8世紀後半と9世紀後半）の「山田」墨書土器の検討によって、建築資材の輸送や集積に適した東山道武蔵路に近い尼寺跡北西の武蔵台遺跡周辺に国分寺と国府の修造に関わる役所の出先機関が設置され、この地域を拠点に事業が推進されたことが推定されている（有吉2016）。最終修造期の所用瓦を生産した南多摩窯跡群御殿山地区では、軒先瓦の出土量は極端に少なく、男瓦・女瓦が圧倒的に多い。こうしたことから最終修造期は、それまで実施された大規模修造時のような武蔵台遺跡周辺を拠点とする集中的な修造体制は採られず、修造対象の堂塔（註5）に近接する地域が短期に活用されたと推察される。また、SI838住居ではカマド内には多くの土器類と瓦類が廃棄されたような状態で出土し（図版10・11）、カマド内女瓦とカマド前面の女瓦が接合し2枚の完形品となるなど特異な出土状況が認められた（第75図）。当初は、焼土面に立つ男瓦片（12）を支脚と理解したことで、カマド構築の際に破損瓦の再利用ではなく完形女瓦（14・15）を割って燃焼部側壁に使用した特殊な事例と考えたが、支脚とした男瓦は接合した広端部分が上部に「T」字形になるなど、支脚とするには不自然な状態であり、しかも燃焼部側壁の14-4を含む瓦（14-2・3、15-5）は側壁から離れていて構築材と考え難いこと、割った完形女瓦の半分以上がカマド前面の床上に残存していること、14-4を含む瓦はカマド内に廃棄されたような状態で出土した多くの土器類および瓦類と一体的な存在であることなどを考え合わせると、最終修造終了後の住居（カマド）廃棄に当たって何らかの祭祀的な行為が行われたのではないかと推察される。

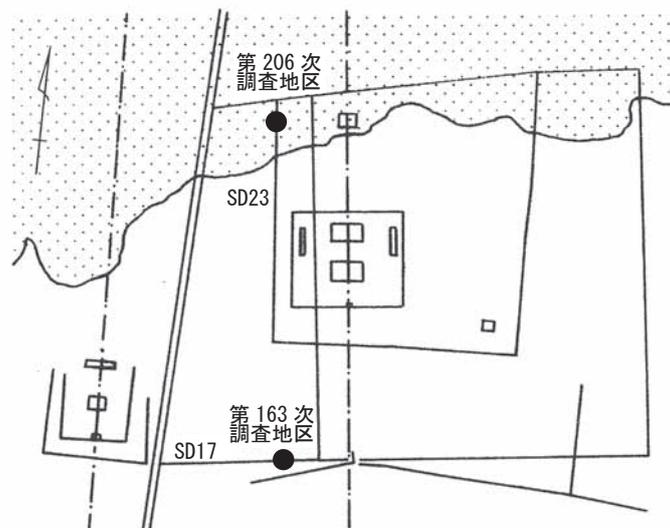
## ③ 武蔵国分寺変遷第Ⅲ期（衰退期）の実態について

10～11世紀代とされる第Ⅲ期は、寺院地および僧寺伽藍地区画溝の埋没などから衰退期として設定されているが、最近では10世紀代に国分寺全域で竪穴住居が拡充する傾向にあることが明らかにされ、10世紀代の第Ⅲ期（第2次整備期）と10世紀末～11世紀代の第Ⅳ期（衰退期）に区分する見解も出されている（江口2014）。そこで、改めてその実態について整理しておくことにしたい。

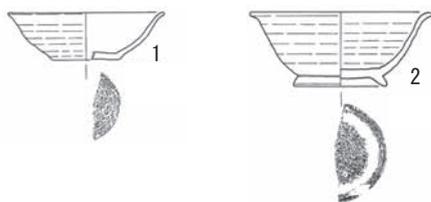
そもそも衰退期の特徴的な現象と理解されてきた寺院地および伽藍地区画溝の埋没については、前者が第163次調査の寺院地南辺区画溝（SD17）埋没後に築造されたSI300住居の年代観（10世紀第2四半期頃）、後者が第206次調査の僧寺伽藍地西辺区画溝（SD23）の埋没後に築造されたSI324住居の年代観（11世紀後半頃）が根拠になっている（第76図、国分寺市遺跡調査会2001）。報告書の年代観にしたがえば、区画溝の埋没は寺院地が先行し10世紀第2四半期以前ということになるが、これは武蔵国分寺最終修造期（9世紀末～10世紀第1四半期）から余り時間が経過しておらず、少し早すぎる



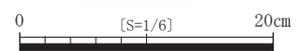
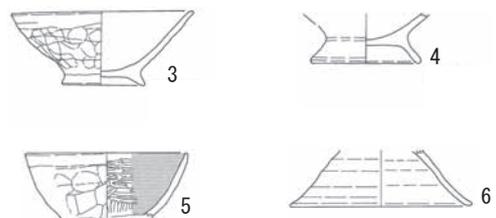
第75図 SI838 カマド 女瓦接合図



第163次調査 SI300 出土遺物



第206次調査 SI324 出土遺物



第76図 第Ⅲ期（衰退期）関連調査地区の位置と出土遺物

のではないと思われる。SI300住居からは須恵器坏と高台付埴の2点が出土しており、坏は体部が内湾し、口縁部がやや外に開くものでG 5 窯式後半に相当する（八王子市南部地区遺跡調査会2001）。高台付埴は体部が内湾し、口縁部が強く外反するものであり、G 5 窯式後半の直線的な漏斗状で低い張り付け高台のもの（埴B）とは少し異なる。また、この2点の須恵器と同型のものが市立第四中学校地のSI67住居出土遺物に見られ（国分寺市遺跡調査会1992）、当住居ではG 5 窯式後半の高台付皿（皿B）が伴出している。以上のことなどからSI300住居の年代観はやや下り10世紀第3 四半期頃に、その結果区画溝の埋没は10世紀中葉頃になるものと考えられる。

さて、本調査地区は寺院地内の「苑院・花園院」北隣接地にあたるが、寺院地区画溝埋没後（10世紀中葉以降）の状況を見ていくことにしよう。周辺の住居が明らかになった市公共下水道工事に伴う調査の成果を含めて検出された住居の時期を整理すると次のようになる（第77図）。

#### 寺院地内

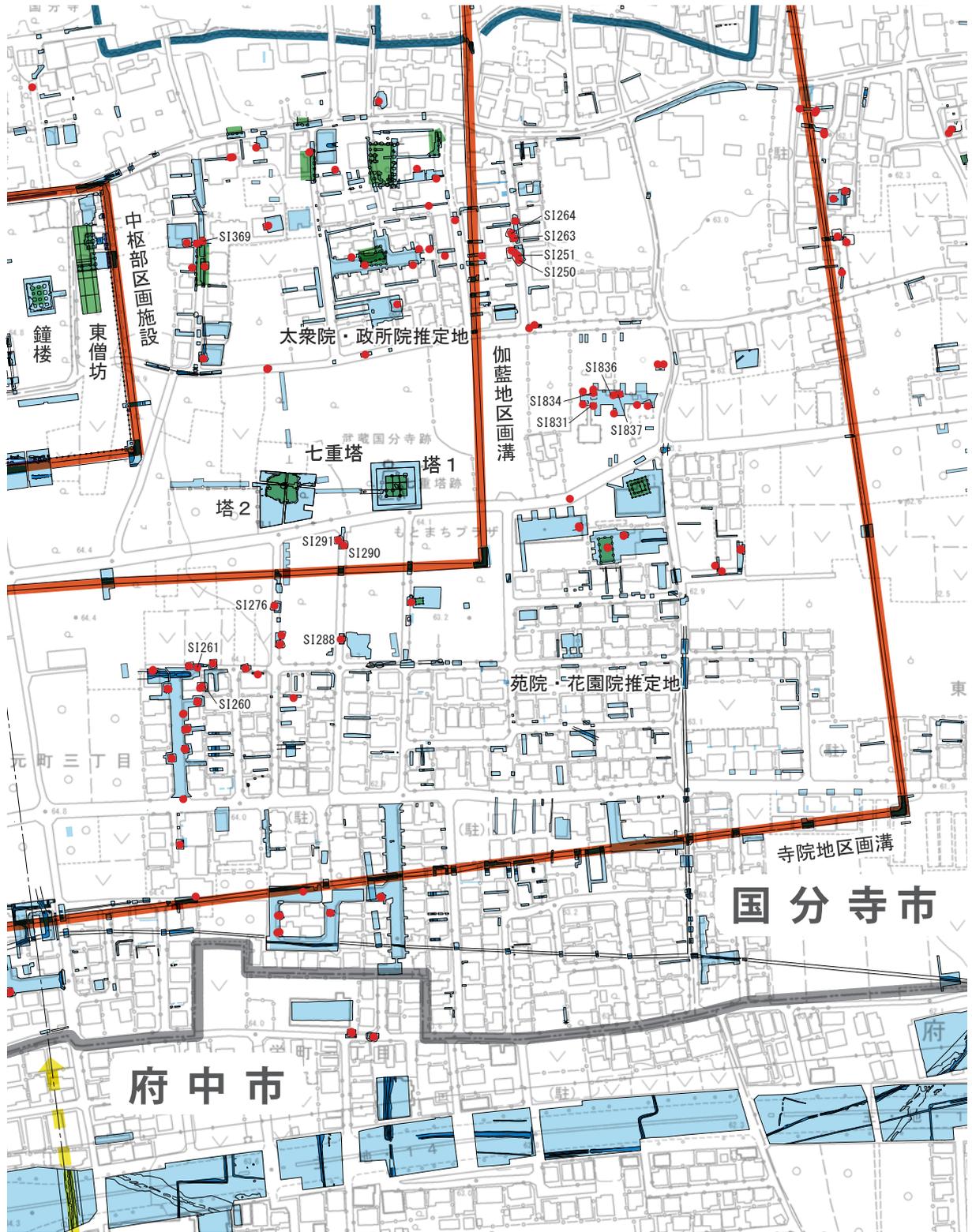
本調査地区	10世紀末～11世紀初頭	SI834・(SI837)
	11世紀中葉～11世紀後半	SI831・SI836
本調査地区北地区	11世紀代	SI250・251
	10世紀後半代	SI263・SI264
本調査地区南西地区	11世紀初頭	SI260・261・276・288

#### 僧寺伽藍地内

太衆院等推定地区	12世紀第1 半期	SI369
塔南地区	11世紀初頭	SI290・SI291

寺院地内においては、寺院地区画溝埋没後（10世紀中葉以降）に本調査地区北地区で10世紀後半代の住居が存在するが、概ね10世紀末～11世紀初頭の頃に集中している。このことから、寺院地内においては区画溝埋没後も10世紀末頃までの期間は寺院地の存在意義は認識されていたものと推察される。また、伽藍地内においては伽藍地区画溝の埋没は11世紀後半以前と考えられているが、塔南地区では寺院地内と同様に11世紀初頭の住居が確認されており、この現象を10世紀末頃に伽藍地と寺院地が一体的にその存在意義を失ったとみるのか、今後の事例の追加を待って検討すべき課題であろう。

以上述べた内容を改めて整理すると、寺院地区画溝埋没後（10世紀中葉以降）の寺院地内に住居が出現するのは概ね10世紀末～11世紀初頭であることになり、10～11世紀代とされる第Ⅲ期（衰退期）については10世紀代と10世紀末～11世紀代の2期に区分する江口氏の見解が妥当なものであることが認められる。したがって、とりあえず第Ⅱ期を9世紀後半～10世紀代に、第Ⅲ期を10世紀末～11世紀代にそれぞれ修正する必要があるものとする。



 調査トレンチ	 元町用水
 区画溝	 市境
 掘立柱建物・礎石建物	
 竪穴住居 (SI) 本文に言及のある住居について番号を付記した。	

0 [S=1/300] 10m

この地図は、東京都知事の承認を受けて、東京都縮尺2,500分の1地形図を利用して作成したものである。(承認番号) 3 都市基交第 4 号

第 77 図 調査地区周辺の遺構分布状況

## 註

- 1 武蔵国分寺跡ではこれまで実施された発掘調査の検出遺構および出土遺物の検討によって第Ⅰ期（創建期、8世紀後半代）、第Ⅱ期（整備・拡充期、9世紀後半代）、第Ⅲ期（衰退期、10～11世紀代）の大きく三期の変遷をたどったことが想定されている（中道2016）。この内、第Ⅰ期は『続日本紀』天平13年（741）の国分寺建立詔の発布を、第Ⅱ期は『続日本後紀』承和12年（845）の七重塔再建記事を、それぞれ上限とした年代を想定している。「塔再建期」の名称は、特に第Ⅱ期を象徴する表現として使用されている。
- 2 本資料の特徴は①還元焰と酸化焰焼成の部分がある、②口縁部が直立し口縁高が高い、③鏝より下部にヘラケズリが無いなどである。これらの特徴を手掛かりに羽釜の出土量が多い群馬県に類例を探すと清里・陣馬遺跡出土土器編年（中沢悟他1982）の第4期（10世紀後半代）から第5期（10世紀前半代）に所属する羽釜と、さらに有馬条里遺跡出土土器編年（大塚昌彦他1983）の第Ⅳ期（11世紀前半代）から第Ⅴ期（11世紀中葉）に所属する羽釜に類似するようである。また、武蔵国分寺跡では須恵器羽釜の出土例は極めて少なく、管見によれば尼寺跡第84次調査の2例のみである（国分寺市遺跡調査会1989）。ただし、報告書によると1例は鏝より下部全面に平行タタキ痕があることから羽釜とは思わず、突帯付の四耳壺のような器種が想定されることから、除外される。もう1例は還元焰と酸化焰焼成の部分があつて、鏝より下位の胴部中位以下にヘラケズリがある特徴を有し、SI834出土の羽釜とほぼ同じ時期のものと思われる。
- 3 同様の筒状製品は落川遺跡（日野市）で出土しており（福田健司1997）、完形品で長さ2.9～5.0cm、径0.8～1.6cm、重さ5.0～14.5gである。本資料はこれらと比較するとやや大きい。
- 4 註1と同じ
- 5 武蔵国分僧寺跡では、金堂・講堂・塔1などから南多摩窯跡群御殿山地区で生産された模骨文字「大」・「上」・逆字「上」・「山万」・「+」が出土しており、最終修造の対象になった建物であることが分かる（依田2018）。

## 引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2015 『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』
- 有吉重蔵 2016 「武蔵国府城と京墨書土器について」『古代の坂と堺』古代東国の考古学4 高志書院
- 有吉重蔵 2018 「武蔵国分寺瓦の研究」『古瓦の考古学』考古調査ハンドブック18 ニューサイエンス社
- 江口 桂 2014 『古代武蔵国府の成立と展開』同成社
- 大塚昌彦他 1983 『有馬条里遺跡』群馬県渋川市教育委員会
- 加藤恭朗他 2015 『南比企窯と東金子窯（Ⅱ）－東金子窯の開窯と9世紀の編年－』古代の入門を考える会
- 黒尾和久 2008 『落川・一の宮遺跡－石坂事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』石坂武・石坂みどり、落川区画整理地区（石坂事業地）遺跡調査団
- 国分寺市遺跡調査会 1988 『武蔵国分寺跡発掘調査概報ⅩⅡ－昭和50～53年度公共下水道面整備に伴う調査－』
- 国分寺市遺跡調査会 1992 『武蔵国分寺跡発掘調査概報ⅩⅧ－市立第四中学校建設に伴う第2～5次調査－〈図面・図版編〉』
- 国分寺市遺跡調査会 1994 『武蔵国分寺跡発掘調査概報ⅩⅩ－国分寺市公共下水道面整備南部地区19号工事に伴う調査－』
- 国分寺市遺跡調査会 2001 『武蔵国分寺跡発掘調査概報25－昭和55～59年度 僧寺域内等の調査－』
- 国分寺市遺跡調査会 2005 『武蔵国分寺跡発掘調査概報30－北方地区・（仮称）国分寺プロジェクト計画工事に伴う調査－』
- 末木啓介 2004 「北武蔵の羽釜」『研究紀要第26号』埼玉県立歴史資料館
- 東京都建設局・武蔵国分寺関連（府中市計画道路1・2・1号線の2）遺跡調査会 1985 『武蔵国分寺跡発掘調査報告－南方地区・府中市計画道路1・2・1号線の2）建設に伴う調査－』
- 中沢 悟他 1982 『清里・陣馬遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中道 誠 2016 『国指定史跡武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書Ⅰ－史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査－〔遺構編〕』国分寺市教育委員会
- 西脇俊郎・山口辰一 1980 「武蔵国府・国分寺出土土器の変遷（試案）」『文化財の保護第12号 特集：武蔵国府と国分寺』東京都教育委員会
- 西脇俊郎 1981 「Ⅵ 小結 1. 出土土器について」『武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅴ－市立第四中学校建設に伴う第1次調査－』武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 八王子市南部地区遺跡調査会 2001 『南多摩窯跡群－八王子みなみ野シティ内における古代窯跡の発掘調査報告－Ⅳ』
- 服部敬史他 2011 「南多摩窯跡群須恵器編年の暦年代検討」『八王子市史研究』創刊号 八王子市
- 福田健司 1997 『落川・一の宮遺跡Ⅱ 遺物編〔第一分冊〕』・『同〔第二分冊〕』日野市落川 遺跡調査会
- 福田健司 2002 『落川・一の宮遺跡Ⅲ 総括編〔第二分冊〕』落川・一の宮遺跡（日野3・2・7号線）調査会
- 福田健司 2017 『土器編年と集落構造』考古調査ハンドブック16 ニューサイエンス社
- 福田信夫 1984 「武蔵国分寺跡出土の土師質土器について」『東京考古』第2号 東京考古談話会
- 仏教遺跡調査特別委員会 1984 『武蔵国分寺跡遺物整理報告書－昭和31・33年度－』日本考古学協会
- 松田隆夫・大倉利明 1988 「立川段丘と凹地地形について－府中市周辺の立川面の区分について－」『府中市郷土の森紀要』第1号 府中市郷土の森博物館
- 山口辰一 1984 「武蔵国府関連遺跡における土器編年試論」『武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ』府中市教育委員会・府中市
- 依田亮一 2018 『国指定史跡武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書Ⅱ－史跡保存整備事業に伴う事前遺構確認調査－〔遺物編〕』国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会
- 依田亮一 2020 「武蔵国分寺跡と古代影向寺の塔遺構を比較する」『国指定5周年シンポジウム 橘樹郡誕生！～橘樹郡家・古代影向寺どうしてここに？～』川崎市教育委員会



1. Aトレンチ全景（西から）



2. Aトレンチ全景（東から）

図版 2



1. Bトレンチ全景 (西から)



2. Cトレンチ全景 (西から)



3. Dトレンチ全景 (西から)



4. Eトレンチ全景 (西から)



5. Fトレンチ全景 (南から)



6. Gトレンチ全景 (南から)



7. Hトレンチ全景 (西から)



8. Iトレンチ全景 (西から)



1. 基本層序 (南から)



2. SK3491J 完掘全景 (北から)



3. SK3493J 完掘全景 (南から)



4. SK3494J 完掘全景 (北から)



5. SI831 床面検出状況 (北から)



6. SI831 掘方全景 (南から)



7. SI831 土層断面 (東から)



8. SI831P1 全景 (東から)

図版 4



1. SI831P2 全景 (北から)



2. SI831P3 全景 (東から)



3. SI832 掘方全景 (南から)



4. SI832 土層断面 (南から)



5. SI833 床面検出状況 (北から)



6. SI833 土層断面 (北から)



7. SI833 カマド廃絶時 (西から)



8. SI833 カマド土層断面 (南から)



1. SI833P1 全景 (西から)



2. SI833P2 全景 (南から)



3. SI834 床面検出状況 (西から)



4. SI834 東西土層断面 (南から)



5. SI834 南北土層断面 (東から)

図版 6



1. SI834 掘方全景 (西から)



2. SI834 遺物出土状況 (南から)



3. SI834 カマド廃絶時 (西から)



4. SI834 カマド掘方 (西から)



5. SI834 カマド南北土層断面 (西から)



6. SI834 カマド東西土層断面 (北から)



7. SI834 床下土坑全景 (西から)



8. SI834P1 全景 (北から)



1. SI835 床面検出状況（東から）



2. SI835 南北土層断面（東から）



3. SI835 東西土層断面（北から）



4. SI835 掘方全景（北東から）



5. SI835 遺物出土状況（南から）

図版 8



1. SI835 カマド廃絶時（西から）



2. SI835 カマド南北土層断面（西から）



3. SI835 カマド東西土層断面（北から）



4. SI835P1 全景（北から）



5. SI836（左）・SI837（右）床面検出状況（北から）



1. SI836 東西土層断面 (南から)



2. SI836 南北土層断面 (東から)



3. SI836 (左)・SI837 (右) 掘方全景 (北から)



4. SI836 カマド廃絶時 (南から)



5. SI836 カマド東西土層断面 (南から)



6. SI836 カマド南北土層断面 (西から)



7. SI837 東西土層断面 (南から)



8. SI837 南北土層断面 (東から)

図版 10



1. SI837 カマド廃絶時（南から）



2. SI837 カマド南北土層断面（南から）



3. SI838 床面検出状況（西から）



4. SI838 東西土層断面（北から）



5. SI838 掘方全景（西から）



6. SI838 遺物出土状況（西から）



7. SI838 カマド廃絶時（西から）



8. SI838 カマド遺物出土状況（西から）



1. SI838 カマド南北土層断面 (西から)



2. SI838 カマド東西土層断面 (南から)



3. SI838P1 全景 (北から)



4. SI838P2 全景 (東から)



5. SI838P3 全景 (東から)



6. SI838P4 全景 (東から)



7. SI839 床面検出状況 (北から)



8. SI839 土層断面 (北から)



1. SI840 床面検出状況（北から）



2. SI840 南北土層断面（東から）



3. SI840 東西土層断面（北から）



4. SI840 掘方全景（北から）



5. SI840 遺物出土状況（北から）



1. SI840 カマド廃絶時（西から）



2. SI840 カマド近景（南西から）



3. SI840 カマド近景（北西から）



4. SI840 カマド南北土層断面（西から）



5. SI840 カマド東西土層断面（南から）



6. SI840 床下土坑全景（北から）



7. SI840P1 全景（西から）



8. SI840P2 全景（北から）

図版 14



1. SI840P3 全景 (西から)



2. SI840P5 全景 (西から)



3. SI840P6 全景 (西から)



4. SI840P7 全景 (南から)



5. SI841 床面検出状況 (南から)



6. SI841・SI842 土層断面 (南から)



7. SI841P1 全景 (東から)



8. SI841P1 全景 (南から)



1. SK3477 完掘全景 (北から)



2. SK3479 完掘全景 (東から)



3. SK3480 完掘全景 (北から)



4. SK3481 完掘全景 (東から)



5. SK3482 完掘全景 (北から)



6. SK3483 完掘全景 (南から)



7. SK3487 完掘全景 (西から)



8. SK3489 完掘全景 (北から)



9. SK3490 完掘全景 (南から)



10. P-1 完掘全景 (南から)



11. P-2 完掘全景 (西から)



12. P-3 完掘全景 (西から)



13. P-4 完掘全景 (東から)



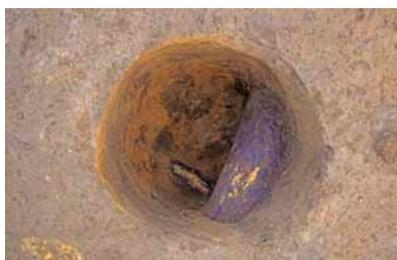
14. P-6 完掘全景 (南から)



15. P-7 完掘全景 (南から)



16. P-8 完掘全景 (東から)



17. P-12 完掘全景 (西から)



18. P-15 完掘全景 (西から)



1. 作業風景



2. 作業風景



3. 作業風景



4. 作業風景



5. 作業風景



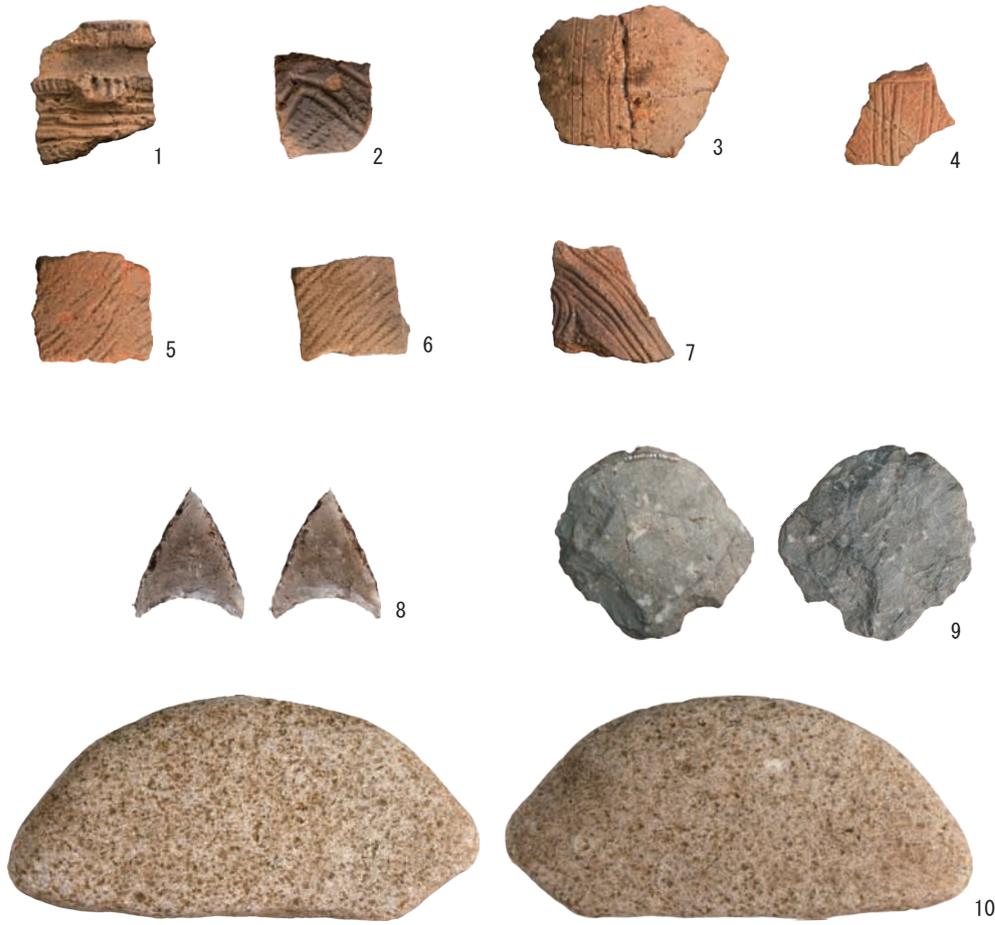
6. 作業風景



7. 作業風景



8. 作業風景



1 ~ 7、9、10 ≒ 1/3  
8 ≒ 1/1

1. 縄文時代出土遺物



1 ~ 5 ≒ 1/3  
6 ≒ 1/4  
7 ≒ 1/2

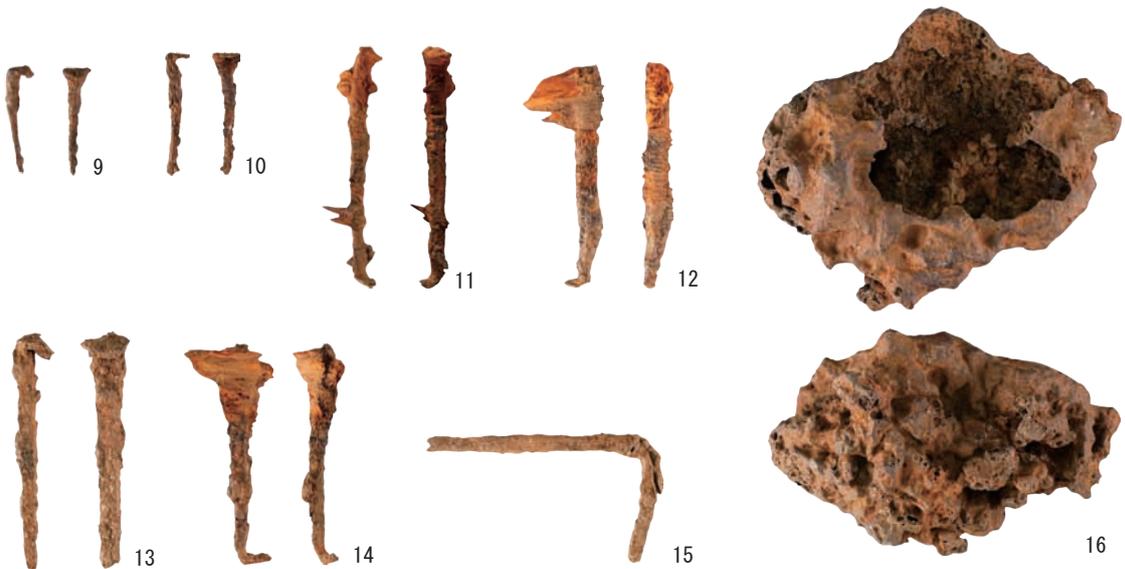
1 ≒ 1/4

2. SI831 出土遺物

3. SI833 出土遺物



1. SI834 出土遺物



1 ~ 7=1/3  
8=1/4  
9 ~ 16=1/2

1. SI835 出土遺物



1. SI836 出土遺物



1 ~ 5 ≐ 1/3  
6 ≐ 1/4  
7 ≐ 1/2

2. SI837 出土遺物



1. SI838 出土遺物 (1)

1 ~ 11 = 1/3



15 (模骨文字) : 1/2



15  
12 ~ 15 = 1/4



5 (文字部分) : 1/2

1 ~ 11 ≒ 1/3

1. SI840 出土遺物 (1)



12



13



14



15

12≒1/3  
13~15≒1/4



15 (文字部分) : 1/2



17 (文字部分) : 1/2



16 ~ 19 = 1/4  
20 ~ 24 = 1/2

1. SI840 出土遺物 (3)



1. SI841 出土遺物



2. SI842 出土遺物

SK3480



SK3482



SK3483



SK3489



3. SK3480・3482・3483・3489 出土遺物



文字部分：1/2

文字部分：1/2

遺構外-1・2：1/3  
遺構外-3～5：1/4

4. 遺構外出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	こくぶんじし むさしこくぶんじあと (だい762じちょうさ)							
書名	国分寺市 武蔵国分寺跡 (第762次調査)							
副書名	— 興和地所株式会社 宅地造成・分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	有吉重蔵 石村 崇 藤代聖一 平塚恵介 依田亮一							
編集機関	国分寺市教育委員会 トキオ文化財株式会社 (旧社名: 共和開発株式会社)							
所在地	国分寺市教育委員会: 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 トキオ文化財株式会社: 〒206-0011 東京都多摩市関戸5-1-14							
発行年月日	令和3年(2021)9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むさしこくぶんじあと 武蔵国分寺跡	とうきょうと 東京都 こくぶんじしにしもまち 国分寺市西元町 さんちようめ 三丁目26	13214	10・19	35° 41’ 30’	139° 28’ 30’	2020年 12月1日 ∩ 2021年 9月30日	364.7 m <sup>2</sup>	宅地造成・分譲 住宅建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
武蔵国分寺跡	寺院跡 集落跡	縄文時代		土坑3基		縄文土器・石器		立川段丘上の早期 陥し穴の調査
		平安時代		竪穴住居跡12軒 土坑17基 ピット18基 (時期不明含む)		土師器 須恵器 土師質土器 灰釉陶器 緑釉陶器 瓦 鉄製品 石製品		塔1の東方寺院 地区の調査
要約	第762次調査区は塔1東方の寺院地内に所在するが、9世紀末～10世紀第1四半期の住居群と10世紀末～11世紀後半の住居群が検出された。前者は武蔵国分寺の最終修造期に関わる住居群、後者は10～11世紀代の武蔵国分寺変遷第Ⅲ期(衰退期)に関わる住居群であることが明らかになった。特に後者では住居の年代観から武蔵国分寺跡変遷第Ⅲ期の時期区分修正の必要が生じている。また、縄文早期と考えられる陥し穴が確認された。							

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なく、この報告書の一部を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出典を明記してください。

## 国分寺市 武蔵国分寺跡 (第762次調査)

— 興和地所株式会社 宅地造成・分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

発行日 令和3(2021)年9月30日

編集 国分寺市教育委員会

トキオ文化財株式会社

発行 国分寺市教育委員会

印刷 株式会社 東プ リ

令和4年(2022)2月3日 デジタル版作成